

MLCへようこそ！

芳田尚哉

「終わった……………」

誠司は椅子の背もたれに全体重を預けて大きく伸びをした。

「お疲れさま……」

梢も大きく体を伸ばす。

結局、年を越してしまった。

年末、新年とプログラムを書く事に忙殺されてしまった。

ただ、オート起動プログラムは作成に時間が掛かるので、パスワード入力方式になってしまったが。結果的に、MLCでの直接起動となってしまったが、それはグビディがなんとか解決してくれるはずだ。

兎にも角にも、これで、ようやく元の生活に戻れる。

誠司は大きな欠伸をする。

ここしばらくは、ろくに寝ていなかったのだから、ここにきて疲れが一気にきた。だがそれも心地いい疲れだ。

なんの手掛かりもなく、どうしようもなく、焦っていただけのあの頃が懐かしい。数ヶ月前の事なのに、ずっと昔の事に思えるのだから不思議だ。

「アンカープログラムは正常に作動しているのでしょうか……」

先日起動させたアンカープログラムが正常に作動していなかった場合、この修復プログラムが意味を成さないかもしれない。

「きっと大丈夫よ」

誠司を励ますように梢が言った。それは自分に向けてでもある。

「あとは信じるしかないですね」

「そうね」

「つうわけで、グビディ、頼むぜ」

誠司はどこともなしに呟いた。

『まかせとき』

その声はなにもない場所から聞こえた。

誠司と梢は、完成させた修復プログラムをグビディに預ける。

「亜依、急いでくれ。早く修復プログラムを起動させるんだ」

できる事はすべてした。

最善の行動をとったはずだ。

出来る事がまだあるとするならば――

誠司にはもう、祈る事しかなかった。

「よっしゃ、完成だ！」

誠司は大きく伸びをした。

その声に梢が振り返る。

「完成したの？」

その声には喜びが感じられた。

「ええ、十パターン、なんとか終わりました」

そう言った誠司は満面の笑みだった。

やり遂げた満足感でいっぱいだった。

「もっとも、最終チェックが残っていますけど」

このプログラムにミスは赦されない。

間違いがあつては元も子もない。完璧でなければならない。

間違つてもかもしれないという事を念頭に、ゆっくりと確実にプログラムを目で追っていく。

慢心は崩壊を招く。

疑心は確実に生む。

ゆっくり、ゆっくり……………ひとつひとつを確認していく。

その作業に一週間で費やした。

そして――

「よし、これで大丈夫だ」

今度こそ本当に完成した。

あとは、梢の修復プログラムの完成を待つばかりである。

「ごめんなさい、ちょっと遅れてて……」

梢は申し訳なさそうに誠司を見る。

もっとも、修復プログラムの方が複雑であり、なおかつ、プログラム作成に掛かりきりだった誠司とは違い、通常の業務もこなしていたのだから当然の事である。

遅れに対して責めるつもりは毛頭ない。だが、梢としては誠司の気持ちが変わらなくもないので、待たせてしまっている事に責任を感じてしまう。

「それじゃ、数ヶ所に打ち込みましょうか」

「そうですね」

修復プログラムの完成も間近だ。

先にアンカープログラムを起動させておいた方がいいだろう。直接原因箇所に打ち込めるわけではないので、効果が出るまで時間が掛かる可能性がある。それに、効果がゼロの可能性も否定できない。

だからこそ、事前に打ち込む必要があつた。

梢は修復プログラムの作成を中断し、ブロークンプログラムの起動準備を始める。これでMLCの壁に穴を開け、その中にプログラムを送り込むのだ。

「座標軸固定。各プログラム座標指定完了」

誠司が梢に言う。

「ブロークンプログラム起動準備完了。椎崎くん、準備はいい？」

「はい」

誠司は力強く頷く。

「ブロークンプログラム、起動！」

梢はEnterキーを押した。

ブロークンプログラムが起動する。

……………。

ほんのわずかな空白の時間。

徐々にではあるが変化していく画面。

「障壁に空洞を確認。アンカープログラム起動！」

誠司はモニターをじっと見つめ、Enterキーを叩く。

十のアンカープログラムがそれぞれの場所目掛けて進攻していく。

「アンカープログラム侵入確認。……………アンカープログラム起動波動確認。…………よしっ、なんとか動いてる」

それを確認した誠司は、全身の力が抜けるのを感じた。

張りつめていたものが、一気にほぐれる。

だが、まだ終わっていない。

修復プログラムの完成がまだだ。

それがなければ、このアンカープログラムも意味がない。

「さて、アンカープログラムがちゃんと効果を発揮してくれる事を祈って……………修復プログラム作成、頑張りますか」

プログラム作成から一月が経とうとしていた。

毎日、本当に一日中とっていいほど画面に向かって作業をしているのだが、なかなか思うように進まない。

もどかしくて焦るが、失敗は赦されない。

どうしても慎重になる。

もちろんそれだけが理由ではなく、不慣れという事が最も大きな原因だ。初めての事に悪戦苦闘の日々をおくっている。

それでも、アンカープログラムが六パターン完成した。コピー&ペーストができればもっと楽なのだろうが、生憎とそれができない。打ち込む座標によってプログラム内容が大きく異なるためである。それ故、どれも最初から最後まで書き込まないといけないのだ。

打ち込む範囲をある程度しぼってはいるが、それでもアンカーは最低十パターンは必要だ。それとは別に修復プログラムが必要になるわけだが、これは主に梢が作成している。誠司はアンカーを作成し続けている。

吉田武暁氏が作成していたブロークプログラムは、グビディの指示通りに続きを書き、なんとか完成している。

ようやく、終わりがみえてきた。

この調子なら、なんとか年内には完成しそうだ。

梢は通常の勤務があるので、掛かりきりというわけにはいかない。その分、誠司が泊まり込みで作業をしている。

睡魔と闘いながら、彼は日々頑張っていた。

大切な人を助けるために。

そう——そのために。

「準備はいい？」

梢の言葉に誠司は頷いた。

どうしても緊張は隠せない。自然と身体が強張る。久しぶりに能力を解放するのだから、自然な事なのかもしれない。

「準備はよろしいですか？」

今度は梨架に言う。

MLCへ行く当日、椎崎誠司と富所史和、梨架は神崎家に来ていた。

誠司と梨架はMLCへ行き、プログラムの手掛かりを見つけなければならない。

宍神梢も解析を行っているが、それでも不明な点多すぎる。

以前に吉田武暁氏が書いたものが理解できない上に、この続きのプログラムが皆目見当もつかないのだ。

もう、MLCに行くしか解決策はない。

「行ってきます」

梨架は夫である史和に言う。

「ああ、頼む」

史和は自分が行けない口惜しさを抑える。

「『時の口』は庭先にあります。椎崎くん、お願いね」

「はい」

誠司は力強く答える。

「誠司君、君に頼る事しかできないが……よろしく頼む」

史和は誠司肩に手を置き目をじっと見ながら言う。

「わかりました。なにがなんでも亜依を目覚めさせます」

「ありがとう」

そう言った史和の目には、うっすらと涙が滲んでいた。それはなににもできない自分の口惜しさと誠司への感謝が込められていた

。

庭に出た誠司と梨架は『時の口』へ入り世界を移動した。

そうして到着したのはMLC——のはずだった。
だが、そこは——
「よういらっしやいましたな」
——Renkontomondoだった。
それは出迎えてくれたグビディが証明している。
「どうなってるんだ？」
誠司は首を傾げる。
誠司の能力であれば思う世界に行く事ができる。それなのに何故……？
もしかして、パートナーが垂依じゃないから？
理由は定かではないが、とにかく失敗という事だ。
「ちくしょう！」
思わず誠司が洩らす。
「……………」
梨架も言葉がない。
「あの……………どないしはったんや？ あんさんは知っとるけど、いつものお嬢さんはどないしはってん。なんや、この人も、よう似とるようやけど……………」
「おい、どうなってるんだよ！」
誠司は思わずグビディを掴みあげる。人形のような大きさなので、グビディは今にも潰されそうだ。
「ちょ、ちょっと待ちいや。なんや、放して……えや」
「誠司君……………」
梨架が誠司の手に自分の手を優しく重ねる。
「彼にあたってもしようもないわ」
わかっている。
そんな事はわかっている。
だが、どうしようもない！
「誠司君……………」
梨架がもう一度優しく諭す。
「……………」
誠司は悔しそうにゆっくりとその手を放した。
「……ぶつはあ～！ ほんま、どないしはってん！」
グビディはあちこち自分の身体を確かめる。
「それにしても、助かりましたわ。どなたか知りまへんけど、おおきに」
「ええ。こちらこそ、ごめんなさいね」
梨架はニコリと笑う。
「ほんまやで。どないしはったんや。……………と、あのお嬢さんはどないしたんや。あんさん、またパートナー代えたんか？」
その言葉を受け、誠司はグビディを睨め付ける。
しかし、誠司はなにも言わない。
ただ、グビディをじっと見ているだけだ。
「ほんま、怖いわ……今日のあんさん」
場を和ませるための冗談のつもりだったのだが、あまりに本気にとられてしまったので、グビディは誠司から距離をとる。
「垂依は……………眠っているの」
梨架が代わりに答える。
その言葉には悲壮感があった。誠司は改めて言葉にするのが怖くて言えなかった——その言葉。
「はい？」
グビディは、素っ頓狂な声を上げる。
「どういうこっちゃ？ お嬢はんが眠ってるって……………」
「実は……………」

梨架はグビディに今までの事を説明する。

誠司はなにも言えなかった。聞くだけでも辛い。もちろん、実の母親である梨架も辛い。だけど、その辛さを抑えても言わなければならなかった。親だから。

「なるほど……かくかくしかじかで、これこれうまうま——っちゅうわけか……」

話を聞いたグビディは、おおよその事態を理解したようだ。

「にしても、まさかMLCに行こうとしとったっちゅうのはやな」

グビディは深刻な顔になり、声も真剣なそれになる。

「どういう事だ」

ようやく誠司が口を開いた。

「あそこは……今は行かれへんで。あんさんらの予想通り、あそこは大変な事になつとるからな。もつとも、あんさんの能力なら突っ込めたかもしれへんけどな」

グビディは誠司を見る。

「……それは、俺と亜依ならって事か？」

「そうや。あんさんとお嬢ちゃん的能力はや。ほんま、見事なくらいのまぼろ級や

ねん。時空の能力の中でもずば抜けとる。せやから、もしかしたら可能やった

かもしれん。せやけど………そうやな、あんさんらはMLCについてどのくらい知ってるんや？」

誠司は首を振る。

「俺はなにも知らない。梨架さんに聞いただけだ」

誠司は梨架に視線を向ける。

「そうや、その人はどなたさんや？ わいは知らんやけど……」

「そうなのか？」

誠司は意外だったのか驚く。

「だって、この人も『時の口』で移動していたんだぜ？ お前が案内したんじゃないのか？」

「そんなん、わいだけちゃうさかいな。案内人やそれに類するのはぎょうさんおるさかい」

誠司は、なるほど……と頷く。

「初めまして。私は富所梨架。私を案内してパートナーと引き合わせてくれたのはプーポさんでした」

梨架は自己紹介をする。

「なるほど……プーポか………。初めまして、わいはグビディや。よろしゅうな」

梨架は、はい、と笑顔で答えた。

「で、あんさんはMLCに行った事があるっちゅうわけか？」

「はい。もう十数年も前ですけど」

「なるほど………それはおそらく、D i oが生まれる前やな」

梨架は、そうです、と即答する。

「まあ、きちんと説明しとかんとあかん。MLCっちゅうのは、その名の通り、世界の中心施設や。そこには、世界中のありとあらゆる情報が集まってくる。MLCはそれらを整理し、保管、管理するとこや。つまり、世界中の今までの歴史がそこにはあるんや」

グビディは自慢げに言う。

「それって、アカシクレコードか？」

誠司が呟く。

アカシクレコード——宇宙の誕生から、過去、現在、未来にわたる全ての歴史が記されたもの。

「残念やけど、それはちょっと違うで。アーカーシャはその宇宙の年表や。せやけど、MLCはもっと膨大な量を保存しとる。あんさんらとは違う世界を含めた全世界や。あんさんらが旅してきた色々な世界。それらの歴史も全て記録しとる。ちなみに、パラレルワールドとあんさんらが言つとる不確定未来もや」

唾然とするしかなかった。

その量は想像もできないものだ。

こことは違う宇宙、世界、次元……それら全ての過去と現在と未来——さらに不確定な未来。そんなものが全部……。いつたい、アカシクレコードの何倍になるというのだろうか。アカシクレコードだけでも想像できないものだ。

「そのMLCがどうも、D i oの存在確定で乱れたようやな。お嬢ちゃんらはその影響を受けてもうたんやろうな」

「どうすれば亜依は目覚める！」

誠司は興奮してグビディを掴む。

「ちょ、ちょい……放してえや。ほれ、なんとかしてえや」

グビディは梨架に助けを求めるが、梨架は今の会話を理解するので精一杯で、その余裕はない。

誠司はわかっている、梨架にすれば聞いた事のない単語があったりで、頭が混乱している。

「おい、グビディ！ さっさと教えて！」

「……せ、せやから……放してえや…………ほんま、あんさん………興奮……しす……ぎ……」

息も絶え絶えに助けを求める。

「あ、悪い」

誠司はようやく気づき、手をめる。

「ほんま、勘弁してや」

「悪い」

誠司は力無く頭を垂れる。

「で、そちらの梨架はんが理解できてないようやけど……」

グビディは、頭を抱えてっている梨架に気付いた。

「あ、私の事は気にせず、誠司君がわかっていれば大丈夫だろうから」

そう言って、また唸る。

「ほんじゃ、まあ、そうさせてもらいまひよか。あんさん相手やと、説明が少のうすんで楽やさかい」

「そりやどうも」

「でや、そのMLCやけど、マスターっちゅうプログラムが全てを統括しとんねん。セイバーちゅうプログラムが補佐しとるけど、メインはマスターや。あとは、他のプログラムがそれぞれの役目を果たしとる」

「つまり、MLCが混乱してるのは、そのマスターになにかあったって事か？」

グビディは嬉しそうに笑う。

「やっぱり理解早いわ……。おそらく、セイバーもやろうな……」

「って事は、マスターとセイバーをなんとかできればいいわけか」

「その通りや。マスターを制御し直す……ちゅうか、マスタープログラムを正常化させるプログラムが必要っちゅうわけや。まあ、わいも今MLCがどうなってるかちゅう詳しい事はわからんさかいな……」

（という事は、吉田家で見つけたあれはそういうプログラムだったというわけか……。しかし、本人が作成するつもりだったからだろうけど、自分しかわからないメモじゃ、俺たちにはわからん）

誠司は頭を抱える。

「そういえば、詩稀のなんとか武暁ちゅう人やったかな、そのプログラム組んどったはずやで」

「おい、どうしてそれを知ってるんだ！」

誠司はまたしてもグビディを掴む。

「……あんさん……学習能力……あらへんか……ええ加減……学習……して……くれ……へん……か……な……」

誠司の手に力がこもり、グビディの声も小さくなっていく。

「あ、悪い……」

誠司は慌てて手を放す。

「で、どうしてそれを知っている？」

間髪入れずに訊く。

「そんなん、わいが教えたからに決まっとるやろ」

あっさりと言い切った。

「……」

誠司はその言葉が飲み込めずポカンと大きな口を開ける。

「どうしたんや？ おい、もっしもーし！」

グビディは誠司の目の前をびよこびよこ飛び回る。

しかし、誠司は無反応だ。

「どないしてん！」

グビディは、なおも飛び回る。

「……鬱陶しい！」

誠司は虫を払うように叩く。

「はがっ！」

グビディは墜落した。

「なんや、わいっていったい……」

べしやりと落とされたグビディがぼやくが、誰の耳にも届いていない。

「おい、教えたって事は、お前はわかってるんだな」

誠司はグビディを拾うと、掴みあげる。

「なんなんや、ほんま……」

「だったら教えろ。俺にそのプログラムを教えてくれ」

「それが人に頼む態度なんか……？」

グビディは呆れるが、なにを言っても無駄だということも同時にわかった。

「教えますさかいに、ちょっと落ち着きなはれ。冷えた頭やないと、理解でけへんで。落ち着きなはれ」

「落ち着けるかよ！」

即答。

「少しでも早く垂依を目覚めさせてやりたいんだよ！ だから、早く教えろよ」

「せやから、落ち着きなはれって。余計に教えられへんがな。急ぐんやったらなおさらや」

「……………」

誠司は苦虫を嘔み潰したような顔になる。

「悪かった」

一転して穏やかな声で言う。

「それでええんや。ほな、教えたろか」

そう言って、グビディが説明を始める。

「——つまり、PML、がマスターで、NOY、ってのがセイバーの識別コードってわけか」

「せや。それでやな——」

誠司は真剣にグビディの説明を受ける。

「で、ここにD i oの能力値を入れて——」

「——そこは、これを入れるんやって」

「——これでプログラムは完成か？」

「せや。あとは、MLCに打ち込むんや」

「どうするんだよ」

「アンカーを数ヶ所に打ち込んだ方がええと思う。なんせ、マスターもセイバーもどこでどないなっとなるかわからへんさかいな……」

「なるほど、数打ちゃ当たる、か……」

「そういうこっちゃ。最後の修復プログラムは、わいが直接持っていけるさかい」

「で、そのために必要なのが——」

「この、ブロークンプログラムや。これがないとアンカーも打たれへん」

「ったく……面倒だな……」

「せやけど、前半部分はできとんのやで。ブロークンプログラムも九割は完成しとる。事前にしといたお蔭や」

「そうだな。それには感謝してるよ」

ホントに感謝してる。こうなる事を予想して、吉田武暁氏がプログラムを途中まででも組んでくれていた事には。完成前に亡くなってしまった事は悔やまれるが、基盤があるだけでも充分だ。

「そういうわけやさかい、頑張って組みなはれ」

「まあ、頑張ってみるさ」

誠司は力強く言った。

どうしてもしなければならない。

成し遂げなければならない。

「終わりましたか？」

梨架が笑顔で近付いてくる。

彼女は、自分には理解できないからと、少し離れた場所で待っていたのだ。

「はい。これでなんとかなりそうです」

誠司はにこやかに答えた。

「そう……よかった」

その顔を見て安心したのだろう、ふと梨架の身体から力が抜ける。

「大丈夫ですか」

誠司が慌てて身体を支える。

「ごめんなさい。まだ、解決したわけじゃないのにね。ちょっと安心したら……急に……」

「もう少しだけ待っていて下さい。亜依は俺が絶対に目覚めさせてみせますから」

「ありがとう」

神崎邸に戻り、誠司は早速グビディに教わった事を梢に告げた。

「——なるほどね……。なんとなくわかったわ。椎崎くん、サポートお願いね」

「わかっていますよ」

こうして、プログラム作成が始まった。

どこかの世界のどこかの国……どこかの時代にある一軒のお店。
そこは軽食や飲み物を提供している。
年中無休のそのお店には、毎日多くの客が訪れる。
その店の名前は――

『MLC』



山と海に挟まれた場所で軽食屋……平たく言えば喫茶店でもしようと思ったのが三年前。なんとか資金を貯めて、ようやく念願叶って店を出す事ができた。

今までオーナーなんてものにならなかった事がないので、不安でいっぱいだ。

だけど、料理には自信がある。この三年間、小料理屋で働いていたのだから当然だ。もちろん、調理師の免許も持っている。

趣味でカクテルなんかも勉強したので、その方面も大丈夫だろう。

昼は喫茶店、夜はバーというのもいいかもしれない。

近所周りをすませると、本当に出店するのだなと実感する。近所の方に迷惑を掛けないように努めよう。

カチャカチャとキッチンを整理する。別に散らかっているわけではないのだけど、なにかしていないと落ち着かない。

開店の前夜というものは、こんな気持ちになるのだろうか。

客席の方も気になりだし、椅子とテーブルと順に拭いていく。

雑誌もある程度揃えてある。

再びキッチンに戻ると、材料の確認をする。

大丈夫だ。

その流れで、仕込みのチェックもする。

問題ない。

あとは明日の開店を待つのみである……。

——カランカラン！

開店してから一時間ほどが経った頃、ようやくドアのカウベルが鳴った。

特に宣伝をしたわけでもないのに、こんなものだろう。これから、常連さんがつく事を祈るしかない。

「いらっしゃいませ」

最初に入ってきたお客様は、学生のようなだった。

「すみません……ここで勉強させてもらってもいいですか？」

少し……かなり控えめな態度だった。

「ええ、構いませんよ」

笑顔で言うと、彼の表情の弛んだ。

「ありがとうございます」

それでも遠慮して……というよりはマナーだな、隅っこの席に座った。

「ご注文はなににしましょう？」

問題集やノートを一通り出し終えた頃を見計らって訊いた。

「え、えっと……コーヒーをひとつ」

「かしこまりました」

一礼をしてカウンターに戻る。

受験勉強だろうか……。

そんな事を考えつつ、彼を横目で見ながら、コーヒーを淹れる。

瞬く間にコーヒーのいい香りが店内に充満する。やはり、これでこそ喫茶店。これぞ、喫茶店の香りというものだろう。

シュガーポットとミルクをお盆（トレイよりも、日本なんだからこっちでいいだろ？）に乗せ、おまけでビスケットを乗せたお皿を乗せる。それを彼の席に運ぶ。バイトの子がいた方がいいなど、ふと思った。まあ、それは店が軌道に乗ってからでいいだろう。

「お待たせしました」

お盆の上のものをもう一つテーブルを寄せて置く。

「あ、すみません」

慌てて参考書などを片付けようとしたのを止める。

「構いませんよ。受験勉強ですか？」

「……ええ、まあ。憧れの人がいまして、絶対にその人と同じ学校に行こうって……」

彼は少し照れながら言う。

「そうですか、頑張って下さい」

「ありがとうございます……あれ？ ビスケットなんて頼みましたっけ？」

「それは、お店からのサービスです。最初のお客様ですから」

「……………ありがとうございます」

恐縮したのか、少し時間があって答える。

「あまり来ないものですから、そういうの知らなくて……開店おめでとうありがとうございます」

「ありがとうございます。よろしければ、これからも来てくださいね」

「はい」

そこで言葉を切って、

「……でも、迷惑じゃないですか？」

自分のテーブルを見て言う。

「そんな事ないですよ。勉強、頑張って下さい」

彼は何度もお礼を言って、勉強を始めた。

しばらくその様子を見ていたが、本当に一生懸命だった。よほど、その人と同じ学校に行きたいのだろう。どんな人なのか気になるが、あまり詮索するわけにはいかない。もし、常連になってくれたら、その時にでも訊けばいいだろう。

お昼近くになって、数人のお客が来たが、彼はそのまま勉強を続けていた。

迷惑になるから、と出ていこうとしたのだが、引き止めた。思う存分ここで勉強して下さい、と。

そういうわけで、お言葉に甘えさせていただきます、と今に至る。

お昼にとサンドウィッチを注文してくれた。

そして、夕方になる頃、彼は何度もお礼を言って帰っていった。

昼過ぎ。夕方というには少し早い時間。

店内には一組のカップルがいるだけだった。カップルかどうかはわからないが、おそらくそうなのだろう。

「……やっぱ、喫茶店といえばメイド喫茶だな」

——スパン！

彼女の方が彼氏をスリッパで叩いた。どこから出したのかわからなかった。

「あんた、なにわけのわからない事を……」

「わかっていないのはお前の方だ。そう思いませんか？」

と、こちらに話を振ってくる。

「あ、いえ……」

「あんたね、お店の人を困らせてどうするのよ」

「そういえば、ウエイトレスさんとかいないんですか？」

「あんたね……すみません」

「いえいえ。まだ開店したばかりですし、軌道に乗ってきたら雇おうかと……。今は一人でもなんとかこなっていますので……」

アルバイトを雇うのはもう少し後の方がいいだろう。第一、今はそんな余裕がない。

「その時は、是非ともメイド服で！」

彼氏が親指を立てて歯をキラリとさせる。

——スパン！

またスリッパだ。

「……ホント、ごめんなさい」

彼女が何度も謝る。

「いえ、構いませんよ」

彼氏の方はまだ話し足りないのか、

「でも、あれってメイド服を着ているだけで、別にメイドさんじゃないんだよな……という事は、正しくはメイド服喫茶になるのか？ うん、そうだな」

なるほど……とつい納得してしまった。

彼女の方はというと、既に聞いていない。というか呆れてしまっている。

それから数分後、二人は出ていった。

ウエイトレスか……やはりいた方がいいのだろうか。だけど、まだ先の話だろう。今は一人で頑張るしかない。

今日はとても忙しく、クタクタになってしまった。

アルバイトを雇おうか……。先日の事を思い出す。

だが、こんな日ばかりではない。むしろ暇な日の方が多い。やはり一人で頑張るしかないのだろうか。

——カランカラン！

「いらっしゃいませ」

一人の男性が入ってくる。そして、そのままカウンターに座る。

「お酒も大丈夫なんですか？」

「はい、一通り揃えています」

夜はちょっとしたカフェバーだ。もちろん、昼間でも注文があれば出すが、やはり夜の方が多い。

「なにになさいますか？」

男性は少し考えて、

「ブルームーンは大丈夫ですか？」

「ええ。ブルームーンでよろしいですか？」

男性は無言で頷いた。どこか疲れた顔をしている。仕事の帰りなのだろうか。あまりプライベートな事に首を突っ込むわけにはいかないが気になる。

そんな事を考えながら、材料をシェーカーに入れていく。

ドライジン、バイオレットリキュール、レモンジュースだ。それらをシェークする。名前はブルーだが、紫色のカクテルだ。

「お待たせしました」

グラスに注いで出す。男性はそれをじっと見つめ、一口飲む。

「美味しいですね」

「ありがとうございます」

カクテルは本業ではないが、少しだけ教えてもらった。だが、今まで注文があまりなく、それもステアのものがほとんどだったので、シェーカーで作るのは初めてだった。

「仕事の後にカクテルというのは、やはりいいですね……」

彼が言うには、いつもは違うお店で飲んでいるのだそうだ。今日は近くにこの店があったので入ってみたという事だった。

「なかなかいい雰囲気ですね……たまに寄らせてもらいます」

「ありがとうございます」

さらに話を聞くと、男性は小説家らしく、今度ある作品が映画化されるのだそうだ。今日はその打ち合わせだったそうだ。

「でも、映画化なんてすごいですね……」

「ええ、本当に有り難いです。まあ、これからなにかとあると思うと憂鬱ですけどね」

「てっきり、監督やプロデューサーにお任せしているものだと思っていましたけど、原作者の方も色々あるんですね」

「いや……普通はそうなんだろうけど、嫌なんですよね。媒体が変われば別物なんですけど、どうしても譲れないものはあります……」

「大変ですね……」

「本当に」

男性はしみじみと頷く。

「でもまあ、頑張るしかないんですけどね。あ、とても美味しかったです。ごちそうさまでした」

しばらく話をして、男性は出ていった。

みんな、それぞれに大変なんだな……。

この店もそれなりに忙しくなってきたし、アルバイトを雇う事にしよう。

と、早速アルバイト募集のチラシをドアに貼る事にした。

チラシの効果は意外にあったらしく、すぐに一人の女の子が申し出てきた。少し大人しそうだけど、丁寧に優しい感じがする。妙な表現かもしれないが、癒される感じがした。

別の日に履歴書を持ってきてもらって面接をする事にした。その場で決めてもよかったのだけど、一応という事で。向こうがよければ採用しようと思っている。

で、その面接の日。

「えっと……」

履歴書に目を通す。今まで人のものを見た事がないのでどうすればいいのかよくわからない。綺麗な字だな……と、そんな事を考えてしまう。性格が出ているのだろうか。

「富所垂依さん……」

女の子——少女といえればいいのだろうか、年齢よりは幼く感じるので、女性というよりは少女がっている。

「はい」

少し緊張しているのだろうか、小声で頷いた。

「……えっと、今までにこういうバイトの経験は……？」

「……あ、いえ、ありません」

なんだかぎこちないお見合いのような感じになってきた。どうすりゃいいよ。

とりあえず、話題を変える事にした。っていうか、これが問題なのだ。

面接に来るという事は、働く気はある。そして、こちらも雇う気がある。で、そこで問題になってくると勝手に思っているのが、衣装……コスチュームもとい、ユニフォームだ。これは、この前に来た少年が話していたものが頭にあったので、こういうものをチョイスした。世の中にはいくつもあるようなので珍しいわけではないだろうが。

「えっと……その……バイトのユニフォームなんだけど……」

緊張してくる。絶対に逃げられる……。ドキドキだ。

震える手でトルソーを持ってくる。そして、掛けてある布を取る。

「……………」

沈黙。

「……………どうかな？」

別に露出系の衣装……いや、ユニフォームではない。

黒と白を基調としたゴシックロリータ風のエプロンドレスにレースのカチューシャ。わかりやすくいえば、いわゆるメイドさんを想像してもらえばいいだろう。そう、数日前のカップルらしい二人の会話でこうなったようなものだ。

だが、ただのメイドさんではメイド喫茶……いや——メイド服喫茶になってしまうので……って、この時点ですでにそうになっているな……。まあ、それだけだとなんなので、ワンパーツ付け加えてみた。それが……。

「あの……メイド服はわかるんですけど、これはなんですか？」

少女がおずおずと訊いてくる。その手には、問題のものがある。それは、細長い三角形のものが左右についている。

「あ、それは……いわゆるエルフ耳なんだけど……………」

「えるふみみ？」

少女は首を傾げる。当然だろう。自分もいきなり言われれば無言になる自信がある。

「やっぱり、こんな衣装じゃ嫌だよね。なんか、コスプレみたいでさ」

「あ、いえ……ちょっと恥ずかしいですけど……可愛いと思います」

着替えてみます、と言い奥に入っていった。

ちょっと……かなり意外だった。まさかこうなるとは……。

しばらくして少女が出てきた。そこには、メイドさんがいた。しかもエルフ耳の。それもただのエルフ耳ではない。通常、上を向いているエルフ耳を下向けにしてある。垂れエルフ耳ともいえるだろうか。か弱さが抜群だ！ 着ている本人の健気さとマッチしていて、そのか弱さが全身からにじみ出ている。

「……えっと……どうでしょう？」

しばらく別世界にいたようだ。彼女の声で現実に戻った。

「えっと……似合ってるよ」

月並みな台詞。

「でも、本当にいいの？」

「はい。やっぱり恥ずかしいですけど、可愛いですし……」

「……お、おはようございます。お帰りなさい。」

にこりと笑うその笑顔は殺人的でさえあった。

「じゃあ、明後日から来てもらってもいいかな？」

「はい。よろしくお願いします」

スカートを持ち、足を曲げて礼をする。……………これは本当に現実なのだろうか。っていうか、キャラが変わっていないか？
こんなキャラだったか？

なにもかもがわからなくなりそうだ。壊れてしまったのだろうか。

「あ、いや……こちらこそ」

そう言うのがやっとだった。

なにはともあれ、彼女を採用する事になった。

最初は戸惑われたりもしたが、彼女はあっという間に人気者になった。彼女が休みの日は、目に見えて客が少なかった。おいおい。

まさに看板娘となった。お蔭様で売り上げも好調だ、彼女がいる日だけ。

忙しさを緩和するために雇ったはずなのに、よけいに忙しくなったのは、嬉しい誤算だろうか、贅沢なのだろうか。

そんなある日、あの時の少年がやってきた。前は彼女と一緒にいたのだが、今回は一人だ。

「いらっしやいませ」

彼女が笑顔で言うと、その少年は、

「うわっ！ マジだ……。マジで……」

と、いきなりこっちに向かってきた。

「マスター！ マスター！ どうなってるんですか、これ。メイドさんが……しかもエルフ耳って……マスター！」

と、掴みかかってくる。彼女も他のお客もぼかんと口を開けて見ている。それほど、彼の勢いは凄まじいものがあった。

「ちょっと落ち着いて下さい」

「あ、申し訳ありません。いつもなら、こういう状況にはスリッパがどこからともなく炸裂してきやがりますので、どうにも抑える事ができないのです……」

そういえば、前も何回もスリッパで叩かれていたな……。彼女がストッパーになっていたわけか。

「で、これはどういう事ですか！」

「どうと言われましても……。アルバイトの子を雇ったんです」

「それはわかります。問題はその衣装ですよ！ なんですか、これは！」

ピシッとアルバイトの垂依ちゃんを指さす。

「やっぱり、ダメでしょうか……」

「逆です！ いいっ！ よすぎっ！」

「は、はあ……」

あまりの勢いに呆気にとられる。

「メイド服というだけでもいいのに、このエルフ耳！ いそうであまり見ないエルフ耳！ 安易に猫耳や犬耳を選択せず、マニアックにもエルフ耳とは……しかも、下向き！ 最高です！ あなたは素晴らしい！」

まさか、ここまで語られるとは思っていなかった。

「あんたは、なにやってんのっ！」

——スパン！ スパンスパン！

突如、軽快な音がした。

「……って一な」

「ごめんなさい。この馬鹿がなにか失礼な事をしたのでは……」

この前の彼女だった。やっぱり、保護者のように思える。

「あ、いえ……」

その勢いに気圧されてしまう。

「どうぞ、樹梨！ おれはこの店の衣装を褒めていただけだ。しかも大絶賛！」

——スパン！

「黙れ！ ……ホント、すみません」

樹梨と呼ばれた彼女は、恥ずかしそうに頭を下げる。

「本当に気にしないで下さい。本当に喜んで頂いていたようですから」

そこで初めて彼女は店内を見回し、垂依の存在に気付いた。

「オヴァ！ メイドだ！」

と、驚愕の声をあげた。

「こりゃ、この馬鹿が好きそうだわ……」

「あ、その……この前、お二人がメイド喫茶がどうのと話していたものですから、そういうものもいいのではと……」

「……まさか、この馬鹿の発言で……」

彼女は大きなため息を吐く。

「ホント、すみません」

「いえいえ、お蔭で繁盛していますし」

「そう言っていただければ……。……あ、この馬鹿、さっさと連れて帰りますので……」

「また、いつでも来てください」

「はい、すみませんでした」

少女は彼を引きずったまま店を出ていった。

その間、彼は、メイド服喫茶万歳！ と叫び続けていた。

あれから、お蔭様で繁盛してきた。常連さんも増えてきた。これも、アルバイトの彼女のお蔭であるところが大きい……と思う。

これには出資協力者でオーナーである I 氏も喜んでいいる。まあ、好き勝手させてもらっているだけで有り難いのだが。

——カランカラン♪

ドアのカウベルが今日もいい音を奏でる。

「いらっしやいませ」

今日はバイトの亜依ちゃんはお休みだ。目に見えてお客が少ない。——ホント、これには困ったものだ。もう一人雇って、ローテーションにすればどうだろうか……。って、今はお客様、お客様。

「どうぞ、お好きな席へ」

数人しかお客がない、というか、いつも世間話をするために来ている常連さんが一人いるだけだ。彼はカウンターに座っているので、テーブル席はどこも空いている。

二人はしばらく店内を見回して、奥のテーブルに座った。

それを見てから、お冷やを持っていく。

なんだか、初々しいカップルだった。中学生……いや、高校生だろう、なんだか大人しそうな少年だ。彼女の方も同じ様な雰囲気だ。大事そうにウサギのポシェットを持っている。

一瞬、その彼女のタータンチェックのプリーツスカートに目がいってしまう。あ、別に変な趣味じゃないんですよ。今度のバイトの子に着せるなら……いや、本当にそうじゃないんですってば。あ、いや……そうかもしれませんが……。別に、着せ替え人形ってわけじゃ……。なんだか、言い訳しているうちにドツポにはまってさあ大変！ それだけ、そのブルーをメインにブラウンとイエローが入ったタータンチェックが可愛かったんですよ。ちょっとシックに、ネイビーとグリーンのタータンもいいかな……とか思ってしまったわけです。明るく、レッドとグリーンもいいですけど、やっぱり個人的にはネイビーとグリーンの……って、そんな趣味では……ああ……。

さて、気を取り直して。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「えっと……ぼくは冷コー。あと、サンドウィッチ」

「え、あ……あたしは……カフェオレをお願いします」

「かしこまりました」

オーダーをとってカウンターに戻る。

作業をしながら時折その二人を見る。

「どうした、吉田さん」

「あ、いえ……」

常連の一人、白河慎次さんが声を掛けてきた。ここだけの話、彼は刑事らしい。

「ああ、あの子か……確かに可愛いな。だけど、変な気を起こすなよ。あんたを逮捕なんて、寝覚めが悪くなる」

「そんな事しませんってば」

「くれぐれも頼むぞ」

と、念を押されてしまった。

その間にもオーダーを作り終え、二人の所に運ぶ。

「お待たせしました」

アイスコーヒーとカフェオレ、そしてサンドウィッチを真ん中に置く。

「……では、ごゆっくり」

ずっと気になっていたのだが、二人ともあまり会話をしていない。別に仲が悪いとかではないようだ。ただ、緊張しているだけのだろう。本当に初々しい。

「ねえ、成ちゃん……」

「あのさ、その呼び方……」

「あ、ごめんなさい。でも、やっぱり……」

「まあ、いいんだけど」

そんな会話を聞いていると、なんだか微笑ましくなってくる。

「ほう……なかなか初々しいな、あの二人」

「白河さん……」

「悪いな、職業柄かどうかは別として、耳に入ってしまったんだよ」

「でも、ああいうのって、なんだかいいですね」

「見てる分には、な。当人たちはそうでもないだろ」

「そうですね」

白河さんと二人、ほのぼのと笑う。なんとも、楽しい時間を提供してもらったような気がする。

さて、と二人の所に向かう。

「飲み物のお代わりはいかがですか？」

これは、ほんのサービス。普通はしていないのでご注意ください。

「あ、すみません」

「ありがとうございます」

二人は恐縮してしまったようだが、これを機に少し会話が弾むようになった。よかった、よかった。

「さて、そろそろ仕事に戻らないとな」

「ご苦労様です」

「ホント、ご苦労だよ。最近、新米もなかなか役に立つようになってきたんだがな……まだまだ」

白河さんは苦笑いを浮かべる。

「頑張って下さい」

「あんたもな」

「ありがとうございました」

——カランカラン♪

と、カウベルの音とともに、外へと姿を消した。

それからしばらくして、二人もお店を出ていった。

やっぱり、垂依ちゃんが休みの時は閑散としてるな……。

思わずため息。

仕方ない、もう一人雇ってもいいかな。その方が繁盛しそうだし。

再びバイト募集のチラシを貼る事にした。

さて、次の衣装はロリータガーリーポップちっく……って、よくわからん組み合わせで、勝手な造語だが、次なるコスチュームはタータンだ！ って、今までの流れとどう関係するんだ？ 自分でも疑問だが……。まあ、本来の主旨から外れているような気がしなくもないが……。気のせいじゃないかも。

とにかく、今度はちょっと活発的な感じで！

って、喫茶店経営と関係あるのか？ あるとしよう！

やはり、今日は暇だった……。あれから、夜にカクテル（スコーピオン）を飲み、あの時の小説家の人が来たくらいだった。

「いらっしやいませ」

今日も亜依ちゃんが笑顔でお客様を迎える。

人見知りもあったようなのだが、今ではそれが嘘のように元気な亜依ちゃん。最初に比べると明るくなったと思う。オドオドしたところがなくなり、自然な明るさになった。

「あ、白河さん……」

よく知った常連さんという事もあってか、活き活きとした笑顔を見せる。別に常連さんと初見さんを区別しているのではなく、知っている人だから親しみがあるといったようなものだ。

「よおっ。今日も元気だな……」

「はい、ありがとうございます」

ペコリとお辞儀をして席へ案内しようとするのだが、

「ああ、いいよ。いつもの席だしね」

「はい」

ニコリを笑う。

「吉田さん、こんにちは」

白河さんは、いつも寿司屋でいうところの大前に座る。

「今日も忙しそうだな」

白河さんはテーブル席が埋まっている店内を見回した。基本的にテーブル席に案内するようにしているので、カウンター席は誰もいない。白河さんだけだ。だが、これもすぐに埋まってしまうだろう、今までの事を考えれば。

「ええ、有り難いです」

本当に有り難い。忙しさを緩和させようとアルバイト募集のチラシを貼ったのだが、今回はなかなか現れない。

なんだか、ここはメイド服喫茶というような別名でもあるのだろうか。あの衣装で敬遠されたのなら……どうしよう。

ちなみに、そろそろ衣装替えしてもいいかもと思っている。亜依ちゃんのあの衣装はかなり好評なのだが、イメチェンもいいかな、と。

今回用意した衣装は、赤の前開きパーカー。ネイビーにグリーンのラインが入ったタータンチェックのミニスカート（もちろん、スパッツは着用）に桜色のオーバーニーソックス。そして、ブラウンのコーデュロイキャスケットなんてどうかと考えている。

まとまっているような、そうでないような感じだが……。

ついでになんだけども、天使の羽根も用意はしてある。さすがに店内では四mもあるようなラージサイズは無理があるので、五〇cmほどのミニサイズだ。でも一応、様々なサイズは用意してある。あ、自分の趣味ってわけじゃ……ないはずだ。

「はい、いつものヤツです」

その考えを払拭するかのように、いつものブレンドを白河さんの前に置く。

「ありがとな」

そう言って一口啜る。

「ところで、お仕事の方はどうですか？」

「あんたのとこと違って暇だよ。まあ、その方が世間的にはいいんだろうがな。……というか、あんまり仕事をさせてもらえんな。組織行動が苦手だからな」

「すみません、なんか変な事訊いちゃったようで……」

「ああ、気にしなくていい。そんな大仰なもんじゃない」

——カランカラン♪

——カランカラン♪

「いらっしやいませ」

そんな話をしていると、カップルが入ってきた。いつものように亜依ちゃんが迎える。

「ねえ、本当にここにするのか？」

「いいじゃない、可愛いし」

「や、だけど……」

なんだか、男の子の方が不安そうに女の子の方を見ている。まるで、彼女に無理矢理下着売場に連れてこられたみたいだ。二人とも歳は亜依ちゃんと同じくらい……かな。

「あっ……」

その亜依ちゃんが驚いたように口元を押さえた。その声で気付いたのか、今来たお客さんも、

「あーっ！」

と、大きな声を上げ指を差す。

「どうしたんだよ、綾乃……って、あー！」

男の子も同じ反応。

「亜依。亜依よね……。どうしたのこんな所で……。もしかして、この人気メイドさんって……亜依だったの？」

「綾乃……？ ……ビックリした……」

三人とも、なにやら口をパクパクさせている。

「おやおや、どうやら知り合いみたいだな」

白河さんは面白そうと言わんばかりにそれを見ている。他のお客さんも違う意味でそれを凝視している。興味というよりは、あの大声だろう。

「あ、お騒がせしました」

とにかく、他のお客さんに謝っておく。

その声で正気を取り戻したのか、亜依ちゃんは真っ赤な顔になる。綾乃と呼ばれた女の子も、もう一人の男の子も……。

「どうしたの？」

テーブル席が埋まっているので、カウンターに案内する。

「あ、あのさ……実はアタシたち……」

そう言って、俺の方を見る。

「どうかしましたか？」

とりあえず訊いてみる。

「あの……店長さん、ですか？」

女の子が怖ず怖ずと訊いてくる。

「はあ、そうですけど……」

「実は……あのチラシを見て……」

そう言って、視線をドアに移動させる。

「ああ、アルバイト募集の」

「はい、それで……」

なるほど。お客というわけではないようだ。

「履歴書を持ってきてもらえますか？ 亜依ちゃんの友達なら安心できますし。とりあえず、履歴書だけ預らせて下さい」

「じゃあ……」

女の子の表情が明るくなる。

「採用しましょう。こちらとしても歓迎です」

「ありがとうございます！」

そう言った直後、再び怖ず怖ずと、

「それですね……できればなんですけど……」

そう言って、隣に座っている男の子、おそらくボーイフレンドだろう、に視線を向ける。

「彼も雇ってもらって事は……あ、いや、無理なら……」

じつとその彼を見る。まあ、真面目そうだし……。やっぱり男手があった方が……。

「なに考えてるんだ、吉田さんよ。いいじゃねえか、雇ってやれよ」

「白河さん……」

「なっ」

と、男の子の肩を叩く。

「まあ、そうですね。男手があった方が助かりますし、雇いましょう」

まあ、こんなんでいいのかというくらい、あっさり決めてしまった。

「ありがとうございます。アタシ、木元綾乃です。で、彼は……」

女の子は嬉しそうに言って、視線を隣に向ける。

「竹内舜平です」

男の子も丁寧に頭を下げる。

「こちらこそよろしく。マスターの吉田です」

「吉田……」

その名前に綾乃ちゃんが反応する。

「どうかしましたか？」

俺は首を傾げる。

「あっ……」

亜依ちゃんと舜平は、納得したような、わかった顔で頷く。

「実は綾乃……」

「あ、なんでもないです。よろしくお願いします」

亜依ちゃんがなにか言おうとしたが、綾乃ちゃんが止める。

気になるのだが……まあ、いいだろう。知られたくない事なんて、誰にでもある。だいたい、`秘密は女を女にする、ってな言葉もあるくらいだし。

「じゃあ、申し訳ないんだけど、店が閉まる頃か、別の日に来てもらえるかな？ できるだけ早い方がいいんだけど……」

契約やユニフォームなど色々あるわけで、それらを済ませないといけない。

「わかりました。じゃあ、今夜来てもいいですか？ 履歴書もその時に持ってきますから」

「でも、遅くなると家の人心配するんじゃない……」

自分で閉店の頃とか言っておきながら、やはり心配になってしまう。

「大丈夫です」

綾乃ちゃんは、ニッコリとそう言った。

「じゃあ、また来ます」

そう言って二人は店を出ていった。

「本当に大丈夫かな……」

どうしても心配になってしまう。

「大丈夫ですよ、舜平さんもいますし」

亜依ちゃんが言う。

「そうだね。一人ってわけじゃないみたいだし、大丈夫か」

「はい」

亜依ちゃんは、なにかニコニコとしている。友達みたいだし、楽しくしてくれる事だろう。嫌々されるよりは、楽しんでくれた方がいい。こっちも自然と楽しくなってくるから。

閉店の時間を迎えた。今日も忙しかった。

もう少しすれば、綾乃ちゃんと舜平が来るはずだ。

それまで奥で色々としなければいけない事がある。あ、言っておくが、スウィートな事じゃないぞ。

「そうだ、亜依ちゃん」

「なんですか？」

亜依ちゃんが小首を傾げる。

「そのユニフォームだけど……」

「あ、これですか？ 綾乃もこれを着るんですよ」

「あ、その……。彼女には違った雰囲気のものにしようかと思ってるんだけど……」

「そうなんですか？」

「うん。……それでね、亜依ちゃんはそのままでいいのかな……と思って」

「えっ？ これじゃ、ダメですか？」

亜依ちゃんは名残惜しそうにそのメイド服を見る。

……気に入ってたのか。嬉しいんだけど、喜んでいいんだよな……。

「気に入ってるんですけど、ダメですか？」

「あ、いや……そのままでいいんだけど……っていうか、亜依ちゃんはそのままの方がいいんだよね」

「はい。これ、結構気に入ってるんですけど……ダメですか？」

意外以外のなにもものでもなかった。

「気に入ってるなら、そのままでもいいんだけど……」

「よかった……」

亜依ちゃんは本当にホッとしたようだ。

「いいんだけど、パーツ増やしてみる気ない？」

や、弁論しておきますが、着せ替え人形のように楽しんでいるわけでは……ちょっと、進化させてみるのもありかな、と。

「パーツ？ なんですか？」

「あ、いや……これなんだけど……」

ネット通販で購入したソレを見せる。

「これって……羽根ですよ」

五〇c mほどのミニサイズだ。

「うん、天使の羽根なんだけど……」

「可愛いです。……え、これ……いいんですか？」

手渡すと、亜依ちゃんは嬉しそうにその羽根を眺める。

「じゃあ、早速……ん？ あれ？」

背中に付けるのだ、難しいに決まっている。

「してあげるから、後ろ向いて」

「あ、ありがとうございます」

とにかく、亜依ちゃんのメイド服にパーツが加わる事になった。横に広がったものではなく、折り畳まれたような状態のもので、それほど邪魔にはならないだろう。可愛さをアップさせるような感じだ。

なんだか、ラージサイズも似合いそうだな……。エルフ・エンジェル……なんだか、そういうイベントにいそうな感じだ……。違和感がないな……。

「うわあ～」

羽根を装着した亜依ちゃんは、嬉しそうにクルクルと回る。

——カランカラン♪

その時、カウベルの音がした。

「すみません、木元ですけど……」

入口の方から声が聞こえた。来たようだ。

「は～い！」

亜依ちゃんはその恰好のまま飛び出すように駆けていく。

やれやれ……と、ゆっくりと店に出る。

「こんばんは。遅くにゴメンね」

……………なに、この光景。俺の言葉はスルーされてる……………っていうか、存在ないみたいじゃないか。

目の前では、亜依ちゃんが自慢げに背中の中の羽根を見せていた。くるくると回りながら。

それを綾乃ちゃんが歓声をあげながら見ている。

その二人を茫然と見ている舜平。と俺。

あ、えっと……………どうしたものだろうか？

「可愛い！ 亜依、すごく可愛いよ」

「でしょ？ 今日、マスターがくれたんだ」

「うわ〜、可愛いよ……………」

二人はキャピキャピと談笑している。

「あ、マスター。こんばんは」

ようやくリアルに戻ってきた舜平が言う。

「あ、こんばんは。夜遅くに悪いね」

「いえ……………」

だが、やはりアレが気になってしまうようだ。俺も気になって仕方ない。

「でも……………アタシに似合うかな……………」

「似合うよ、絶対」

「そうかな？ アタシ、亜依みたいにさ……………」

「あの……………」

申し訳なさそうに声を掛ける。つうか、どうしてこうなってしまったんだ？

「あ、すみません。亜依があまりに可愛かったので、つい……………」

綾乃ちゃんが恥ずかしそうに言う。

「あ、いや……………それはいいんだけど……………えっとだね。そうだ。遅くに悪かったね」

「いえ、採用していただくんですから、これくらいは……………」

「じゃあ、ユニフォームのサイズは大丈夫だと思うけど……………バックにあるから着てみてくれるかな。亜依ちゃん、トルソーにユニフォームがあるから、それを着せてあげてくれるかな」

「はい……………さ、いこ」

亜依ちゃんは綾乃ちゃんを引き連れて奥に行った。

俺は、ふうとため息を吐いた。なにやら疲れた。

「あの……………オレはどうすれば……………」

そうだった。舜平もいたんだった。

「えっと……………君も制服が必要だね」

制服と言われて、彼は一瞬ビクツとした。きっと、ああいう服になるのだと思われたのだろう。さすがに、そういう趣味はない

。

「安心して欲しいというか、残念なのかもしれないけど、君にはこれを着てもらおう」

そう言って取り出したのは、黒いスラックスと白いシャツ、黒い蝶ネクタイ——普通のウェイターだ。バーテンダーに見えなくもないが、そこはあまり気にしないでおくとする。

「あ、普通だ……………」

やはり奇抜なものを想像していたらしく、その普通さに力が抜けたようだった。

「残念かもしれないけど……………普通で悪いね」

「あ、いえ……………正直、こっちの方が……………」

彼は慌てた風にそう言った。心底、安心したようだった。

「お待たせしましたーっ！」

亜依ちゃんの楽しそうな声とともに、ユニフォームに着替えた綾乃ちゃんが出てきた。

「……………」

綾乃ちゃんは恥ずかしそうに無言で出てきた。

「……………」

それを見た舜平は、無言で見とれている。

「なかなか似合うじゃないか」

「でしょ？ とっても可愛いよ、綾乃」

「……………」

亜依ちゃんの方が嬉しそうだ。綾乃ちゃんは少し恥ずかしそうにモジモジとする。

「で、どうかな？ サイズは大丈夫だと思うんだけど……」

「……………あ、いえ……なんだか恥ずかしいなって」

といっても、別段妙な恰好をさせているわけではない。タータンチェックのスカートに赤いパーカーにコーデュロイキャスケットという出で立ちだ。

「てっきりメイド服かと思っていたので、その……」

「あ、もちろん、メイド服がいいならそっちもあるから。亜依ちゃんも、綾乃ちゃんと同じものがよければあるから、その日によって変えてもらって構わないよ」

「え、本当ですか」

亜依ちゃんは嬉しそうに、手を口許に持っていく。

「そういうわけだから、とりあえず明日からよろしく。で、お店に来てもらう日なんだけど……」

と、三人の前にローテーション表を置く。

「……こんな感じにしてみたんだけど……」

三人はそれをじっと見ている。

「もちろん、前もって言ってくれば都合はできるから。それほど大きいお店でもないし、なんとかなるから遠慮せずに言ってくれて構わないから」

三人は無言で頷いた。

とにかく、これでバイトも増えたわけだし……。これで店がどうなっていくか、楽しみだな。

とある休日の昼下がり――

とある喫茶店シフォン――

とある三人が集まって――

「今日もいい天気ね……」

アールグレイを一口含んでその少女は言った。

彼女は活発そうな印象を与えている。それに対し、向かいに座っている少女は落ち着いた雰囲気のを漂わせている。そんな彼女は、アールグレイのカップをじっと見ている。その水面には彼女の顔がうっすらと見える……ような気がする。

「お待たせしました」

そこへ、注文したモンブランが二つ運ばれてきた。

「美味しそう……」

落ち着いた雰囲気の少女が言った。

「ホント、うちのとどっちが美味しいかな？」

「さあ？ どうだろう」

二人の少女は楽しそうに話している。

(ちょっと退屈かも)

そんな風に思いながらコーラを飲んでいるのが同席しているもう一人の少年。

アルバイトが休みだから、みんなでお話でもしようと思われたので、仕方なく……強制的に連れてこられたのだ。

せっかくならどこかに遊びに行きたい……とは思ったものの、先立つものがない事もあり、こうして喫茶店でお喋りという事になってしまったのだ。

しかし、お喋りとなると男である彼が会話に参加する事はほぼできない。仕方ないので、彼は一人で暇つぶしをしているしかない。

(せっかく喫茶店でバイトしてるんだから、ここはちょっと敵情視察とでも)

と、かなり離れているのでライバル店というわけでもないのだが、やはりそこは気になるというもので、ついキョロキョロと店内を見回してしまう。

もちろん、ここからキッチンなどのバックは見えないので、内装やウエイトレスがメインになってしまう。

その間も彼女たちの会話は止まる事がない。

「そういえばさ、亜依はどうしてあそこでバイトしてるの？ やっぱり、衣装が可愛かったから？」

活発な印象の少女が訊く。

「ううん。なんとなくアルバイトしたいなって。喫茶店のウエイトレスって少し憧れていたから……。その時は衣装なんて知らなかったから」

「そうなんだ」

「うん。最初は驚いたけど、可愛かったし……」

「へえ～」

「綾乃は？ どうして？」

「そりゃ、衣装が可愛って噂になってたから。まあ、衣装もだけどウエイトレスもかなり可愛って評判だったし」

そう言われて、そんな……と、亜依と呼ばれた少女は顔が赤くなる。

「それにしても驚いたよ。まさか亜依がいるなんて思ってなかったから」

「あたしもビックリしたよ。まさか綾乃が来るなんて思ってなかったから」

彼女たちはクスクスと笑いながらお喋りを続けている中、少年は相変わらず店内を見回していた。

黄色がかった照明が木目と妙にマッチして落ち着いた雰囲気になっている。かといって、別に騒ぎにくいというわけではなく、どんな場合にでも来れるような感じがする。夜に来てもロマンティックなのでは……と想像してみた。

彼・彼女たちがアルバイトしている喫茶店は、夜にはアルコールを求めて来るお客もいる。稀ではあるが。そのためにお酒も多少用意されている。

だが、ここにそういう雰囲気はない。

というより、普通はないのだろうな……と思いながらコーラを飲んだ。

と、店の隅にめをやると不思議なドアがあった。お手洗いは別の場所にあるので違うだろう。倉庫の入口か？ とも思ったが、そんなものを店内……お客の見える所に作るだろうか、とその案は却下された。ではなんだろう？ しばらく考えたが、想像もつかない。

(どこにでも繋がる扉……なんて事はないよな)

とある未来の道具が思い浮かんだが、そんなはずはない。それと同時に『時の口』も想像してしまう。どうしても、それを忘れる事はできないようだ。

想像すればするほど気になってしまう。気が付けば、彼はその扉を凝視していた。

「ちょっと、舜平？ なに見てるの？」

綾乃が彼に声を掛ける。

「もしかして、ウエイトレスさんでも見てたんじゃないでしょうね」

「そ、そんなんじゃないって……」

つい条件反射で慌ててしまう。その反応が怪しく、彼女はさらに追求する。

「本当に？」

「本当だって」

「……怪しい。亜依はどう思う？」

舜平は亜依に助けを求めるような視線を向ける。

「あたしも怪しいと思う」

しかし、最後の頼みの綱の彼女も綾乃の側についてしまった。こうなってしまうと舜平の負けは確実だ。本当の事を言うしかない。

「や、あの扉が気になってさ」

言われて、二人もそこを見る。

「あの扉がどうしたの？」

「や、なにかな……と思って」

「扉でしょ？」

綾乃が即答する。

「だから、そんなのはわかってるって。扉の向こうはなにかって事だよ」

綾乃は少し考えて。

「……なるほど。確かに気になるわね。なにかしら」

「もしかして、またアレ？」

亜依は三人が出会ったきっかけを思い出していた。舜平だけでなく、二人もやはりそれを忘れる事はできない。

「でも違うでしょ。そんなはずないって」

気が付けば三人ともその扉を凝視していた。まさに変な集団だ。

「どうかしましたか？」

気になったのだろう、彼女たちと同じくらいの年齢のウエイトレスが話し掛けてきた。

「あ、すみません。ちょっとあのドアが気になっちゃって……」

綾乃が言うと、ウエイトレスは納得したように頷いた。

「あの扉はですね、異世界に繋がっているんです」

しれっとした顔で言った。

その答えに、三人は固まってしまう。まさか……と、不安でいっぱいになる。過敏になりすぎているのかもしれないが、気にせずにはいられない。

「ふふっ」

それを見て、ウエイトレスは可笑しそうに笑った。

三人は呆気にとられていた。

「ごめんなさい。冗談です。あそこは地下にあるバーの入口なんです」

少女は口許を手で隠して笑いを堪えながら言った。

「……………バーの入口……ですか……」

沈黙が流れたが、それを破ったのは亜依だった。

「はい。ごめんなさい」

ウエイトレスが頭を下げた。

「あ、いえ……そんな……」

そう言いつつ、未だ現実に戻ってこない二人を見る。

「ちょっと、綾乃も舜平さんも……」

二人の身体を揺すり、なんとか現実に戻す。

「……はっ、アタシどうして……」

「あれ……？」

「大丈夫ですか？」

ウエイトレスが心配そうに二人を見る。

「すみません。大丈夫ですから」

「ごめんなさい。あたしが悪ふざけしてしまったせいで……」

と言いつつ、まさかここまで驚かれるとは思っていなかったの、彼女も戸惑っていた。

そんな二人がきちんと現実に戻ってくるまで、ゆうに十分を要した。

「ありがとうございました……それと、ごめんなさい」

というウエイトレスに見送られ、三人は喫茶店シフォンをあとにした。

とある休日の出来事――

綾乃ちゃんと舜平も仕事に慣れてきて……というよりも、元々素質があったのだろうか分からないが、最初からミスが少なく憶えも早かった。

雇う側とすれば嬉しい限りだ。

人見知りをしてしまう亜依ちゃんと知り合いという事もあり、職場も自然と明るくなっている。いい傾向だ。

そして、あの衣装もなかなか好評のようで、お客の入りも増加傾向にある。口コミが一番多いようだが、それこそ嬉しいものだ。

たまに二人は衣装を交換したりしているが、それはそれで似合っている。お客さんの反応も上々だ。

もちろん、同じ衣装で店に出る事もある。

メイド服は同じものなのだが、天使の羽根は少し違うものになっている。亜依ちゃんは白なのだが、綾乃ちゃんのものは本人の希望もあり黒である。耳はエルフ耳だったり付けなかったり。あとはウィッグだったり、その日の気分によってコーディネートしている。

どうやら二人はそれが楽しいらしく、いつも早めに来ては今日の服を選んでいる。

ちなみに今日は、亜依ちゃんがいつも綾乃ちゃんが着ているものの青系統（スカートは赤）を着用していて、綾乃ちゃんはいつものものを着ている。パールックというわけだ。

二人がメイド服を着た時は、店の雰囲気もなんだか落ち着いたものになったのだが、やはりこの服だと明るくなる。

二人次第で店の雰囲気がガラッと変わってしまうのだ。

それを楽しみにやって来るお客さんもいるようで、毎日のように覗いていく人もチラホラ。

どうやら、この二人は名物になっているようだ。まさに看板娘！

「ほう……今日はなかなか賑やかだな」

カウンターのいつもの席に座っていた白河さんが呟いた。

「ええ、彼女たちに助けられていますよ」

「本当にそうだ。吉田さんが一人でしていた頃はな、ちょっと華がなかったからな……」

はっはっはっとなんか笑いながら冗談まじりで言う。

「でも本当ですよ。お客さんも増えてきていますし、有り難い事なんです。自分も楽しく仕事ができますから」

「犯罪者だけにはなるなよ」

白河さんがニタリと笑いながら言う。

「……………犯罪者って……そんな事しませんよ」

「そうか？ お前さん恋人は？」

「いませんけど」

や、それどころじゃなかったんだよな……。

今までじつと勉強だったからな……。もちろんこれからも勉強だ。料亭で修行させてもらっていた時の師匠から何度も言われた言葉だ。料理人は生涯が勉強だと。

それから小さな料理屋で働く事になった時も、師匠にそう言われた。

あ、ちなみに料亭は辞めさせられたわけじゃない。料亭の師匠から知り合いが店を出す事になったので、腕のいい料理人を一人欲しいという事で、そっちに行ったわけだ。

その人は料亭の師匠の同窓だそうで、お互い龍虎と謳われるほどの腕前だったそうだ。

まさに切磋琢磨しあう、いいライバルなのだ。

そんな二人の元で働けた事は自分の人生におおいにプラスとなった。

それなのに、今はこうして喫茶店を営んでいる。

最初は驚かれたが、それが自分の夢だと言うと、あっさりと承諾してくれた。もちろん、勉強は怠るなときつく言われたが。

素晴らしい二人の師匠のお蔭で、料理の腕はそこそこになった。まだまだ二人には敵わないが。

もちろん、他のジャンルでも二人の教えは役立っている。

ここで出す料理には誇りを持っている。どんなものであろうと、他の喫茶店に負けるわけにはいかないのだ。

ファミレスよりも美味しいものを提供している自信はある。

ただ問題なのが、他よりも少し値段が高くなってしまふという事だった。

わずかではあるが、それが心苦しい。

それでも、お客さんは絶える事がない。

それが料理目当てなのか亜依ちゃんたち目当てなのかはわからないけど。

「どうしたよ」

少し自分の世界に浸ってしまっていたようだ。

「いえ、なんでもありません。ちょっと昔の事を思い出してしまって……」

「昔の事？」

白河さんが好奇心を剥き出しで訊いてくる。

「もしかして、昔の女の事か？」

「違いますよ。師匠の事です」

「師匠？ ああ、そいやどっかの店で働いていたんだったな」

「ええ」

「なるほどね……。まあ、だからこそ、ここの料理は旨いんだよな。このコーヒーだってなかなかだぜ。店によっちゃ泥水だってある。……って、そりやうちの部署か」

ははは、と笑う。

「だけどよ、あんたの料理が旨いのは本当だぞ。まあ、あの蕎麦屋には負けるがな」

「蕎麦屋？」

少し興味がある。

「いや、なんてこたあない普通の蕎麦屋さ。儂が最上にある店でな、儂専用のオリジナル蕎麦があるんだよ」

「オリジナルですか……」

「ああ、これが絶品なんだが、うちの若いもんはマズイって食わねえんだ。まあ、作った店主本人ですら食えないってんだからおかしな話だ」

よくわからないが、どんな味なんだろう？

「よかったらよ、店を教えてやるから食いに行くといいさ。儂の名前を出せば大丈夫だ。もちろん、その店主も儂の仕事を知ってるから、それでもかまわん」

そう言うと、メモ帳を取り出し住所を書いて渡してくれた。

「ありがとうございます。今度行ってみます」

「おうよ。是非とも感想を聞かせてくれよ」

「はい」

「じゃあ、今日はこの辺で帰るとするか。一応仕事になわけだしな」

そう言うと、お金をカウンターに置いた。

「ありがとうございました」

蕎麦屋か……。どんな店なんだろう？

あの白河さんが絶賛してるんだよな……。でも、作った本人が食べれない料理って……。これは興味がある。

——カランカラン♪

「いらっしゃいませ」

綾乃ちゃんの明るい声で現実に戻された。

「いらっしゃいませ」

とにかく、そこに行くのはもう少し先になるだろうな。

今日は一週間ほど前に予約があったお客が来る。

まあ、喫茶店に予約というのも珍しいのだが、それにはちょっとした事があって……。

「すみません」

大人しそうな雰囲気のお客が声を掛けてきた。物腰も落ち着いていて、言い表すなら「お嬢様、といった感じだろうか。

「はい、なんでしょう？」

「あ、えっと……」

と、女の子は恥ずかしそうにモジモジとしている。

「ほら、彌季ってば……もう……あたしが言うわ」

一緒にいた女の子が言った。彼女は先の子と違って活発そうな印象を受ける。まあ、彼女と比べると誰でもそう感じるのかもしれないが。

綾乃ちゃんに雰囲気は似ている。まるで、亜依ちゃんと綾乃ちゃんみたいだな。

「あの……」

「は、はいっ！」

ちょっとそんな事を考えていたので驚いてしまった。

「どうかしたんですか？」

彌季と呼ばれた大人しい感じの子が心配そうに言ってくれた。

「いえ、なんでもありません」

なんだか妙に恥ずかしくなってくる。

「それで、なんでしょうか？」

話が全く進んでいなかったのでも元に戻す。

「あ、そのですね……」

あたしが言う、と言った彼女だが、やはり言いにくそうにしている。だが、一つ深呼吸をすると意を決したように、「……来週なんですけど、友達の誕生日なんです。それで、ここで誕生日パーティーができないかと思ひまして……」

最後の方になるにつれ、声が小さくなっていった。

友達の誕生日パーティーか……。しかも、ここで。

なるほど、常連なら気心も知れて、まだ言いやすいかもしれないけど、あまりこういうのはできないか。

「えっと……誕生日パーティーですね……」

「あ、すみません。無理な事言ってしまうて……」

考え込んでしまったように聞こえたようだ。

「あ、いえ。そういう事ではなくて、なんだか微笑ましいといえますか……」

自分でもなにを言っているのかよくわからなくなってきた。

「で、誕生日パーティーですね。来週の今日でよろしいのでしょうか？」

「え……いいんですか？」

活発そうな子——夏菜ちゃんというらしい——が目丸くしていった。

「もちろんですよ」

「ありがとうございます」

二人が同時にお礼を言った。

「その子の誕生日、二日なんです。構いませんか？」

「ええ」

と、それからケーキの事や料理などの打ち合わせ……まあ、予算もあるだろうし。

そういった事をしたのが先週。そして今日はその当日。

亜依ちゃんや綾乃ちゃんなんか、昨日からワクワクしていたようで、楽しそうに今日の準備をしていた。まるで自分たちの事のように、だ。

どんなものでもお祭りというものは楽しいものだ。本番もそうなのだが、準備も楽しい。

自分も盛り上がりたいたいのだが、立場上あまり表には出せない。

理由は違うが舜平もそうなのだろうか、どこかソワソワしているようにみえる。それでも、冷静を装っている。

「なんだか楽しいね」

「うん」

綾乃ちゃんと亜依ちゃんは楽しそうに飾り付けをしている。

ちなみにお店は臨時休業という事になっている。彼女たちも学校があるので、午前中は営業していたが。常連の白河さんには前もって事情を説明しておいた。すんなりと承諾してくれた。

「でもマスター、よかったですか？」

舜平が話し掛けてきた。大丈夫かというのは、休みにしてという事だろう。

「まあ、他のお客には悪いけど、その方がいいだろ？」

「それもそうですけど……彼女たちが悪い事をしたように思うんじゃないかって……」

なるほど。わざわざ自分たちのために貸し切りにしちゃったわけか……。確かに、遠慮してしまうかもしれないよな……。

「それでもさ、他のお客がいると騒げないし、な。遠慮なく盛大にしてもらわないと」

「そうぞ、舜平！ アタシたちでいっぱいお祝いしてあげないと」

と、綾乃ちゃんが追隨する。

「まあ、オレとすれば別にいいんですけど……」

綾乃ちゃんには言い返せないようで、小さくなってしまふ。

「とにかく、もうすぐ時間だから急ごう！」

は〜い！

と、元気な声が返ってきて、最後の仕上げに取り掛かった。

準備が終わったのは約束の時間の十分前。この日のために新しいテーブルクロスも用意した。

真ん中にケーキ（俺の手作りだったりする）を置いて、その周りに様々な料理——まあ、サンドウィッチなんかの軽食系だけ——を並べた。

店内も色紙で作った輪っかなんかで飾り付けされている。

ラフな感じで祝ってあげようと思い、亜依ちゃんと綾乃ちゃんの制服はガーリーポップの方だ。この日ばかりは、舜平も普段着だ。

喫茶店という場所ではあるけど、友達の家でパーティーをしているという雰囲気にならなければと思っている。

そして、約束の時間——彼女たちは時間ピッタリにやって来た。

三人とも制服なのは学校帰りだからだろう。それにしても、三人とも制服が違うという事に驚かされた。

中学校時代の友達なのだろうか。よくはわからないが、あまり違う学校同士でこういう事は少ないのではないだろうか。

——パン！ パパパンツ！

入ってくるなりクラッカーを鳴らした。これは綾乃ちゃんの提案。

「お誕生日おめでとーっ！」

亜依ちゃんと綾乃ちゃんが元気よく叫ぶ。

入ってきた三人は、鳩が豆鉄砲をくらったような顔をしている。これは、あの二人も知らなかった事だ。

「ようこそMLCへ」

俺は一步前を出てお客様をお出迎えする。

「あ、あの……」

本人であろうその子はストレートの長い髪で、整った顔立ちが妙に凛々しかった。女の子が惚れるカッコイイ女の子なのだろう。

そんな子が戸惑っているのはなんだか奇妙でもあった。

「あ、えっと……」

だが、まだ戸惑っているのは彼女だけではなく、彌季ちゃんもだった。

「さあ、こちらへどうぞ」

綾乃ちゃんと亜依ちゃんが三人を席に案内する。

まだ戸惑いながらも三人はそれに従う。

「本日はMLCをご利用いただきましてありがとうございます」

相変わらず三人はキョトンとしている。

「あ、あの……あたしたち……」

「まあ、気にしないで下さい。では、始めましょうか」

そう言って、ケーキの蝋燭に火を灯し、店の明かりを消す。

「夏菜さん、ここはお店の人の厚意に甘えましょうよ」

「う、うん、そうだね」

予想外の事の連続に驚いていた二人だったが、この状況を受け入れる事にしたようだ。

「じゃあ……せ～の」

と、それを合図にあの歌を唄う。元は「おはよう、の歌だったのだが、誕生日を祝う歌にした途端に広まったというあの歌だ。

歌が終わると蝋燭を吹き消す。一度では消えず、二度三度。

「誕生日おめでとう！」

「トキさん、お誕生日おめでとう」

二人がそれぞれ祝いの言葉を言う。

M L Cの面々はパチパチと拍手。

「ありがとう、みんな。お店の人も、ありがとうございます」

彼女の目にはうっすらと涙が光っていた。

たまにはこういうのもいいかも、なんて思った。

そろそろクリスマスが近付いてきた。

という事で、MLCもクリスマスモードにしよう……と、クリスマスの飾り付けを始めた。

ドアの所にはリースを付け、店内にはツリーを飾ったり、赤や緑をメインに飾り付けを行った。

するとあら不思議、なんだかクリスマスモード。

と、ここまでは普通かもしれないが、突然綾乃ちゃんが……。

『せっかくだから、コスもクリスマス風にしませんか?』

と、提案した。

その結果――

亜依ちゃんと綾乃ちゃんは、サンタの恰好という事になった。もちろん女の子なので髭はないし、スカートだ。

そして、舜平は……まあ誰もが予想できただろうが、トナカイだ。少し可哀相ではあるが、それもまた仕方ないと諦めてもらうしかない。

ちなみに俺は、いつもと同じ服だ。さすがにマスターである俺までそういう恰好はできない。

そんなような事を言うと、綾乃ちゃんは残念がり、舜平は恨みがましい目で俺を見た。

すまない。そんな目で見ないでくれ。

というような経緯で、店の雰囲気が一気に変わった。

なによりも、二人のサンタ姿が好評だった。

……って、いつからここはそういうお店になったのでしょうか?

『まったく、面白い店だね……』

と、常連の白河さんは苦笑いを浮かべながら言った。

本来目指していたものとは大きくかけ離れてしまっているような気がしなくもないのだが……。

とまあ、そんな毎日を過ごしていると、一人の女性が入ってきた。

「いらっしゃいませ」

昼間なので三人はまだ来ていない。亜依ちゃんは学校で、綾乃ちゃんと舜平は他でアルバイトをしているらしい。なんでも、二人で暮らしているらしく、生活費を稼がないといけないから、という事らしい。

とまあ、そんな事は今はいいわけで……。

その女性は真っ直ぐカウンターに向かって歩いてきた。

女性が一人で来るなんて珍しい。少なくはないのだが、多いわけではない。普通なら、二、三人で来る事の方が多い。

まあ、店の性質上と言っていいのかわからないが、男性客の方が圧倒的に多いわけだが。

「コーヒー、いただけますか?」

女性は椅子に座るとそう言った。

「はい、かしこまりました」

コーヒーは大量に挽いて淹れた方が美味しいので（と少なくとも俺は思っている）、作り置きのようになっている（もちろん、時間が経ちすぎたものは勿体ないが廃棄している）。なので、すぐに用意ができ、彼女の前にカップを出す。

「お待たせしました」

「ありがとうございます」

そう言うと、彼女はコーヒーを一口含んだ。砂糖もミルクも入れずに。

「……美味しいです」

今まで強張っていた彼女の顔が少し弛んだ。

「実は、兄も……正しくはお義姉さんも喫茶店を経営してるんですけど……。

ここのコーヒーも美味しいですね」

「ありがとうございます。それにしても、なんだか緊張しますね……」

親族が喫茶店を経営しているなんて……なんだか、それだけで緊張してしまう。

「あまり顔を出しても、なんだか恥ずかしくて……。かといって、あまり自分好みのコーヒーはなかったんですけど……これからは、ちよくちよく来させてもらいますね」

「ありがとうございます」

やはり、わかる人はわかってくれるんだな……。

「仕事ばかりでホント疲れて……」

「大変なんですね……」

「ええ。なんだかもう、殺伐として……」

肩を回しながら愚痴る。

——カランカラン♪

「いらっしゃいませ」

「よう」

そう言って入ってきたのは白河さんだった。

「今日はまだ、お嬢ちゃんたちは来ていないのか」

「ええ、学生ですから……」

「そうだった、そうだった」

そう言いながら、よっこいせ、と椅子に座る。

「……………」

そして、近くに座っている女性をジロジロと見る。

「すみません、あまり見ないでいただけますか？」

そんな事をされると気に障るわけで……。

コーヒーを白河さんに出す。

「……ああ、こりやすまん。別に変な目で見たくもりはないんだ。……なんとなく、気になったんでな……」

「なんですか？」

女性は気になったのか、白河さんに訊く。

なんだろうな……。白河さんって、妙に鋭いからな……。

「なに、なんでもない事さね」

「よろしければ、なにが気になったのか教えていただけます？」

どうやらこの女性、なかなか気の強い方ようで……。

「なに、本当にたいした事はない」

「とても気になるのですが……」

俺も気になる。

「ただ、同じ職業だと思っただけだ。まあ、あんたの方が上なんだろうけどな」

そう言ってコーヒーを啜る。

「えっ？ 同じ職業って……」

女性は虚を突かれて言葉が出ない。

白河さんと同じ職業っていう事は……。でも、本当にそうなのか……？

「間違っていないと思うが？ そうだろ、キャリアさん」

「ええ」

女性は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「だからといって、なにがあるわけでもないけどな。まあ、ここは職場じゃないんだから、気楽にしようや。って、俺が話し始めたのか、すまんすまん」

白河さんは豪快に笑う。他にお客がないので問題はないが。

「それでは、今日はこの辺で仕事に戻ります」

女性は席を立った。そして、白河さんを見て、

「あなたもお仕事に戻った方がいいんじゃないですか？」

「まあ、もう少し休みたいんだが……キャリア様に言われちゃ、サボるわけにもいかないか……」

と、白河さんも席を立った。

「すまん、今日はあまり話ができて」

「いえ……」

ごちそうさまでした、と言って、女性は店を出ていった。

それに従うように、白河さんも出ていった。

なんだったんだろう……。

妙に疲れた。

——カランカラン♪

「いらっしゃいませ」

反射的に言う。

「いらっしゃいませ」

と、同じように亜依ちゃんも言う。今日は綾乃ちゃんと舜平はお休みだ。

そんな亜依ちゃんも、もうすぐ終わりの時間だ。

というのも、今は夜。ディナータイムも終わり、喫茶というよりもバーの趣が強くなる時間だ。注文もアルコールが増えている

。

「お久しぶりです」

そう言ってやって来たのは、以前に来た小説家の人だった。そして、カウンター席に座る。

「あ、いらっしゃいませ。本日はなにになさいますか？」

「そうですね……エックスワイジーを」

「かしこまりました。XYZですね」

材料をシェイカーに入れ、作り始める。

「そうだ。そろそろ上がってね」

テーブルのグラスの片づけをしていた亜依ちゃんに声を掛ける。

「はい」

亜依ちゃんはトレイにグラスを乗せてやって来る。

「お疲れさまです」

「お疲れ。グラスはそこに置いておいてくれればいから」

「はい」

そう言うと、亜依ちゃんはバックに入っていく。

そんな亜依ちゃんを、小説家の彼はじっと見ていた。

「どうかされましたか？」

カクテルグラスにカクテルを注ぎながら訊いた。

「いえ、なんでもありませんよ。なんだか昔、似た子がいました……」

「へえ～。……はい、お待たせしました」

「ありがとうございます」

彼はカクテルグラスを傾ける。

「美味しいです」

「ありがとうございます」

少し遠い目をしていたのが気になった。なにかあるのだろうか？

——カランカラン♪

「いらっしゃいませ」

あ、あの人は……。

その時やってきたのは、いつぞやの女性だった。確か警察関係の……。

「今日は白河さん、いないわね」

と、女性は確認するように店内を見回した。

「今日はいらっしゃいませんよ。白河さんは夜にはあまりいらっしゃいませんので」

「そう……」

そう言うと、女性は安心したようにため息を吐いた。そして、カウンター席に座る。

「疲れた……。私もお酒をいただくかな……」

チラリと彼のグラスに目をやる。

「なにになさいますか？」

少し考えたあと、

「ベリーニもらえますか？」

「かしこまりました」

材料をステアグラスに入れ、ステアする。

ベリーニを注文してからずっと、ため息を吐いている彼女を彼はじっと見ていた。

「私の顔になにかついていませんか？」

女性は怪訝そうに言う。

普通ならそうだろう。じっと顔を見られていい気分はしないものだ。

「いえ、すみません。なんでもないんです……けど……」

「けど？」

「間違っていたらすみません。警察の方ですよね？」

女性はドキッとした顔をする。

そして、大きなため息を吐く。

「はぁ〜。私ってそんなにわかりやすいですか？」

と、俺に言うてくる。

「そんな事はないと思いますけど……。白河さんに言われるまで考えもしませんでしたから」

ベリーニを彼女の前に置く。

「普通はそうよね……。で、どうしてわかったわけ？」

「なんとなくですよ。これといった根拠があるわけじゃないです。……自分は小説を書いてまして……そのせい、という事にしておきましょうか」

「なるほど、洞察力が優れている、そう解釈してよろしいかしら？」

「まあ、そういう事にしておいて下さい」

彼は楽しそうに笑いながらXYZを飲み干す。

それにしても、どうしてこの人たちは一目見ただけでわかるんだろう？

こういう商売をしているが、サッパリわからない。まだまだダメなんだろうか……？

「小説家さんか……面白いわね。そういえばこの前、ちょっと妙な事件に巻き込まれちゃったの。犯人なんかわかるかしら？」

「さぁ？ それはどうでしょう。推理ものはあまり得意じゃないので……」

「そう……。あのね……あれは休暇で温泉に……」

ピリリリ……ピリリリ……♪

彼女の携帯電話が鳴り出した。

「ちょっと……」

そう言うと携帯電話を取り出す。

「もしもし……はい……わかりました」

パタンと携帯を閉じると、

「ごめんなさい、仕事が入っちゃいまして……」

「そうですか、大変ですね」

「この話はまたいつか会った時にでも」

「ええ。偶然を楽しみにしていますよ」

「ごめんなさい。それと、ベリーニよければ飲んで下さい。もちろん、おごり」

彼女はまだ口を付けていないベリーニを彼の前に差し出した。

「では、有り難くいただきます」

笑顔で答える。

「じゃあ、これベリーニのお金」

そう言うと、彼女は代金を置いて店を出ていった。

「ありがとうございました」

「忙しそうですね」

彼はクスクスと笑っていた。

「大変ですね……」

「まあ、色々あるんでしょう。それにしても、どんな話だったのかな……楽しみです」

そういえばそうだ。どんな話なんだろうか？

「これでは、ちよくちよくここに来ないといけませんね」

「こちらとしては有り難いですが」

我々はしばらく楽しくお喋りをしていた。

「おはようございまー」

——パン！ パパパン！

「——きゃ！」

「マスター、ちょっといいですか？」

突然、綾乃ちゃんに呼ばれた。

「あ、ああ」

「じゃあ、ちょっとこっちに……」

日曜と祝日に挟まれた今日は、客足が少し落ち着いていた。

「舜平、ちょっとマスター借りるね！」

はい？

「わかった！」

って、舜平も快諾してるし……。

「じゃあ、あとよろしくね～！」

「まかせとけて」

確かにお客さんはあまりおらず、オーダーも出し終わっているので大丈夫だとは思うけど……。まあ、無理な事があれば声を掛けに来るだろう。

とか考えていると、ズルズルと綾乃ちゃんに引きずられていった。

「マスター、明日なんですけど……」

綾乃ちゃんが唐突に言った。

「明日？」

「そう、明日です」

明日……なにかあったっけ？

まあ、祝日ではあるけど……。わからない。

「明日、なにかあったっけ？」

「マスター……」

訊くと、綾乃ちゃんはヤレヤレとため息を吐いて肩をすくめた。

「これだから男の人ってのは……そんなんじゃ、女の人に嫌われますよ。もう三行半ものですよ」

三行半って……よくそんなの知ってるね……っていうか、久しぶりに聞いたよ。

「ごめん……。で、なにかあった？」

「舜平のバカも、アタシが言うまで忘れてたし……」

舜平も知ってる事なのか……？

「マスター！ 明日は亜依の誕生日なんですよ！」

「……………あ、そうなんだ」

一瞬にかわからなかった。そうなんだ。亜依ちゃんの誕生日なんだ……。

「履歴書見てないんですか？」

「あのねえ、そんなの憶えてないよ」

だいたい、いちいちパーソナルデータを憶えていたら、それはそれでまずくないか？

「これだから……というわけで、明日はそうなんです！」

「じゃあ、お祝いしてあげないとね」

「そうなんです！ だから、クローズしてからパーティーを……」

「あ、それは無理だよ」

「へっ？」

綾乃ちゃんは鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をした。どんな顔をそう言うのかはよく知らないが、きっと今のこれがそうだろう。

「どうしてですか？ どうしてですか？ マスターって冷たい人だったんですね！」

と、詰め寄ってきた。

「違うってば……。明日の夜は亜依ちゃんが用事があるとかで、早めにあがる事になってるんだ」

そう言うと、慌ててシフト表を見に行く綾乃ちゃん。

「うっそー！」

と、叫び声。

「どういう事ですか？」

「や、そんなの知らないよ……」

「って事は……アタシの野望は……いえ、計画は……」

ガクンとオーバーリアクションで崩れる。

が、すぐに立ち上がって、

「仕方ない。プランBね」

立ち直るの早いな……。

「亜依が来た瞬間にお祝いよ！」

というわけで――

「おはようございま――」

――パン！ パパパン！

「――きゃ！」

と、亜依ちゃんにクラッカーの紙吹雪が舞い散る。

「お誕生日おめでとう！」

と、そんなこんなでちょっとしたお祝いをした。

ちなみに、その日の夜の亜依ちゃんの予定は謎のままであった。

今年も色々あったな……。

いや、今年は、か。なにせ、今年に始めたばかりだからな……。

なんとか店も軌道に乗って……—安心だ。いや、ここで油断してはいけないな。

しかし、まだ三ヶ月ほどしか経っていないとは……。もう、何年もしているような気にさえなる。

こうしてカウンターを拭いていると、これが完全に生活の一部になっていて、していない時の方が変な感じだ。

長年の夢だった自分の店も持てたし、アルバイトの従業員もいい人材が揃ったと思っている。看板娘として申し分ない。

開店した時は一人で、これからどうなるか不安だったが、それなりにお客も増えて忙しくなった。

そしてアルバイトとして亜依ちゃんを雇って。そうするとこれが大評判で、亜依ちゃん目当てのお客が押し寄せてさらに忙しくなった。

それも懐かしく思える。

そこでアルバイトを増やしたわけだ。綾乃ちゃんとか。

すると綾乃ちゃん目当てのお客も現れだして……。

忙しさを緩和しようとしたのに逆効果になるとは……。これは嬉しい誤算ではあるが。

二大看板娘だ。

それとは別に常連の人もいて……。その代表が白河さんだろう。あの人は、週に四日は来ているんじゃないだろうか。そりゃ、その時によって違うが、そのくらいは来ているように思う。毎日会っているような感じがする。

そんなこんなで、今年も色々あったな……。

誰もいない店内を見回してしみじみと思う。

今日は休みにしている。

正月も彼女たちは休みという事にさせてもらった。

亜依ちゃんや綾乃ちゃん、舜平にもそれぞれ予定があるようだし、次に会うのは年明けだろう。

それにしても、特になにかが変わるような気はしない。

年度が変わっても、急に変わるわけでもなし……。

そんなに騒ぎたてるほど目出度いのか疑問ではある。

確かに心機一転といった風に、身が引き締まる思いはするが。それだけだ。

それでもまあ、目出度いのはいい事だ。

騒ごうじゃないか！

……誰もいない店内で騒いでも虚しいだけだけど。

来年もよい年になりますように……。

ただ、それだけを祈ろう。

幸せが訪れますように——

翔聖会総合病院に通うようになってどれくらい経つだろうか。

神崎家で調べものをしていた時も毎日欠かさず通っていた。

なので、もう一月にはなるのか。

つまり、それだけの間、亜依は眠り続けているという事だ。

誠司は既に定位置となったベッド脇のパイプ椅子に座って亜依の手を握る。

「亜依……絶対に目覚めさせてやるからな」

毎日その誓いを告げている。

そして、その日あった事を報告し続けている。

「今日からさ、データの解析が始まったんだ。俺はなにもできないけど、なにか役に立てるように勉強してるんだ」

先日ようやく、誠司たちが吉田邸で発見したFDの解析が行われる事になったのだ。

保存されている内容が全くわからなかったため、付属されていた資料を読まざるをえなかった。だが、その資料も吉田氏のメモのようなものなので、第三者が読んでもなかなか理解できなかった。それが進展の停滞に繋がった。

もう一つの停滞の理由は、これを詩稀以外の人間に見せる事ができないと判断されたためだ。

詩稀が原因だったという事を公表したくないとかそういう事ではなく、詩稀以外の人間が理解できるかどうかという事だった。それに加え、能力云々は知られるわけにはいかないのだ。

通常では存在し得ない能力を有している事が知られれば、世界はパニックになるだろうと危惧される。

それらの事があり、これを詩稀以外の人間の目にさらす事はできないと判断されたのだ。

そして、ここで問題があった。

現在、所在が判明している詩稀出身者はわずかしかおらず、その大部分は詩稀という一族である事すら知らない者なのだ。

つまり、先祖は詩稀村で生活していたが、昔に村を出て行った。そして、その子どもは外の世界で生まれ育った。それ故、能力の存在を知らない。

そもそも詩稀の能力は自覚して使用できるもので、無意識で使用する者がわずかにいるものの、知らなければ能力はないに等しいのだ。

それに、詩稀の一族であるからといって、全員が全員能力者だというわけでもない。能力の有無は個人によって異なり、親兄弟でも能力の有無は完全に遺伝しない。

そして、問題となったのが、詩稀の事情を知り、かつプログラミングに詳しい人物がいないという事だった。

詩稀の中核にいた人物は、神の能力者である神崎璃織魚が解放された時に穴神梢を残し、多くがその命を落とした。

その事件に最後まで関与していたのが、椎崎誠司と富所亜依、そして彼女の両親である富所史和、梨架なのだ。

残念ながら、この中にプログラムに詳しい者はおらず、かといって他にアテがあるわけでもないのだ。

そこで梢はプログラムの基礎を学ぶ事を決め、しばらくはそれに没頭していた。誠司も同時に勉強を始めた。

しかし、いくら基礎がわかったとしても、発見されたFDの内容が通常のものであるはずがない。

資料によれば、このFDのプログラムは、MLCの情報を書き換え、さらに追加させるものようだ……と、ぼんやりとだがそう解釈できた。

違う世界、情報の世界のものを書き換えるプログラム——これは通常のプログラムの基礎がわかったからといって理解できるものでもない。

どういう作用を及ぼすのか、それを想像する事もできないのだ。

そして、試す事もままならず、バグが見つければ即失敗、終了となってしまう。

それでも、梢と誠司は基礎を勉強するしかない。なにも知識が無いよりはマシなのだ。

「俺さ、今度、亜依のお母さん——梨架さんと一緒にMLCへ行ってみる事になったんだ。本当は史和さんが行くと言ったんだけど、パートナーは異性じゃないとダメなんだって。それで、梨架さんになったんだ」

プログラムを勉強しても、FDの内容がサッパリ理解できない。そこで誠司が、MLCへ行ってみようと提案したのだ。行ってみればなにかわかるかもしれない。

そこで問題になったのがパートナーだ。

誠司の能力を使えば、確かに思う場所に行く事ができる。しかし、そのパートナーである亜依は眠ったままなのだ。

一人で時空を移動する事はできない。時空の能力者が必要になる。

そこで、史和がそれに立候補したのだが、パートナーが同性では能力を發揮できないという事で、梨架が誠司のパートナーとして行く事になった。

史和はずっと心配していたが、梨架の、

「私たちの娘を助けるためです。親である私が行きます」

その言葉に史和は頷かざるをえなかった。

自分に誠司君と同じ能力があれば……と、悔やんでいたが。

同じ時空の能力でも、史和の能力では思った場所に行く事ができない。それができるのは誠司だけなのだ。

「なんだか緊張するけどさ、絶対に目覚めさせてやるから。もうちょっとだけ待っていてくれよ」

誠司は亜依の頬を優しく撫でる。

誠司は亜依の病室を出て、今度は綾乃と舜平がいる病室に向かう。

「ったく……………こういう時に役に立たないんだよな……………お前たちって」

憎まれ口を叩くが、その表情からは心配が見てとれる。なんだかんだで心配なのだ。

「とにかくよ、お前たちも目覚めさせてやらねえとな」

二人には挨拶だけをし、病室を出て帰宅した。

翌日、椎崎誠司は一軒の洋館の前にいた。

「ここって……」

彼の隣にいる穴神梢は茫然とそれを見ている。

鳶が壁を這い、一瞬お化け屋敷かと思ってしまったのだ。

確かに生活感は薄く、本当に人が住んでいるのか疑わしい。

廃屋と言われれば即座に納得できるような状態だ。

だが、誠司はここに一つの確信を持ってやって来た。

なぜならここは……。

「もしかして、吉田邸……………なの」

梢がその名を口にした。

詩稀村にあつて神崎と肩を並べていたもう一つの名家。それが吉田だ。

その吉田は昔、詩稀村を出て普通の人たちに紛れて生活をしていた。

その際に、強盗に襲われ一家全員が殺された。

そして、ここがその惨劇の現場である……はずだ。

梢とて、その当時の事を話でしか聞いた事がない。誰もいないのだから、その家もないものとはばかり思っていた。

「まさか、現存していたなんて……………」

まるでお伽噺の世界に紛れ込んだかのようなようだった。

「まさか、穴神さんが把握していなかったなんて思っていました。だから、余計に思い出せなかったのかもかもしれません。神崎にないのなら、もしかしたら吉田の側にはあるかもしれない——という可能性に」

誠司は茫然としたままの梢に言った。

「でも、吉田は随分と昔に詩稀を出ているのよ。そんなものが残っているかしら。ましてや、強盗事件があつたんでしょ？」

その事件は誠司ももちろん知っている。だが、

「それって、本当にただの強盗事件だつたんでしょうか……………」

誠司は梢の目をじっと見る。

「ただの強盗事件じゃ、ない……………？」

改めて言われ、梢は一つの可能性に行き当たった。それは、無意識に考えまいとしていた可能性だった。

「それは、神崎が故意に……？」

声が少し震えた。

そうだとするなら、それを行ったのは自分の父である神崎禎臣か兄の禎昭である可能性が高い。藻音家が画策したのかもかもしれない。だが、どちらにせよ、自分に罪があるという事は変わらないだろう。神崎の血を引く者として、その呪縛からは逃れられない。

「それはわかりません。あくまでも一つの可能性ですよ。実際、この家には一度来た事があるんですけど、荒らされた様子はなかった。強盗が荒らしたような……という意味ですが」

それを聞いて、梢は自分の考えが正しいと判断せざるを得ない。

それを実際に見たわけではないが、ここで誠司が嘘を吐く必要は皆無だ。むしろそんな事をして神崎を敵に回す事は彼にとって不利以外のなにものでもない。

神崎の助けなしでは、今回の事件を解決に導くなど到底不可能だ。

つまり、彼は嘘を言っていない。これは事実なのだ。

事実、誠司はこの話を藻音家の人間である藻音時也から聞かされた事がある。

その時はっきりとあれは藻音時弥の差し金だと言ったのだ。当事者である、とある少女の前で。

誠司にすれば確かめたかっただけなのだ。

この事件に梢が関与していたのかどうか。知っていたのかどうか。

ただの好奇心と悪戯心だった。誠司は関係者のようであつて無関係だ。この件にとやかく言う事はできないし、するつもりもない。

ただ知りたかっただけだ。

憎むべきは神崎ではない。藻音なのだから。その当事者である藻音時弥はもうこの世にはいない。怒りを向けるべき矛先はどこにもないのだ。

第一、当事者である彼女が今のままでいいというならそれで構わないと思う。第一、死んだ人間を生き返らせる事なんてでき

ない。過ぎ去ってしまったものはどうしようもない。できる事は覚えておく事だけなのだから。

「でもまあ、俺はそれに関してなにも言う権利はないんですけどね。もちろん、宍神さんに責任をとれとか言いませんし、思ってもいません。それは璃織魚さんにも同様です。謝るとかしたいのなら、この家に住んでいる人に言ってもらうのが一番でしょうけど」

そう言って、誠司は門を押して中に入っていく。

勝手に入っていいものか……という考えはなかった。そんな事を考える余裕がなかったのだ。

梢は今聞いた話で頭がいっぱいだった。

ん？

梢は誠司の言葉に引っかかるものを感じた。

(確かさつき——この家に住んでいる人って……………)

吉田の一族は途絶えたはずだ。

誰も住んでいないはずだ。

だが、確かに誠司はここに住んでいる人と……………。

「ここに誰か住んでいるの？」

と、声を掛けた時、既に誠司は扉を開けて家の中に入ろうとしているところだった。

「呼んでも返事がないので勝手に入らせてもらいましょうか」

にこやかにそんな事を言う。

やはり誰かが住んでいるらしい。

いったい誰が……………。

誰が……………という梢の疑問に答える事なく、誠司は家の中に入って行く。梢は慌てて誠司を追いかけて中に入る。

「……………」

中に入った瞬間、言葉を失った。

埃っぽいかと思っただが、そんな事はなかった。確かに誰かが住んでいるようだ。

だが、相変わらず誰が住んでいるのかはわからない。どうにも思い当たる人物がいない。

正面には大きな階段がある大広間には圧倒される。

誠司は迷う事なく、遠慮する事もなくその階段を上っていく。

「宍神さん、こっちです」

階段の中程で振り返り、梢を促す。

梢は慌てて靴を脱ぎ、近くにあったスリッパに履き替える。

そこで初めて気付いたのだが、明らかに誠司のものでもない靴が二足ある。確かにここには誰かがいるようだ。それが男物と女物である事から、少なくとも二人いるという事になる。

靴があるという事は外出しているわけではないわけだ。つまり今ここにいる。

それにも関わらず、誰も出てくる気配はない。

そもそも、誠司の行動は問題ありだと思う。

色々と思うところはあるが、今は誠司についていくしかない。勝手に分からぬ場所だ。勝手な行動は慎んだ方がいい。

それ以前に、やはり無断で上がり込むのはどうかと思う。

それでも梢はとりあえず誠司に従う。

誠司はきちんとついてくる梢を見て、さくさくと階段を上りきり突き当たりを右折した。

その先には両脇に二つずつの扉があった。

その右奥の扉を迷う事なく開ける。

「手前の吉田 武暁氏の部屋にはなにもありませんから、とりあえずここから探しましょうか」

そう言うと誠司は中に入る。

ここが吉田武暁氏の部屋……………。

梢は一つ手前——右手前の扉から目がそらせない。

神崎禎臣と肩を並べていた吉田武暁の部屋。興味が無いといえば嘘になってしまう。

だが、今は……………我慢するべきだろう。

梢は後ろ髪を引かれつつ誠司が入っていった部屋に入る。

そこは書斎のようで、大きな書棚が壁際にあった。その一つを誠司が早速探している。

黙々と探す誠司に声を掛ける事ができず、梢も本棚を探し始める。

最近は全て電子データばかりだったからだろうか、どうにも疲れる。運転の疲れもあるのだろうか、ついつい欠伸が出る。

「宍神さん、休んでいて下さい。ここまで運転してもらって疲れているでしょうから。昨日も詩稀まで行ってもらっちゃいましたし」

梢の欠伸に気付く、誠司は気遣うように言う。

「じゃあ、そうさせてもらうわ。隣の部屋にいるから」

吉田武暁の部屋に入る口実だった。

どうしても興味がある。

「わかりました。探し終わったら声を掛けますから」

誠司はそれに気付いているようだったが、あえてなにも言わなかった。

ここまで連れてきてもらっただけで充分だ。ここからは自分でしなければならない。

「ありがとう」

そう言うと梢は部屋を出ていった。

「そうそう。昏睡だけは勘弁して下さいよ」

そんな誠司の言葉に梢は、わかってます、とだけ答えた。

梢は吉田武暁の部屋に入ると、まずは茫然とした。
そこには全くと言っていいほどのものがなかった。
コレクションボトルが飾られているコレクションボードぐらいしかものがない。
なるほど……と思った。
どうして誠司がここを探そうとしなかったのか。それは以前に来た事があり、この部屋にも入ったのだ。そして、この部屋にはなにもない事を知っていた。そういう事だったのか……。
なにもなかったが、これはこれで面白い。広い部屋にわずかな調度品。おそらくどこも同じ様な造りなのだろう。
先程の書齋も広さの割には書棚が少なかった。
部屋いっぱい書棚を設置した神崎とは対称的だ。
梢はしばらく部屋を眺めたあと、誠司がいる書齋に戻った。

「どう？ 見つかった？」
思ったより早く帰ってきた事に誠司は驚いた。
「なかなか見つかりません。それよりどうでした？」
「やっぱり、わかっていたのね……。特になにも。なにもない部屋なのね」
誠司は、そうでしょ、と笑った。
「最初に入った時は正直驚きました。亜依があ部屋に鍵があるっていうんで入ったんですけど、なにもないんですから。本当か？ と、思っちゃいました」
鍵……？
なんの事だろう？
疑問に感じるが、誠司は探す事に夢中になっている。
「あっ！」
と、誠司が声を上げた。
「これじゃないですか」
誠司は古い本を差し出した。
一見した限りでは日記のような感じだ。
メモをまとめたというようなものだった。
だが、そこには確かに `MLC` の文字があった。

世界の情報を統括する場所——通称・MLC。そこが神の能力者の影響なのだろうか、揺らぎが生じている。このままでは世界全体に影響が出てしまう。

処置として、マスターに追加情報を与える。セイバーと協力し、世界に影響が及ぶ事は回避された。

歴史に記された事を繰り返すわけにはいかない。

眠り病と世間を騒がせたとされる詩稀の失態。それだけは繰り返してはならない。

今回の揺らぎはなんとか回避できたが、この先、神の能力者が完全となるか、消えてしまうか……それはわからない。だが、どちらにせよ世界は揺れる。

そのためにも今のうちから対策を講じなければならないだろう。

なんとか基礎は完了した。だが、ここから先はその時代に構築しなければならない。その時代にどうなっているのかわからない今の状態ではここまでが限界だ。

ひとまずこれで大丈夫だ。

神の能力者の動向を見守るしかないようだ。

そこで文章は途切れており、以降は白紙になっている。

そして、本の背表紙にはFDが封入されていた。

「ビンゴみたいですね」

そのFDを手に誠司は笑みを浮かべた。

「そうみたいね」

ようやく手掛かりを見つけたのだ。

今回の昏睡事件は誠司が睨んだ通り、詩稀に関係があるものだった。

そして、富所夫妻がもたらしたMLCの情報は正しかった。そして、これも今回の事に関係していた。

全てのパーツが繋がり、そしてその対抗策も見つける事ができた。

これで一步も二歩も前進できた。

「あ、そうだ。挨拶するの忘れてた」

ここに来て誠司は無断で探していた事に気付いた。

どうやら遠慮していなかったのではなく、探す事に夢中で失念していただけのようだ。

誠司は照れたように笑い誤魔化しながら部屋を出ると、廊下を進み階段の所まで戻ってくる。

「さて……部屋にいるのか、下にいるのか……」

と、階段の前で少し考え込むが、すぐにそのまま反対側の廊下に歩いていった。

階段を下りるのが面倒なのでそっちに向かったようだ。

そこも同じ造りになっていて、左右に二つずつの扉があった。

誠司はまた迷う事なく左奥の扉をノックした。

だが、返答はない。

「おい、舜平。いないのか？」

誠司は部屋の主を呼ぶ。

だが、やはり返答はない。

「もしかして、綾乃のところにしけこんでるのか？」

誠司はニヤニヤと笑いながら回れ右をして向かいの扉をノックする。

しかし、そこでも返答はなかった。

「おいおい、真っ最中ってか……」

梢は、親父かあんたは、とツツコみたいのをなんとか我慢する。

「しゃーねーな。開けるぞ。服着ろよ。まあ、そのままでいいけど」

やれやれと梢は頭を抱える。

今までの真摯さはどこへやらだ。

手掛かりが見つかった事で籠が外れたのだろうか、まるで別人だ。

(そういえば……)

そんな誠司はさておき、梢は誠司が口にした名前に聞き覚えがある事に気付く。

(誰だったっけ……)

最近の仕事ばかりで詩稀の事をほとんどといっていいほど気に掛けていなかった。そんな余裕もなかった。十代半ばの会長を補佐しなければならないのだ。最近彼女は彼女も慣れてきたが、それでもまだまだ目は離せない。

(まあ、詩稀に無関係って事はないんだろうけど……)

なかなか思い出せない。

それもそうで、梢が綾乃と舜平に会った事はない。資料で見たくらいだ。なので思い出せないのも無理はない。

梢がそんな事を考えている間に、誠司は遠慮する事なく扉を開けた。

「おい、二人と……も？」

威勢良く言うが、すぐに首を傾げる。

「あれ？ ……誰もいない」

そこには誰もいなかった。

生活していたあとはあるのだが、誰の姿もない。

「別の部屋か……」

と、誠司はさっきは開けなかった舜平の部屋の扉を開ける。

……が、そこにも誰の姿もなかった。

「おっかしいな……二人ともどこにいやがるんだ？ 靴があったから絶対にいるはずなんだけどな……」

二人の事を忘れていたわりには、靴は確認していたようだ。

「もしかして、俺が知らない隠し部屋なんかで………昼間っからいそしんでらっしゃるのかな……」

と、どうも思考の方向性はそっちらしい。

それから誠司は二階の扉を次々に開けていくが、どこにもいない。

「下か……………」

誠司は階段を下りると、玄関に入って左の部屋に入る。そこはダイニングになっている。その奥には大きなキッチンがあり、まるで大正時代のモダンでハイカラな洋館そのものだ。

「綾乃、舜平、かくれんぼはよそう……………」

勢いよく入った誠司は、言葉を失った。

「綾乃！ 舜平！」

誠司は頭が真っ白になるのを感じた。

ただ無我夢中で二人の元に走っていた。

そう——二人はテーブルにうつ伏せになるように倒れていた。

誠司は二人に声を掛けながら身体を揺する。

「おい、綾乃！ どうしたんだよ！」

誠司は綾乃の身体を起こし、頬を軽く叩く。

「おい！ 綾乃！」

誠司は喉に手を当てる。

脈はある。

眠っているようだ。

「ちくしょう！」

誠司は声を荒げ、綾乃の身体をテーブルに預けると、今度は舜平の身体を起こす。

「おい！ 舜平！」

誠司は思いつ切り頬を叩く。

乾いた小気味いい音が静まり返ったその部屋に響く。

梢は不思議と冷静だった。

面識がないからだろうか、それとも仇と言われ続けてきた吉田家の人間だからだろうか。

どちらでもないと思いたい。

ただ、あまりの事に心失っているだけだと。

食事の途中だったのだろう。テーブルの上には焼き飯がのっている。しかし、すっかり冷めて固くなっている。側にある中華風スープは当たり前のように冷めてしまっている。

という事は、二人がこうなってからある程度の時間が経っているという事になる。あいにく、どのくらいなのかはわからない。

「宍神さん、急いで帰りましょう」

誠司の声色は厳しかった。

せっかく手掛かりを手に入れたと思った矢先の出来事だけに余計なのだろう。

まさか新しい犠牲者を見つけてしまうとは思ってもいなかった。それが悔しい。

「そうね」

昏睡した状態になった場合、そのまま死に繋がる事はない。少なくとも、そういう例はない。

世界各国の犠牲者の誰もが、未だ眠ったままでそれ以外は健康そのものなのだ。

新陳代謝も正常であるにも関わらず、栄養の補給を必要としないのだ。

ただ眠っているだけだ。

極端に睡眠時間が長い……それだけにしか思えない。

だが、心理的には急いで病院に搬送しなければならないと感じてしまう。

「あたしの車に乗せてちょうだい」

「わかりました」

そう言うなり、誠司は綾乃を背負う。

「宍神さん、車お願いします」

「わかったわ」

梢は慌てて外へ飛び出し、車のドアを開けた。

セダンタイプの車なので少し乗せにくいし、眠っている人間を座らせないといけない。それでも、なんとか二人で綾乃を後部座席に座らせる。

「じゃあ、次は舜平だな」

綾乃は軽かったので一人で大丈夫だったが、舜平はどうだろう……。

このまま置いていってしまうか、と少し考えてしまう。

「急ぎましょう」

「……………は、はい」

梢に声を掛けられ誠司は再び館の中に入る。

(さて……………)

ダイニングでまだ眠っている舜平を見、改めてどうしようか考えた。

やはり背負うのが一番だろう。

(重そうだな……………)

「さあ、行きましょう」

梢に言われ、誠司はよいしょと舜平を背負う。

「……………ぐっ」

寝ている人間はただでさえ重い。誠司は歯を食いしばる。

「大丈夫？」

梢は心配そうに誠司を見る。

「……大丈夫……………じゃない……です」

誠司は正直に答える。

「そうみたいね」

梢は苦笑いを浮かべながら、後ろに回り舜平の身体を支える。これで少しだけ楽になった。

誠司は、えっちらおっちらと舜平をなんとか車まで運ぶ。

「この埋め合わせは絶対させてやるからな」

誠司はぶつくさと文句を言いながらも笑みを浮かべる。

「……ったく……………俺たちが来なけりやどうなった事か……………」

と、なんだかんだで心配だ。

「急ぎましょうか」

梢は運転席に乗り込む。

「そうですね」

二人がきちんと座っている事を確認し、誠司も助手席に乗り込んだ。

詩稀村からの帰り道――

結局手掛かりらしいものを見つけられずに帰るのはどうにも心残りだ。期待していただけに残念でもある。そのせいか、車内の空気は重い。

カーラジオからは音楽が流れているが、耳には入ってこない。

日暮れ前の淋しげな道をただひた走る。

田舎という事もあってか――もとより、詩稀村の周囲に集落はない――他の車どころか誰ともすれ違わない。

まるで世界に誰もいないような錯覚に陥る。

運転席の梢に目をやると、まっすぐ前を向いている。運転中だから当然だが、普段なら感じられる余裕が一切感じられない。どこか表情も暗い。

ここに来ようと提案したのは梢だ。しかし、なにもなかった。もしかしたらその責任を感じているのだろうか。

正直、誠司としても残念だ。期待していなかったと言えば嘘だ。

これで手掛かりは途絶えた。

MLC、

唯一この言葉だけが手掛かりと思われる。

もともと、手掛かりかどうかすら確証はない。だが、なにもないよりは救いとなっている。

神崎家、詩稀村神崎邸、このどちらにもなにもなかった。

この事件は詩稀とは関係ないのだろうか。

そもそも、誠司が詩稀に関係しているかもしれないと言った事が前提となっている。

詩稀以外の可能性だってあってしかるべきなのだ。

詩稀だと決めつけて他の可能性を無意識のうちに排除してしまっていた。

しかしそれは誠司だけが思っている事で、梢の依頼で神崎グループの一端を担っているKANZAKI-INQUIRYが全力で調査にあたっている。

梢は詩稀と詩稀以外の双方からの調査を怠ってはいなかったのだ。誠司を信用していなかったわけではなく、可能性の一つとして行っていた。

――のだが、どうやらKANZAKI-INQUIRYを頼るしかなさそうだ。

詩稀が関係していなくてホッとしている気持ちもある。

これ以上、詩稀の事で他の人たちを巻き込みたくはない。そっと静かに生活していくのが本来詩稀があるべき姿なのだから。

誠司は車外に目を向ける。真っ暗でなにも見えない。

夜であるという事に加え、街灯もまばらではなにも見えない。

だが、その分なにかを考える事はできる。

謎の昏睡事件。

詩稀村。

MLC。

これらはなにも繋がっていないのだろうか。

ダメだダメだと誠司は首を振る。

これではまるで、この事件が詩稀に関係あるものである事を望んでいるみたいだ。

詩稀が無関係である事に越したことはない。

だが、それだと自分は無力だ。

事の成り行きを完全に他人に任せるしかなくなってしまう。それはそれで耐えられない。

なにがなんでも、自分の手で重依を目覚めさせなければならない。

だがどうだ。

実際はなにもできていない。

詩稀に関係があると騒いで神崎を巻き込み、結果はなにも出ていない。

この一月は無駄だったというのだろうか……。

いや、そんな事はないと信じたい。

だが、結果は結果だ。

現実として、神崎家にあった資料からはなにも見つけられなかった。

そして、詩稀村でもなにも見つける事ができなかった。

……可能性。

なにか残っていないのか？

まだ探していない場所。

思い出せ。

なにかないか。

どこか忘れていないか。

きっとあるはずだ。

絶対、俺が目覚めさせるんだ。

誠司は詩稀に関係のある出来事を思い返していく。

なにかあるはずなのだ。

忘れている……………忘れて……………いた。

忘れていた。

思い出した。

可能性……。

誠司だからこそ思い出せた場所。

誠司は嬉々とした表情で、運転席の梢に言った。

「宍神さん。明日行ってみたい場所があるんです」

さて、新年になってなにが変わったわけでもなく、いつも通り営業している。いや、確かに新年を感じる。お客がいない。こんなものだと思って、最初からバイトの三人は休みにしてある。正月くらい、家族とゆっくり過ごさせてあげたい。まあ、家族のいない自分には店しかないわけで……。

さすがに正月となれば皆休んでいるか初詣にでも行っているのだろう、常連さんでさえ来ない。

暇だな……。

ゆっくりと自分にコーヒーを淹れて飲みながら本を読んでいる。それくらいしかする事がない。

逆に考えれば、ゆっくりと本を読む時間があるというのは幸せな事ではないだろうか。経営上はあまりよろしくないが。

ある場所にある白い壁の迷路を舞台にしたこの小説、迷路というありがちな場所でありながら、その内容は想像できるものではなく、まさにミステリアスだ。先が読めない。気が付けば次のページをめくっている。

すごいな……。

こんなにワクワクした気分になったのはいつ以来だろう。少し違うが、開店した時も似たような高揚感があったが、やっぱりこれとは違うわけで……。

——カランカラン♪

と、その時お客がやってきた。

「いらっしやいませ」

入ってきたのは一組の男女だった。男の方はスケッチブックを持っているようだ。

二人はそのままカウンターに腰を下ろした。

「なにになさいます？」

「私はトマトジュースを」

女性の方は考えるまでもないという風に言った。

「僕は……そうだな……」

それとは対称的に考え込んでいる。

その間にトマトジュースの準備をする。

「ブレンドと……軽食にサンドウィッチをお願いします」

しばらく考えた末、そう言った。

「サンドウィッチはハム、チーズ、野菜、ツナ、カツ、ミックス……なにになさいますか？」

「じゃあ、ミックスで」

「かしこまりました」

そう言って、先にトマトジュースを女性の前に置く。

「今日は初詣の帰りですか？」

作業しながら話し掛ける。

「ええ、久しぶりに初詣に行きました。こんなにゆっくりと行けたのは、十五年ぶりくらいでしょうか」

女性が笑いながら答える。

「そんなに行っていなかったんですか……」

驚きだ。自分は二年参りをすませている。最近では、行かない人もままいるそうなので不思議でもなんでもないので……十五年とは、えらく長い間行っていないんだな……。

「ええ。娘も一緒だったんですが、その後……」

「彼氏と行くんだと言って……父親よりも彼氏なんでしょうね。まあ、こちらが行ってきたらどうだと言ったわけですけど」

男が苦笑いする。

「別にいいじゃないですか。あなただって認めているんですから」

「それでも……わかっていても淋しいものなんだよ。久しぶりに会えて、そしたら……男親ってそんなものですよね？」

と、こっちに訊いてきた。

「自分は独身なものでよくわからないんですけど、きっとそうでしょうね……お待たせしました」

ブレンドとミックスサンドを前に置く。

「ところで、そのスケッチブックは……？」

「これですか。これは、どこに行くにも持ち歩いてるんです。その時心に残った景色をいつでも描き残せるようにと」

「絵を描かれるんですか……自分はどうも絵が苦手です……」

「僕にはこれしかできませんからね……。唯一の取り柄ってヤツです。よろしければご覧になりますか？」

そう言ってスケッチブックを差し出す。

「いいんですか？」

「どうぞ」

それを受け取り中を見る。

……………。

言葉が出なかった。見るというよりも観るという感じだ。魅せられてしまう。

そこには白黒の鉛筆画でありながら、白黒の写真のようでもあった。

そのページに描かれていたのは、丘の上から街を見下ろした絵だった。丘の上には大きな木が一本だけ立っている。

「すごいですね……まるで写真を見ているかのようです」

「褒めすぎですよ……。や、ありがとうございます。そんなに言われると照れますよ」

男は頬を掻きながら言う。

「いや、本当にすごいです。心奪われるとはこういう事をいうんでしょう、きっと」

「大袈裟ですって」

「そういえば、思い出しますね……」

ふいに女性が言った。

「なにかあったんですか？」

「いえ、この場所での事を思い出しただけです。つまらない思い出話ですよ」

「よろしければ聞かせていただけませんか？」

「ええ、構いませんよ」

若い男女が坂道を上っていた。周りはなんの変哲もない住宅街で、二人がそこを歩いている事に疑問を抱く人はいないだろう。それはありふれた光景で、誰もが普通に生活しているのだから。

その坂の上には学校が建っている。ここは通学路なのだ。

だが、そこを歩いている二人はその学生でも教師でも関係者でもない。

というよりも、ここに来るのは初めてだった。

旅行？

そう表現しても間違いではないが、旅行ではない。

旅。

これは旅だった。

二人は様々な場所を旅している。

日本や他の国だけでなく、他の世界も旅をしている。

それは二人の使命でもあった。

これから先……十数年後の未来に起こる事の準備。それこそが二人の使命なのだ。

その途中、二人はこの場所にやって来た。

といっても、これは二人の意思ではない。二人も何処に行くかは選べない。通り道を抜けた先が何処なのか、それは着いてみるまでわからないのだ。

そんな二人がやってきたのがここだった。

少し離れた所に駅があった。植物……木の名前だったと思うが、記憶には残っていない。

ただ街を散策しているだけで、特に目的はない。もちろん、この旅の目的を忘れたわけではないが……。

「静かね……」

女性がポツリと呟く。

「そうだね。平和そのものって感じがする」

男が答える。

「ここには、あると思う？」

「わからない。でも、ここでのおんぴりとするのも悪くないんじゃないかな。綺麗な景色があれば描きたいしね」

そう言った男の手にはスケッチブックがあった。彼はそのスケッチブックに今まで見た景色を描き続けていた。

「そんな景色があるといいわね」

女性も彼の絵が楽しみな一人だった。

この旅で始めて出会ったのだが、ずっと昔から知り合いだったかのような気分になる。それは、互いにそれぞれ人とは異なったものがあるからだろう。そういう仲間意識なのかもしれない。だが、それとは別に互いに惹かれるものがあつた。俗っぽく言えば一目惚れというヤツなのかもしれない。

「それにしても……」

「ええ……」

全てを言わずとも伝わった。この状況で伝えたい事はこれだろうとしか思えなかったからだ。

すごい坂だな……。

それなりの勾配がかなりの距離にわたって続いている。北海道に実在する同名のそれではないが、同じ名前をここにも付けたくなってくる。

この坂の上の学校に通う学生たちは毎日この坂を上っているのだ。

「ちょっと疲れるな……」

「大変ね……この学校は……」

しかも、その坂は緩やかなカーブになっているので、余計に遠く感じる。事実、遠い。

「そんなすごい坂だったんですか……」

二人の話を聞いて感嘆のため息を吐いた。坂の上に学校を建てるのは津波などの避難所なのだろうかよくわからないが、事実多いような気がする。それほど高くないにしろ、小高い丘の上に建っているのをよく見る。

「これが結構いい運動になりました」

男がブレンドを飲みながら苦笑いをする。

「あそこの学生さんは日々ダイエットですね……」

女性も同じように笑みを浮かべる。

「それで、その坂を上った先にはなにがあったんですか？」

「そうでしたね。坂の話で盛り上がってしまった。その坂の上にはですね……」

ようやく坂を上り終えた二人は校門の前に立っていた。もちろん中に入るような事はしない。

「ねえ、あそこ……」

女性がなにかを見つけた。

彼女が指さした先には木々が見えた。

「林……か？」

「ねえ、行ってみましょう」

そう言うなり男の手を引き歩き出す。今、この坂を上り終えたばかりだというのに元気な事だ。

「坂の上にまた上り坂か……」

木々が青々と茂っており、そこには人が通れるような道があった。が、そこも緩やかながら勾配があった。

「いいじゃない、行ってみましょう」

まあいいか、と男もそれに続いた。

林の中は程良く蔭になっており、歩いて火照った身体に気持ちよかった。かといって暗いわけではなく、木漏れ日が綺麗だった。

そんな林道を抜けると、一気に視界がひらけた。

「うわあ〜」

女性は思わず声をあげた。

男も声には出さなかったが、同じように感動していた。

その丘からは街が一望できた。遠くには海が見えた。どうやら、少し先には海があるようだ。だが、それは数駅ほど離れた場所にあるようで、歩いていくのは少し困難に思える。

ポツンと立つ大きな木が気持ちいい木蔭を提供している。

「疲れた……」

そう言うと、女性は気にもたれて座った。

「そりゃ、あれだけ歩けばね……」

男は少し呆れながらも楽しそうに笑う。

そして、スケッチブックを取り出すとその風景を描き始める。

右手の鉛筆がものすごい速さで動く。その動きには躊躇いが感じられない。

あっという間に風景画ができあがる。

「ねえ、見せて」

「ああ、いいよ」

そう言うと、彼女にスケッチブックを渡す。

「……相変わらずね」

彼女は旅を始めてから幾度となく彼の絵を見ている。そのどれもが素晴らしかった。

一度、絵描きにでもなってみれば、それで食べていけると思うわよ、と言った事があった。だが男は、それもいいかもね、と曖昧に答えただけだった。

彼女と出会う前、彼は自分の絵を売っていた事がある。最初はただ公園などで絵を描いていただけだったのだが、ある日その絵を気に入ったという人が売ってくれと何度も頼むので、根負けして売ったのだ。それが口火となって、彼の噂はその道にあっという間に広まった。

その噂を聞きつけた画廊の人間や、絵を集める事が道楽の富豪が彼の元を訪れるようになった。だが、彼はなかなか絵を売ろうとはしなかった。

何故なら、彼は絵を商売とするために描いているのではなかったのだ。描きたいから描く。自分にはそれしかないから……。

しかし、そんなきれいな事続くはずもなかった。彼にも生活というものがあつた。仕方なく彼は少しだけ絵を売った。

いい気分はしなかった。

自分の心売ってしまったような気にさえなつた。

その絵は世間に認められた。もちろん、それは嬉しかった。初めて人として認めてもらえたのだから。

作者は公表しないという約束だったが、その道の人間の間では有名だったのであまり意味はなかった。

それから、売る用に絵を描く事はあつた。

だが、この旅で描いた絵を売ると言う事は頭にはなかつた。それを売ってしまえば、彼女との思い出を売ってしまうのと同じだからだ。

「でも、そうだったらちょっと淋しいかな……」

その言葉に彼女を見た。

「もちろん、売れば嬉しいけど、そうなっちゃうと私たちの思い出がどこかに行っちゃうみたいで……なんてね。ごめんなさい」

その言葉を聞いて、男は嬉しかった。彼女も同じ気持ちだったのだ。

「いや、そんな事はないさ。この旅の絵を売るつもりなんてない」

彼は初めて彼女に自分の考えを話した。

なんだか、この木の下でなら話せた。

「あの……それってノロケ話ですか？」

っていうか、そうとしか思えない。

「まあ、そうなってしまいますか」

「そうですね」

と、二人は仲良く笑う。

完全にノロケ話だ。新年早々こんな話を聞く事になるとは思ってもいなかった。

まあ、二人で旅した話なんてそんなものだろうけど。

独り者には縁のない話ではある。普段はそんな事を意識しないのに、なんだか無性に淋しくなってきた。

さらには、目の前に二人が憎くさえ思えてきた。

「でまあ、まだ続きがあるんですけどね……」

その声で現実に戻された。危うくもう少しで呪ってしまうところだった。

なんだか、もう終わりのような気がするのだが……まあ、聞いてみる事にしよう。

「この木には伝説というか、それに近いものがあるみたいだったんですよ」

「そうでしたね」

と、また楽しそうに笑う。

本当に呪ってしまいそうだ。

「で、その噂なんですけど……」

と、男が再び話し始めた。

——カサッ！

と、草の音がして二人はそっちを見た。

「あ、ごめんなさい……」

そこには白いブラウスに大きな紫色のリボン、そして白いラインが入ったりリボンと同色のプリーツスカートという制服を着た女の子が立っていた。おそらくすぐ近くの学校の生徒だろう。

「あ、いえ……私たちこそ……」

女性が慌てて立ち上がろうとする。

「あ、そのままいいです。邪魔したのはあたしなんだし」

その女の子は慌てて言う。

「でも、噂は本当だったんですね……」

と、なにか感心したような口調で言う。

「噂……？」

男が首を傾げる。

「あれ……？ あたしたちだけしか知らないのかな……？ この木の伝説ですけど、知りませんか？」

二人は揃って頷く。

「あたしも聞いただけなんですけど、この木の下で告白するとその恋が叶うっていう……本当に知りませんか？」

二人は再び頷く。

「あれ……？」

女の子は不思議そうに首を傾げる。

「まあ、最近らしいんですけどね、その噂って……」

と、にこやかに笑う。

「でも、本当みたいです。二人ともすごく楽しそうですから」

そんな事を言われて、女性は顔が熱くなるのを感じた。

「あたしもそんな風に恋してみたいな……」

それは恋に恋する少女の目だった。

「もしかして、好きな人でもいるんですか？」

女性が女の子に訊いた。

彼女としてみれば、ここで女の子が頬を染めて……というのを期待していたのだが、現実は違った。

「それがいないんですよね……。それが淋しくて。ここは景色もいいし……学校を抜け出してお昼寝するのにはちょうどいいんです」

という、浪漫の欠片もないものだった。

その答えに女性はかなり拍子抜けした。

「でも、確かにそうだな……」

男は女の子の言う通りだと思った。

確かに景色がいい。

それに、風が気持ちよかった。

全身で風を感じられる……普通なら。だが、彼はそれができない。左半身の感覚がないのだから。もちろん、動かす事はできる。五感の一つ、触覚がないのだ。

だが、想像で補えばその気分は味わえる。

男は大きく伸びをして寝転がった。

少しちくちくする草が気持ちいい。

「まったく……」

そう言いながらも、女性も寝転がる。

「やっぱり仲がいいんですね」

女の子が楽しそうに笑う。

「じゃあ、あたしはお二人の邪魔者のようなので、これで退散しますね」

女の子はクスリと笑う。

「というか、次の授業はサボれないんで戻るだけですけど」

そう言われれば、かすかにチャイムの音が聞こえる。

「幸せになって下さいね」

そう言い残すと少女は学校へ戻っていった。

なんだか嵐のようだった。

だが、最後の言葉に彼女の切実な願いが込められているような気がした。

「幸せになって下さいね、か……」

男が呟く。

「正直、僕たちは幸せになれるのかな……」

「なれると信じましょうよ。そうでないと、私たちがしている事が無意味なものに思えてきますし」

「無意味って事にはならないだろ、そうならなくても。僕らがしているのは、この先現れるはずの——」

女性が男の口に指を当てた。

「いいじゃないですか。今を楽しみましょうよ。今が幸せに思えれば、きっと明日も幸せですよ」

ニコリと笑う。その笑みは、どんな心の黒さも白く塗りつぶしてしまうようだった。

「普通であれば、もっと普通に幸せを求められたのかな……」

「でも、普通でなかったから、私たちは出会えた。そう思えば幸せなんですけど」

「そうかも」

空は青く高く、風は次の季節を感じさせた。

「というお話なんですけどね」

やっと終わったか……。っていうか、最後の方はノロケ以外のなにものでもなかったような気がするのだが……。伝説だか噂だか知らないが、どうでもいい。

「ところで、それってどの辺なんですか？」

あまりに初步的な事を訊く。まあ、訊いてみただけでどうでもいいんだけど。

「実はよくわからないんですよ……」

なんという答えだ。つか、答えではないような……。

「私たち、ちょっと変わった旅の仕方をしてたもので……」

と、女性がお茶を濁した……。っていうか、余計に気になる。その思わせぶりな言葉はやめてほしい。どうせ答えられないとか言われそうなので訊かないけど。

そんな事を考えながら次のページをめくった。

そこには、祠の絵が描かれていた。

長い間、人から忘れられていたようで、少し荒れ果てた感じがする。かろうじて稲荷だとわかる。

「ああ、ここはね……どこかの中学校の裏山にある稲荷の祠ですよ」

と、あっさりと言う。

「なんでもほとんど人に忘れられた稲荷でボロボロになっていたんですよ。鳥居もみすぼらしくなっていたし、雑草も生え放題。幟は倒れてるし、祠の扉は傾いている。そんな状態だったんですよ」

「でも、そこって地元では御利益のあるお稲荷様って言われていたらしいんです。でも、お参りする人がいなくなってしまうたらしくて、私たちが行った時はそんな状態だったんです」

「で、どうしてそんなものを描いたんですか？」

当然の疑問だ。まあ、描いて悪いわけじゃないけど……。自分にはよくわからない。

「まあ、なんとなくですね。どうしても描かないといけないような感じがしたんです。お稲荷様の力でしょうかね……」

と、サンドウィッチを頬張りながら言う。

「はあ……」

っていうか、あっさりとした話だな……。っていうか、さっきの丘の上の木の絵の事もそんな感じでよかったような気がするの
は気のせいだろうか。

そんな疑問を感じつつ、次のページをめくった。

そこに描かれていたのは、よくわからないものだった。ビルというわけではないのだが、なにかが建っている……。建っていた？
ような絵だ。

だが、なにかそこにあったのかはわからない。骨組みしかないのだ。

荒れ果てた場所のように思うのだが、壊れたという感じはしない。

だが、完成されたものではないのは確かだ。

不思議そうにそれを見ていると、男が口を開いた。

「そこは、よくわからないですけど、遊園地が建設される予定だったみたいなんですよ。まあ、色々な理由で中断してしまっ
てそのまま放置されたみたいなんですけどね」

なるほど……。それならわからなくもない。

やはり、完全でない建造物というのは不気味だ。荒廃した場所は恐怖を生む。

「ここでもなにかあったんですか？」

そう言うと、二人は互いを見た。そして、目で会話している。

そして、重そうに口を開いた。

「……………まあ、あまりいい話ではないですけどね」

「そうなんです。どちらかといえば怪談になってしまうかもしれませんね」

怪談……。

あまりにこの場所に似合っている。

「それでもいいですか？」

しばらく考えたが、ゆっくりと頷いた。

「わかりました。僕もどうしてこの絵を残していたのか……。確かに印象的だったんですけどね……」

と、一度言葉を濁してから話し始めた。

鬱蒼とした山だった。

周囲にはそれしかない。

申し訳程度にされた道路があるものの、車が通る気配はない。

そんな場所に場違いとも思えるものがいた。二人の男女である。人がいる事すら、そこでは不自然なのだ。

誰も通らない不気味な道を、二人は黙々と歩いていた。

上ったり下ったりの坂のため、最終的には上っているのか下っているのかすらわからない。全体的には平坦に感じるのだから余計だ。

そんな道を、ただただ歩いている。

目の前になにがあるというわけではない。なにも目標物となりそうなものは見えないのだ。

二人も明確な目標というものはない。この世界のどこかにあるとされている「鍵」を探しているのだ。それを探して、あちこちを旅している。

最初の頃は四苦八苦したものだが、今では慣れてしまっていた。もう十年近く旅をしていればそれも当然だろうか。

不自由と思っていた事でも、それに慣れてしまえばどうという事はない。便利なものはなくても、生活する事はできるものだ。苦労はするが。

閑話休題。

「どこまで続いているんでしょうね……」

もう二十分以上歩いている。歩き慣れているとはいえ、景色が変わらない場所を歩き続けるというものは、退屈で普通以上に疲れを感じる。さすがの女性も音を上げる。

「ホントに、どこまで続いているんだろうな……」

と、男の方も疲れを隠せない。

「この辺で休みませんか？」

「そうするか」

と、二人は立ち止まった。

一瞬だけ地面に座ろうか考えたが、女性が腰をおろそうとした直前、男がタオルを敷いた。

「あ、ありがとう」

「なにもないよりはマシだと思うけど」

そう言って、自分の所にもタオルを敷いて座る。

「それにしても、気持ちいいな～」

男は大きく伸びをする。

「そうですね」

女性は深呼吸する。

自然に包まれたこの場所にいると、疲れもあつという間に吹き飛んでしまうような気さえする。

改めて周囲を見回すが、相変わらずなにも見えない。山があるばかりである。

しかし、舗装された道路があるという事は、この先になにかあるはずなのだ。なんの目的もなしに道路は造らない……はずだ。それだけが最後の頼みの綱である。

しばらく休んだ二人は、また歩き始める。

少し歩くと、明らかに人工的に造られたものが見えてきた。

それは、遠くからでもよくわかった。

観覧車。

ジェットコースター。

もう少し近付くと、はっきりとそれがわかった。

フライング・カーペット。

メリーゴーランド。

それはまさに――

「遊園地……」

男はそうこぼした。

女性は声も出なかった。

さらに歩くと、入場ゲートに着いた。

改めて見ても、それは遊園地だった。決して他のものには見えない。

だが……。

「どうして、こんな山の中に……？」

女性がやっと声を出した。

それは男も疑問に思っていた。

こういうものは、こういう場所の方がスペースの確保は容易だろうが、客足に影響が出る。それを防ぐために、交通網を整備する必要がある。

おそらくここもそうするつもりだったのだろう。だが、目の前のそれは、明らかに営業してはいなかった。

というよりも、営業できるような状況ではない。なにしろ、完成していないのだ。

壊れたものでない事は、なんとなくわかる。

建設中になんらかの事情で中断されたものだ。

しかし……いや、だからこそだろうか、妙な雰囲気漂っている。不気味と言い換えてもいい。

なににも侵されない独特の空気が漂っている。まるで、近づく者を全て排除するようなものだ。

二人は互いを見たが、それぞれ心は決まっていた。頷くと、二人は中に入っていった。

「それにしても、よくそんな不気味な場所に入っていきますね……」

コーヒーを飲みながら二人に言う。

俺ならそんな場所には行けないだろう。たとえ誰かと一緒でも遠慮したい。近付くのもごめんだ。

「そうですね。今考えると怖いですね……」

と、男はニヤニヤしながら言った。

「本当にそうですね。お昼でしたけど、薄暗かったですし」

と、女性の方もどこか楽しそうだ。

どうやら、二人でいられれば何処でも楽しいといった雰囲気だ。

「広大なお化け屋敷と思えば楽しめるものですよ」

と、突拍子もない発想を平然と言ってのける。

「それは、昼間でも遠慮したいですね……」

正直、俺には信じられない。

「そうですか。趣向は人それぞれという事で、仕方ないのかもしれませんがね」

笑顔でそういう男を見ていると、この人には恐怖という感覚があるのか疑わしく思えてくる。

「まあ、外見は確かに不気味かもしれませんがね……。やっぱり中の方が不気味でしたね」

中に入ると、さらに不気味な感じがした。そこにはまるでなにか存在しているかのような雰囲気だった。人間ではなく、それ以外のもののための遊園地なのではないだろうか、とさえ思える。

それでも、二人は入っていく。

がらんとしたゲート付近。どの遊園地でもそこは広いのだが、人がいない事で余計にそう感じられた。

が、それもすぐに恐怖に変わった。

「……………っ！」

それを見て、女性は言葉を呑んだ。出そうにも出せなかった。

「どうした……………っ！」

引きつった表情をしている女性に気付き、男はその視線の先を見る。そして、女性がなにを見たのかを知った。

そこには、なにか人の形をしたものが転がっていた。

「……ひ、人……？」

なんとかそう言うのがやっとだった。

「わからない……」

と、男は首を振る。

「ここで待ってて」

そう言うと、男はそこに近付いていく。

「ま、待って……」

女性は男の言葉に従わず、その後ろをついていく。

男は、そんな彼女の性格がわかっていたので、無理に置いていこうとはしない。やれやれ、と思うくらいだ。

なので、男は女性を気にしつつその人の形をしたものに近付いていく。

……………っ！

一瞬、本当に死体かと思ったが、すぐに違う事がわかり、大きく息を吐いた。

「どうしたの……？」

女性は不安そうに男の背中から、ひよこつと顔を出す。

「正体はこれだった」

そこにあるものを指す。

「これって……」

と、それを見て女性も安堵の息を吐いた。

そこにあっただのは、着ぐるみだった。

だが……と思う。

どうしてこんな所に散乱しているのだろうか。

誰かが悪戯でこんな事を……？

だが、誰も来ない場所で悪戯をしても……と思う。

そして、最も気になるのが、その着ぐるみは切り刻まれたような痕があるという事だ。

ここでなにかがあった。

そうとしか思えない。

しかし……着ぐるみを切り裂いてなにを……？

「結局、着ぐるみはなんだったんですか？」

俺は男に訊いた。

「それがですね、オチを言ってしまえばなにもわからなかったんですよ」

はぁ？　と言ってしまいそうになった。

なにもわからなかったって……いいのか？　だが、普通はそんな事わからないだろう。当然か。

そんな事を思いながら、スケッチブックのページをめくった。

そこに描かれていたのは、噴水の絵だった。

噴水の周りには雪が積もっている。

あれ？

ふと、そこに少女が描かれているのに気付いた。

今まで風景画ばかりだったから、なんだか変な感じだ。だけど、別にこの人は風景画専門ってわけでもなさそうだし、おかしくはないんだけど……。

と、そんな俺の視線に気付いたのだろうか、男が口を開いた。

「ああ、その少女ですか？」

「あ、はい……」

「自分でも珍しいと思うんですよ。……実際、普段は人物画はあまり描かないんですけどね。でも……なんだかその少女だけは描きたくなったんですよ」

へえ～……と思って、改めて見る。

確かに画になっている。

「変でしょうか？」

「いいえ、そんな事ないですよ。むしろ、すごく画になっているというか、自然と一体になっているといえますか……」

「そう思いますか？」

「はい」

本当だった。まるで自然に溶け込んだように少女が噴水に腰掛けている。

少女はスケッチブックを広げて、なにかを描いている。その傍らには、なにかカップが置かれている。彼の絵が上手いのでハッキリとわかるのだが、どうもそれはアイスクリームのカップのようだ。

「その子が、なにかを一生懸命描いていたので、つい描きたくなったんですよ」

なるほど……。個人的な事だが、写真を撮っている人を見ると、なんとなくその人を撮りたくなってくる。なんとなく画になるような気がするからだ。

まあ、彼の場合そんなものじゃないのだろうけど。

「そういえば、ここは素敵な場所でしたね……」

女性が言った。

「そうだね。確かに素敵な街だった。神秘の街とでもいうのかな」

「へえ……そんな街だったんですか」

「綺麗な街だったよ。お伽噺……ではないですけど、魔法の街というか、魔法が存在しているような街でしたね」

「そうそう、なんだか物騒な噂もありましたしね」

「物騒な噂？」

なんだか興味を惹かれた。

「この街にある学園に魔物が出るって噂です」

「でも、それも解決したみたいでね……少女の心の檻が作りだした闇だったようですけど」

よくわからない。

「一度行ってみたいですね……」

「そうですね、できれば僕たちももう一度行ってみたいですよ」

「そうですね」

女性も同意する。

素敵な思い出をたくさん持っているんだな、この人たちは。なんだかうらやましい。

羨ましく思いながら、次のページをめくった。

そこに描かれていたのは、桜の木だった。

どこかの学校の校庭だろうか、これだけではわからないが、後ろにフェンスが見えるのできっとそうだろう。手前がグラウンドなので、きっとそうだろう。

桜の花びらがはらはらと散っている。その様子が、まるで動画を見ているかのように伝わってくる。改めて彼の絵のすごさを実感した。

「ああ、この木ですか……」

男が感慨深くそれを見る。

「この木は……」

女性も同じ反応を示す。

「どうかしたんですか？」

そんな反応をされたら気になってしまうじゃないか。

「ちょっと、不思議な木だったもので……」

その道は石垣が続いていた。周囲のどの家にも石垣があった。
石垣の間隙からは桃の花が見える。ピンク色でとっても愛らしい。
反対側の石垣には朱色の花が見える。おそらく木瓜だと思われる。
春の匂いを感じながら、一組の男女が歩いていた。

「綺麗ですね……」

「本当だな……」

春の匂いに包まれながら、二人はそれを堪能していた。
少し勾配のある坂をゆっくりとのぼっていく。

「気持ちいいですね……」

少し冷たいが、それでも気持ちいい。
しばらく歩いていると学校が見えた。
今日は休みなのだろうか、校庭には誰もいない。
……いや、数人の姿が見えた。

しかし、明らかに学生には見えない。
二十代後半といったところか、そのくらいの年齢の男女がいた。

校庭には桜の木が一本だけ立っていた。
さらに近付くと、そこにいるのが二人の男と一人の女性だという事が確認できた。
男女が男を残してその場を去っていった。
残された男は桜の木にもたれ掛かった。

その瞬間――

世界が変わった。
目の前の景色にそれほど変わった様子はなかった。だが、今までいた世界とは明らかに違う事がわかる。
なぜなら、校庭には大勢の学生がいたのだ。

「どうなってるんだ……」

男は目の前の状況の変化に戸惑いを隠せなかった。

「わかりません……どうなっているんでしょう」

それは女性も同様だった。

「僕たちは、『時の口』を通っていないぞ……なのに、なぜ……」

「わかりません。世界ではなく、時間を移動してしまったみたいですね……」

今までにない現象だった。

『時の口』でない場所から移動した事はない。

「もしかして、近くに……」

「いや、誰もいないはずだ。いたとしても、どうして僕たちまで……」

「巻き込まれた……という事でしょうか？」

「だとすれば、すごい能力者という事になる」

しかし、そんな能力者がいるとはとても思えなかった。話でしか聞いた事はないが、伝説とまで言われた時空の能力者であるセイスケとヨウコも、それほどの能力があったとまでは聞いていない。

それをも凌ぐ能力者……存在するとすれば、未来に存在する能力者だけであろう。もっとも、本当に詩稀の人間かどうかはまだわかってはいないのだが。しかし、詩稀以外の者にできるとは思えない。

「あれは……」

その時、女性が一人の少女を見つけた。その少女は、あの桜の木の側にいた。ただそれだけならなんとも思わなかっただろう。だが、彼女から普通でないなにかを感じた。それは、男も同じだった。普通でない者。それが彼女から感じられるものだった。

「まさか、彼女が能力者なのか……？」

「わかりません。でも、関係している事は確かでしょうね」

二人は決断した。

「桜の木……ですか……。なんだか、不思議な力を感じますよね……。あ、冷めてしまいましたね」

ブレンドを淹れなおす。ついでに自分の分も。

こぼこぼと注ぐと、いい香りが漂う。

「いい匂いですね……」

女性が顔をほころばせる。

「よろしければ淹れましょうか？」

「いえ、結構です。申し訳ありません」

「いえ……」

女性は本当に申し訳なさそうに言う。

「決して飲めないわけではないんですけど……。よろしければ、こちらのお代わりをいただけますか？」

「かしこまりました」

俺は男の前にブレンドを置くと、トマトジュースの準備をする。すぐに彼女の前に置く。

「ありがとうございます」

と、彼女は美味しそうに一口飲む。

「やっぱり、私にはこれが合っているみたいですね」

二人は少女に近付いた。

少女は変わらず、そこに立っていた。だが、その表情に感情というものは見られない。冷たい感じがしたが、それよりも哀しさが彼女から感じられた。

長い黒髪が彼女の神秘さを増長させている。

「こんにちは」

女性が優しく言った。

「……………」

しかし、少女はそちらを向こうともしない。

「君だね、時間を移動させたのは」

反応がないのは気にせず男が言った。

「……………！」

さすがにそれは無視できなかつたようで、わずかに反応した。それを見て、二人は確信した。

「君はいったい……………」

「どうしてそれを？」

少女がポツリと言った。

「じゃあ、やっぱり君が……………」

「あなたたちは一体……………」

少女は男の質問に答えず訊く。

「なんでしょうね。ただ、私たちは、あなたがした事に巻き込まれた。それでいいかしら？」

女性は少し挑戦的に答える。

「桜の力ですか。ごめんなさい、巻き込んでしまって。すぐに元の時間に……………」

「その前に……………君は……………」

瞬間、桜の花びらが、ぶわっと目の前を支配した。他になにも見えない。

そして、次に見えた光景は、元の時間の校庭だった。

「桜って、なにか不思議な魔法を感じますよね……」

「本当ですね。僕たちも、すっかり魅了されてしまいました……それで、こんな絵を」

「私も、すっかり夢を見させられました。不思議な夢でした」

女性は男をチラリと見る。

「そう、不思議な夢だった。今ではそんな夢を本当に見たのかもわからないくらいですけどね」

と、苦笑いを浮かべる。

「へえ～……。よくわかりませんが、すごいですよね……」

本当にそう思う。

桜はなにかと伝説があり、春の象徴のようなものだ。全ては、桜が放つ魅了という魔法なのだろうと思う。

なにか不思議な事が起こっても、桜が関わっていればなんだか納得できそうな気さえする。そんな不思議な木だ。

次のページをめくる。

ん？

そこに描かれていたのは、山奥の盆地だった。そこに、奇妙な柱が四本描かれているのだ。

「これはまた、変わった場所ですね……」

「え、ええ……」

ん？ なんだろう？

もしかして、見ちゃいけない絵なのだろうか。

「あ、ああ、すみません。この絵は、ちょっと他よりも思い入れがあるといいますか、なんとといいますか……特別なんです」

「こちらこそすみません。変わった場所とか……」

「いいえ、確かに変わった場所ですから、それは構わないんです」

そう言うと、男はスケッチブックをじっと見た。

なんだろう……？

気になったが、とても訊ける雰囲気じゃない。

森の中に鳥居があった。

その先には一本の道が続いている。

それだけであれば、なんの問題もない。だが、それだけではない。

その一本しかない道の両側に地蔵が並んでいるのだ。鳥居の場所からではどこまで続いているのかもわからない。地蔵が延々と続いている。それも首のない地蔵が。

周囲は森なので光が射し込まず薄暗い。

昼間であっても、その道を通るのには勇気が必要だった。もちろん、慣れればなんともないのだが、初めてそこを訪れた二人にとっては、それは大きな障害だった。

「……………ねえ、本当に行くんですか？」

女性が男に言う。

「……行くしかない……だろ」

と、強がった台詞を言うものの声は震えている。

——ガザザッ！

鳥が葉を揺らす音にビクンと縮み上がる。

「やめませんか……？」

女性は引きつった顔で訴える。

男としても同意したいのだが、どうしてもこの先に進まなければならない。

どうして村への入口がこしかないんだ！ と、ぶつけようのない怒りをおぼえる。

隠れるように存在する場所とはいえ、山に囲まれた盆地に存在し、そこに行くためにはこの道しかない。なんとも不便な場所である。

その道は首のない地蔵が歓迎して迎えてくれる。確かにこれでは意味無く近付く者はいないだろう。

と、どれだけその場にいたらうか。男はやっとの事で決意した。

「行こう」

女性は驚いて男を見る。が、仕方ないと諦めるしかないようだった。自分も覚悟を決めなければいけない。そう感じていた。

やっとの思いで鳥居をくぐる。

最初の一步はおそろしく重かった。いや、それは最初の一步だけではなかった。二歩めがなかなか出ないのだ。

膝はガクガクと震えている。手で押さえようが止まらない。

駄目だ……。これでは駄目だ……。

そう何度も念じ、この震えを止めようとするがなかなか思うようにはいかない。

それでも、一步、また一步とゆっくりとだが進んでいく。

それは百メートルほどだったのだが、二人には何千キロにも思えた。

そんな地蔵の道を通り過ぎると、思わず力が抜けた。

余程緊張していたのだろう、一気にその場に崩れてしまった。

「大丈夫ですか……？」

女性は男を心配そうに見るが、彼女もその場に崩れている。

「あ、ああ。君は……」

もう、なにも言う元気はない。

本当に魂が抜けてしまったかと思えるほどだ。

地蔵を背景に、二人はそこで休んでいた。

今まで色々な場所を旅してきたが、これほど疲れた、恐怖した場所はなかった。

ここは普通の場所ではない。

そんな感じを二人に与えている。だからこそ、この先に進まなければならない。

しばらく休んだ後、二人はゆっくりと立ち上がり歩き始めた。

両脇は鬱蒼とした森だったが、この程度ではなにも恐れる事はない。山の中など、今まで何度も歩いてきている。逆にこういう場所を楽しめるほどだ。

そんな山道を抜けると、急に光が射し込んできた。

目の前に広がっているのは、小さな集落だった。

「……」

四方を山に囲まれている。それがまるで壁のようで、集落を護っているかのようだ。

その山の麓には、大きな柱が立っているのが見える。それはまるで天を支えているかのようだ。

「すごいですね……」

女性はその光景に圧倒されていた。

「ああ……」

男もその光景に魅了されていた。

男は迷う事なくスケッチブックを取り出した。そして、目の前の光景を描き始める。女性はそれをただじっと見ていた。

しばらくして男が描き終わると、集落に向かって歩き始めた。女性もそれに続く。

集落は平和な村そのものだった。

田畑が並び、家々が並んでいる。それはどこか懐かしかった。

「柱に行ってみようか」

その男の提案に女性は頷いた。

四本の柱は村の何処にいても見る事ができた。二人が一番近くにある柱に向かって歩き始めた。

その柱は青い色をしていた。

「あの色は藍でもないようだな……」

男は徐々に近付いてくる柱を見ながら言った。

「不思議な色ですね……」

その青は透き通っているような、それでいて引き込まれるような、不思議な青だった。まるで、海や空のような感じがする。

他の柱は遠いのでよくわからないが、どれも惹きつけられるものがあった。

柱の根本に着く。思わず真下から上を見上げる。

改めて思うのだが、空を――世界を支えているかのようだ。

「そこでなにをしている」

そんな二人の元へ一人の青年がやってきた。それが彼らの運命の出会いだった。が、それはまた別のお話。

「では、そろそろ帰ります」

そう言うと男はスケッチブックをしまい立ち上がった。

「面白い話をありがとうございました」

本当にいろいろな話をしてもらった。

が、逆に疑問になった。この人たちは何者なのだろう？ と。

だが、それはそれでいいのだろう。

この人たちはお客、そして俺はこの喫茶店のマスター。それでいい。

そう、それでいいのだ。

「ありがとうございました」

「ごちそうさまでした」

「ご馳走様でした」

男と女性は礼をして出ていった。

さて、今年も頑張らないとな。

そういえば、年越し蕎麦を食べていなかったな……。

と、ふとそんな事を思い、やって来たのはここ。以前に白河さんに紹介された例の蕎麦屋だ。

日本家屋風の普通の店構えだ。藍色の暖簾には「そば、の二文字。

あの白河さんが一押しだそうだから、由緒ある蕎麦屋なのだろうか……。

ちよっと……いや、かなりドキドキしながら暖簾をくぐる。

「いっらっしやい」

と、声がした。

店にはテーブルが八つほどと、カウンターがあった。

綺麗な店だな……。

と、つい見回してしまう。

「どこでも好きならここに座って下さい」

そう言って顔を出したのは、初老の男性だった。さっきの声の人だ。おそらく彼が店主だろう。

「あ、はい……」

なんとなく恐縮してしまう。

ちなみに、他に客はない。時間をずらしたのだから当然なのだろうか。それとも、正月三が日という事もあつての事なのだろうか。

とりあえず近くのテーブルにつく。

「注文はなにしましょう」

「えっと……」

と、メニューを見る。

かけそば、ざるそば、もりそば、天麩羅、鴨……などなど、一通りはあるようだった。

そういえば、確か白河さんオリジナルってあるんだったよな……。しかし、メニューにはないようだ。

「すみません。実は白河さんの紹介で来たのですが……」

そう言うと、店主の顔が変わった。

「白河の旦那の紹介ですか……。もしかして、兄さんもあれに挑戦しようってんじゃ……」

どこか青ざめているように見えるのは気のせいだろうか。っていうか、引きつった笑みだ。

「え……？ な、なにかあるんですか？」

「兄さんは旦那から聞かされてないのかい？」

「……えっと……。なんでも白河さんの同僚の若い人は食べられなかったとか……」

「そこまで聞いてて食おうってのかい？ まあ、作った本人が言うのもなんですがね、あれはお薦めしませんよ」

作った本人がって……。

「でも、白河さんは絶賛していましたけど……。実は、喫茶店をしているんですけど、ここの蕎麦はもっと旨いって言われてまして……」

「料理をされるのかい？ じゃあ、尚更だ。やめた方がいい。舌がおかしくなっちゃう」

おいおい。

でも……なんだか、店秘伝の味を料理人真似されないようにと隠して……は、いないようだ。それを言う前に止めているし。

って、本当にそんなに危険なのか？

でも、蕎麦だろ？

大丈夫だろ、きっと。

「……あの……その白河さんのオリジナルというのを食べてもいいですか？」

「正気かい？ まあ、こっちは商売だし……注文されたら出すけどよ。正直、これすると客が減るからな……。それに、兄さんは料理人っていうじゃねえか。その人生が終わっちゃうかもしれねえよ。後悔しないかい？」

もう、滅茶苦茶だな……。

「は、はい。後悔しません。お願いします」

しばらくして目の前に蕎麦が置かれた。

なんですか、これは。

説明に困る匂いがする。

薬品……？ 漢方薬……？ なんだかそんな系統の匂いだ。

「いただきます」

そして、一口啜る。

……………。

後悔した。

後悔しまくりました。

なんとか嚙下したが……二口めは遠慮したい気分です。

ガブガブと水を飲む。

「兄さん、無理しなさんなって。残してもいいからよ。これ以上は、本当に人生終わらせちゃうからよ」

「申し訳ありません」

俺は素直に箸を置いた。

「構いやしませんよ。実際、これを完食したのは白河の旦那だけですからね。まあ、旦那専用のメニューなもので、それでいいんですけどね」

いいのか？

っていうか、白河さんってどんな味覚してるんだ？

これは危険だ。

「まあ、新年からこれをおおうってのはいい度胸ですよ、兄さん。まあ、お詫びというか、天麩羅でも出しましょうか」

そう言うと奥に引っ込み、しばらくして丼を持って戻ってきた。それを俺の前に置く。

「まあ、口直しに食べて下さいや」

「あ、でも……」

「こっちは店からの奢りですから、気にせず」

「すみません」

と、有り難くそれを頂く事にする。

旨い！

本当に旨い！

本来はこんなにいい味なのか……。

さっきのはなんだったんだ？

「あの例の蕎麦を注文される方っているんですか？」

と、ちょっと訊いてみた。

「まあ、品書きには載せてませんから、注文される事はないんですけどね……。ごくまれに兄さんみたいに、旦那に紹介されたって人が……。まあ、そういう人たちはある程度は旦那の性格を知っているでしょうから、おっかなびつくりといいましょうか……ちょっとした罰ゲーム……なんて言っちゃいけませんね……度胸試しというか、そんな風に注文してくれるんですけどね……完食はやっぱり旦那しかできないみたいでね……。そうそう、旦那の部下の若い人がさ、ネットとかいうので紹介してくれたみたいで、変わったものが好きな人たちが来てくれたんだけどさ、誰も食べきれなかったね……。みんな泡吹いてたさね」

おいおい、それっていいのか？

すごい……。きつといわゆるゲテモノ好きという人たちなのだろう。そんな人たちを完膚無きまでに叩きのめすとは……恐るべし白河オリジナル。

「できれば、懲りずにまた来て下さいよ」

「ええ」

まあ、普通の蕎麦は絶品だし。

俺は口直しの天麩羅蕎麦を完食し、代金を払って店を出た。

すごい店があったものだ……。

改めて、白河さんのすごさを知ってしまったような気がする……そんな新年。

村の入口に立つ。

しかし、そこに村の面影はない。ただ叢が広がっているだけである。

そんな叢だけの場所に不釣り合いとしか思えない柱が建っている。

青、赤、白、黒。四色の柱。それぞれが東南西北の方角にある。

「ここまで変わると思い出もなにもない感じね……」

その様子を見て梢が呟く。

ここは梢が生まれ育った場所であるだけに思い出深い場所だ。その場所が今はその面影もなく荒れ果てている。まるで、故郷がなくなってしまったかのよう。

「そういえば、この村ってダム計画ってありませんでしたっけ？」

誠司は以前に調べた事を思い出した。

「ええ、確かにあったわ」

この場所は四方を山に囲まれている。村へ通じる道は今歩いてきた一本だけである。まさに陸の孤島といった感じだ。

その村が原因不明の大火事で消失した。だが、その原因を知らないのはその時村にいなかった人の話で、その時村にいた者なら知っている。もっとも、その時村にいた者で今生きているのは梢くらいのものなのだが。

人がいなくなった事で、突然ダム計画が発案された。もっとも、以前からあったのかもしれないが。

しかし、その計画は実行される事はなかった。だからこそ、今がある。

「あのダム計画はね、神崎禎昭前会長のお蔭でなくなったの」

そう言った梢は淋しそうな顔をする。

「璃織魚さんのお父さんの……？」

神崎禎昭は神崎璃織魚の実父である。そして、梢の実兄でもある。

神崎、吉田。この二つの家がこの村を支配していた。しかし、この大火の前に吉田は村を出ていた。しかし、強盗が侵入し本家は絶えていた……とされていた。が、最近その生き残りが確認された。その事を知っているのは誠司と亜依、梢と璃織魚、そして当人だけである。

「ええ。彼がこの村を買い取ったの」

「買い取った？ 村を？」

突拍子もない事に驚かざるを得なかった。驚くなという方が無理だ。

いくらなんでも村を買い取るなんて……。

しかし、神崎グループの財源ならそれも可能ではないかとも思えてくる。

「とにかく、そういうわけでここはこのままってわけ」

そう言うと、梢は神崎邸に向かって歩き出した。

しかし、特に道のようなものはない。叢を掻き分けて行くしかない。どうにも、この場所は自然のなすがままだになっている。誠司の先祖の墓も然り。それほど自然は力強いという事なのだろうか。

そんな中でも比較的元の姿を保っているのが目的の場所、神崎邸である。もっとも、他の家々は大火の際に燃え尽きてしまっているのだが。

その神崎邸は、村の入口からは正反対ともいえる場所にある。苦勞も一入だ。

道なき道を進んでようやく辿り着いたその場所だが、それでも時間の侵食というものには耐えきれず、草は壁を這うように伸び、所々に罅もみられる。

叢の中に現れたお化け屋敷といった感じだろうか。不気味としか表現のしようがない。

「……………」

梢は無言でかつて我が家だった建物を見上げる。

良い思い出も悪い思い出もたくさんある場所だ。感慨深くならずにはいられない。

記憶の中とは変わってしまっているが、そこは間違いなくその場所なのだ。

「さて、入ってみましょうか。もっとも、なにもないとは思うんだけど」

この村を出て外へ行く際にほとんどの荷物は持っていつている。なので、ここにはなにも残っていないはずなのだ。

二人が探すようなものであるならなおの事である。

そんな重要なものをここに置いておくはずがない。

だが、可能性がないわけではない。

重要ではあるが見たくないものだとすればどうだろうか。

神崎禎昭はそういう事をしてもおかしくない人物だ、と梢は思っている。

もっとも、個人的な主観であって実際そうであったかは別問題だが。

幾分朽ちてしまっている立派な木の扉を押す。

ギィィッと嫌な音を立てて扉がゆっくり動く。

「うわ……ホラーハウスね、これじゃ」

と、梢は明るく言うが顔は引きつっている。

「ここが神崎邸……………」

しかし、誠司は興味津々といった風で中を見回す。

だが、神崎邸とはいっても、そこは既に廃墟でしかない。床には大量の埃が積もっている。黒猫が白猫に早変わりしてしまいうだ。

一歩歩けば足跡が残る。

「雪が積もってるみたいですね……」

誠司がボツリと呟く。

「まあ、埃だし、そんなロマンチックじゃないけどね」

梢は素っ気なく返す。

「確かにそうですね……。ほら、もうちょっと風流に……」

「埃で風流に語るなんて、あたしにはちょっと無理かな……」

「俺も無理っぽいですが、これ以上は」

会話終了。

どうも明るく喋るような雰囲気ではない。もっとも、歩く度に埃が舞うのであまり喋りたくないという事もあったが。

二人はまず、神崎禎昭の書齋に向かう事にした。
なにかあるとすればそこだろうと梢が言ったからだ。
階段を上って二階に上がる。
埃のせいだろうか、なんだか階段が滑るような気がする。二人は注意を払いながらゆっくりと上る。
階段を上がって右に曲がる。村の有力者の屋敷だけあってなかなか広い。
廃墟となった今でも、どこことなく煌びやかさを感じる。
こうなる前は高価な調度品が廊下に飾られていたのだろう。そういうものが置かれていたと思われる台が各所にある。
壁には絵を飾っていたと思われる跡が残っている。
誠司はそれらを好奇心剥き出しでキョロキョロと見ながら歩いていた。
「どうしたの？」
先導していた梢が立ち止まって振り返る。
「あ、いえ……なんでもありません」
「そう？ まあいいわ」
そう言って、梢はとある扉の前で止まった。
他の扉と別段違いはないように思われる。
「ここが、兄の書齋だった部屋よ」
そう言うと、梢はその扉をゆっくりと押した。
施錠はされていないらしく、簡単に扉は開く。
「……………」
その中を見て誠司は言葉を失った。
他の場所と同じで埃が積もっていた。が、それはどうでもいい。
目の前には図書館かと思うほどの本棚があった。
五十帖はあろうかという部屋を埋め尽くすかのように本棚がある。
埃のせいでよく見えないが、移動用のレールが設置されているようだ。
なるほど、確かに本棚と本棚の距離はないに等しい。移動させなければ取り出す事もできない。
「それは本棚だけよ。本は全部今の本家に持っていったはずだから」
それを聞いて驚きを隠せない。
この本棚には一体どれくらいの数の本が収められていたのだろうか。それを全て移動させるなんて……それだけでも充分すごい。
。しかし……神崎だと考えると当たり前かと思ってしまう。
なんでも神崎がした事だと思うと納得できてしまうのは……不思議なものだ。
「……ん？ ここにあった本は全部本家に持っていったんですよね？ だとしたら、どうしてここに……？」
誠司は梢の行動に引っかかりを感じた。
全部持っていったのであれば、ここにあるはずがない。
その事を知らなかったのならともかく、梢が自ら持っていったと言った。
じゃあ、どうしてここに来たのだろうか？
その理由が誠司にはわからない。
ないとわかっている場所に来るなんて……普通の梢からは考えられない行動だ。意味のない事を、無駄な事をするはずがない。
「どうしてここに……か。まあ、そうよね。ここになにもないって知ってるのにね。……でもね、この書齋にはなにかあるはずなのよ。小さい頃にね、悪戯でここで遊んだ事があるの。なんとなくなんだけど、その時に見つけたような記憶があるの」
梢は過去を懐かしむようにゆっくりと話す。まるで、昔話を聞かせるように。
「見つけた？ なにをです？」
「いわゆる隠し部屋ってヤツかな」
「隠し部屋……？」
なるほど、と誠司は部屋を見た。
確かになにかありそうな雰囲気はある。他の部屋を見ていないので不審な間取りかどうかはわからない。
でも、そういうものがあってもおかしくないのが神崎である。
(……って、なんだか非常識な事は全部それで片付けてるよな、俺)

梢は壁に歩み寄っていき、壁をコンコンと叩く。

叩いては少し移動して叩き、また少し移動して……を繰り返す。

しかし、音に変化はない。

もしかして記憶違いだったのか……と思い始めていた。

「宍神さん、他の部屋は……なにもないんですか？」

「え？」

梢は誠司の声に振り返った。

「他の部屋……？ そうね……………」

梢は思い当たるような場所がないか、顎に手を当て考え始めた。

立った状態の考える人といったところか。

しばらくそのポーズで記憶を辿っていたが、ゆっくりと首を振った。

「……ここ以外には思いつかないわね。もっとも、あたしも全部を知っているわけじゃない……はずだから。あたしも知らない部屋や通路があるかもしれない。というよりも、あるはずなのよね……」

と、再び壁に視線を向ける。

「なるほど……」

と、つられるように誠司も壁を見る。

何度も思うが、神崎ならあっても不思議じゃない。どうも、そういう認識があるようだ。

しかし、やはりそこはただの壁で、切れ目があるわけでもなんでもなかった。

「でも……………」

「そうなのよね……」

と、どうやら梢も同じ考えらしい。

「ここにはない、という事ですか」

「……………そうなるわね」

と、梢は肩を落とす。

その表情は明らかに残念そうだ。

「ごめんなさいね、無駄足になってしまって……」

梢は何度も何度も頭を下げる。その行動に誠司は狼狽えてしまう。

どうも年上の女性にそういう態度をとられるのは苦手だ。それが仕事をバッチリとしている女性ならなおの事。どうも、普段と違う態度に戸惑ってしまう。

「そんな事ないですよ。俺が無理言って来てもらったわけですし……」

他にどこか……、と誠司は腕を組んで考える。

詩稀村の他の場所にあるという事は考えられないだろうか。

今の神崎の家になかったのだからここにきたわけで……。

旧神崎家にもなにもないようで……。

かといって、焼き尽くされてしまった詩稀村にあるとはとても思えないわけで……。

周辺の山に隠す……なんて事をするはずがないと思うわけで……。

結局ここで八方塞がりになってしまったようで……。

「とりあえず今日は帰りましょうか。陽も暮れてきますし」

「そうですね」

誠司は梢の提案に頷いた。

元々すぐに帰るつもりだったので、宿泊の用意などしていない。

ここは帰るしか選択肢がない。

正直、なんの手掛かりも得られなかったのは残念だ。

一刻も早く垂依を目覚めさせたい。

気持ちだけが焦ってしまう。

それが空回りしてしまうという事をわかってはいる。でも、それでも焦ってしまう。

仕方のない事だと思う。そう思いたい。

結局無駄足になってしまったな……と意思つつ、来た時と同じく梢が運転する車で帰った。

「まさか、またここに来る事になるとはね……」

誠司は目の前の朱色の鳥居を見上げる。

その先には、首のない地蔵の列が続いている。

周囲が森なので光が射し込まず薄暗い。その事が拍車を掛けている。

「できればここには来たくないんだけどね……」

と、誠司の隣にいる宍神梢が呟く。

「同感です」

誠司は肩を落として頷く。

「あら？ あなたは別に……」

ここで生まれたわけでも育ったわけでもないのに……と続けようとしたが、誠司はその内容を察したのか、

「そうですけど、なんだか不気味じゃないですか」

と、梢の言葉を遮った。

「それはそうね。でも、あたしにとってはそれなりに大切な場所。色々あったけどね」

梢は過去を懐かしむように鳥居を見上げた。

「そうでしたね。そんな場所を不気味だなんて、すみません」

「いいのよ。確かにここは不気味な場所だから」

そう言って梢は苦笑する。

「さあ、行きましょうか」

「はい」

そこに手掛かりがあるのかはわからない。だが、今はこの場所に頼るしかない。

全てが燃えてしまった過去の残骸。その中でも唯一遺された異物。

そこになれば可能性が消えてしまう事になる。

もう、この場所しか心当たりはないのだ。

わずかな希望を胸に二人は首なし地蔵の道を歩いていく。

梢にとっては日常だった道。

誠司にとっては数回しか通った事がない道。

風の悪戯か、時折森がざわめきたてる。

歓迎しているのか拒絶しているのか、それはわからない。

「あ、その前に行きたい所があるんですけど……」

突然、誠司が足を止める。

「行きたい所？」

梢も足を止め、首を傾げる。

「はい。せっかくですから俺のご先祖様の墓参りをしようかと」

「ご先祖様……そうね、お世話になったものね」

直接的ではないにしろ、あの出来事では誠司の先祖に助けられもした。そもそも、誠司の能力の一つはその先祖のものだ。

「お花を持ってくればよかったわね」

「……あ、そうですね。でも、今日は顔を見せるだけで赦してもらいます」

「そう。じゃあ、先にそっちに行きましょうか」

「大事な人の一大事なのに、俺も悠長ですよね」

誠司は自虐的な笑みを浮かべる。

「そんな考え方はよしましょう。ご先祖様に彼女が助かりますようにってお願いするのもいいんじゃないかしら」

「そうですね」

そう言うと、誠司は道を外れて森の中に入っていった。

「行きましょう」

誠司は振り返って梢を促す。

その行動に梢は驚いたがその後が続く。

「ちょっと……お墓ってどこにあるの？」

「この先です」

と、誠司は森の奥を指す。

「こんな所に……？」

誠司の先祖の墓は村の誰も知らない。誰にも知らされる事はなく、彼の子孫だけがその場所を知っている。それが遺言の一つでもあった。

それがいかに神崎であろうとも例外ではなかった。

そういう理由で、もちろん梢はその場所を知らない。今、初めて足を踏み入れる。

道なき道を進んでいく。草を掻き分け掻き分け進んでいく。

「もうそろそろなので、もうちょっとだけ我慢して下さいね」

誠司は後ろをついてくる梢に声を掛ける。

「そうね。できれば早く終わって欲しいわね、こういう道は」

「でも、帰りもここですからね」

「……………そうだったわね」

と、梢はため息を吐く。

そうこう行っている間に目的の場所に着いた。突然草がなくなる。

その場所にあるのは墓石だけ。それだけがその場所にある。

不思議と雑草が生えていない。自然の力とは違う別の力を感じさせる。

「こんな場所に……………」

梢はその光景に言葉が出なかった。

森の中にポツカリと空いた空間。

鬱蒼とした叢に現れた神聖な場所。

誠司の祖父母は伝説とされており、一部では憧れの対象として崇拝されている。

「久しぶり」

そう言って誠司は近付いていく。

「突然でなにもないですけど、赦して下さいね」

そう言って、誠司は墓石をじっと見る。

そして、両手を合わせて目を閉じる。

「……俺は大切な人を救おうと思っています。誠介さん、あなたにとっての容子さんと同じくらい大切な人です。こちらはなにも出来ずにいるのに虫がいいとは思いますが、力を貸して下さい。垂依を救えるように……お願いします」

誠司はゆっくりと目を開ける。

梢は墓石をじっと見つめる。

(なんだろう……なにか感じる。ここは普通じゃない)

「どうしたんですか？」

じっと墓石を見つめている梢を見て誠司は声を掛ける。

「え、あ、ううん。別になんでもないわ」

「そうですか？ そうは見えませんが……」

誠司に隠し事は無意味だと思った梢は口を開いた。

「ねえ、なにか感じない？」

「えっ？ ……どういう事ですか？」

「この墓石から……なにか不思議な力を感じない？」

誠司は墓石を凝視する。

しかし、なにも感じない。

そこで墓石に触れてみる。

が、やはりなにも感じない。

「なにも……」

「そう……」

梢は大きく息を吐く。

(でも、確かになにかを感じる……)

「ねえ、もっと近づいてもいい？」

「はい、それは構いませんけど……」

誠司の許可をもらって梢は墓石に顔を近づける。

それは普通の昔ながらのお墓である。特に変わった箇所はない。

不思議な事を挙げるとすれば、周囲が綺麗すぎるという事くらいか。

前面をじっくりと見るが、別段変わった部分はない。

そのまま後ろに移動する。

後ろも特に変わった所はない。

下の方に刻まれた誠介と容子の名前の近くに小さな窪みがある以外は。

「ねえ、この窪みって……」

梢が誠司を呼ぶ。

「どうしたんですか？」

「これなんだけど……」

梢はそこを指す。

「ああ、これですか。これは *rozarío* があった場所です」

「*rozarío*? それ……ここに？」

「ええ、ここに……」

と、誠司がそこに手を近づけた時だった。

「「……」」

二人は言葉を失った。

墓石がぼんやりと光ったのだ。

ほんの一瞬だったが、確かに光った。

「今のは……」

誠司は梢を見るが、梢にも説明できない。ただ首を振るしかできない。

「わからない」

だが、今の一瞬の中で梢は見逃さなかった。

(一瞬だけど文字が浮かび上がってきた。間違いのない、ここにはなにかしらの *epitafio* が刻まれている。そして、それを解読できるのは彼だけ……)

誠司の顔をじっと見る。誠司は茫然としたまま固まってしまっている。

梢はそんな誠司をじっと見つめていた。

「あの……」

それに気付いた誠司は困ったように言う。

「あ、ごめんなさい」

「俺がどうかしました？」

梢は小さく首を振る。

「あのね、もしこの先なにか困った事があつたらここに来るといいわ。きっと、手掛かりが掴めるはずだから」

思いもしない梢の言葉に誠司は首を傾げる。

「今はまだだけど、その時は――ね」

さてと、と梢は立ち上がる。

「そろそろ行きましょうか」

そう言うと梢は来た道に戻り始める。

それを見て、誠司は慌てて立ち上がって追いかけた。

「それではお話ししましょう」

そう前置きして史和が口を開いた。

梢が戻ってきて、ようやく話を聞ける事になった。ほんの数十分だったが、誠司には一日にも思えた。

これからどんな話を聞かされるのかと思うと緊張し、誠司は唾を飲み込んだ。

今まで探しても探しても見つける事ができなかった手掛かり。それが、意外な人物から聞かされようとしている。

しかし、二人も誠司と同じように様々な世界を旅していたのだ。

その旅の中で、そういった世界に立ち寄ったとしても不思議ではない。

「僕たちがそこに行ったのは偶然だったんです」

史和は遠い目をして、その時を懐かしむように言う。

「その世界はMondo Ligsigno Centralo——MLCと呼ばれていました」

「世界中央施設ですか……………」

梢が呟く。

「ええ、確かにそういう風と呼ばれていました」

梨架が補足するように言う。

続けて下さい、と梢が言い、史和が再び話し始める。

「はい。では続きを……と言いたいのですが、僕たちも詳しい事はわからないんです。でも、そういう世界が存在するという事は言い切れます」

と、そこで言葉を切つてため息を吐く。

「もっとも、これが今回の亜依の事と関係があるのかどうかわかりませんが、もしかすると関係があるかもしれないと思っただけですので……」

最後の方は申し訳ないと思ったのか声が小さくなる。

「なるほど……。あたしもそのMLCというのは聞いた事がないですね。少し待って下さい」

そう言い、梢はパソコンのキーを叩きデータの検索を始める。

検索に引っかからないのか、何度か入力し直しているように見える。

カタカタとキーを何度も叩く。

しばらくして、梢は首を振る。

「検索をかけてみましたが、今あるデータベースには該当するものはないようです。誠司君、あなたが今までに見た資料の中にそういう単語があったか覚えてる？」

その梢の質問は無茶としか思えない。

誠司がここの資料を探した日数はおおよそ二十日だ。さすがにほとんどの資料に目を通してている。それを全部覚えているというのは不可能に近い。

「いいえ、なかったと思います」

しかし、誠司は迷う事なくそう言った。

世界中央施設などといった単語があれば、いくらなんでも覚えているし、手掛かりになりそうだと思う。

しかし、そんな言葉はこれまで見た資料にはなかった。故に誠司は即答したのだ。それでも、記憶が完全でないという事で少しあやふやではあるが。

「そうですか……。どうも、お役に立てなかったようですね」

「そんな事はありません。手掛かりが全くなかったのですから、このMLCの情報は有益です。闇雲に探すよりも、対象があった方がなにかわかるかもしれませんし。あたしたちとしても、一刻も早くこの謎の昏睡事件を解決したいのですから」

「そうですか。そう言っていたいただければ幸いです。これは私事になってしまいますが、少しでも早く亜依を目覚めさせて下さい、お願いします」

梨架も一緒に、お願いします、と頭を下げる。

「こちらこそ、ありがとうございました。出来る限りの事はさせていただきます。……と、それはあたしが言わなくても、きっと彼が成し遂げるでしょうけど」

梢は誠司に視線を向ける。

史和と梨架も同じように誠司に視線を向ける。

「……え、あ、はい……………」

三人に見つめられた誠司は戸惑いを隠せず言葉に詰まる。

「今日はありがとうございました。あたしたちは、このMLC、について調べてみます。他にもなにか思い当たる事がありましたら言って下さい」

「……お願いします」

史和は深々と頭を下げて梢にそう言うと誠司を見て、

「誠司君。全て任せてしまって申し訳ないと思う。僕たちの娘なのに……。だが、僕たちは君を信じている。君なら亜依を目覚めさせてくれると。もちろん、僕たちも協力は惜しまない。遠慮なく言って欲しい」

「……………」

誠司はその言葉になにも言わず、無言で頷いた。

「ありがとう」

誠司のその目を見た史和は、改めて誠司の気持ちを感じ全てを託す事にした。それに値すると判断できた。

「それでは、お願いします」

梨架が梢に言い、二人は帰っていった。

「それじゃ、頑張りましょうか」

「はい。手掛かりもできた事ですし」

と、意気込んだはいいものの、ここにある資料はほとんど調べ尽くした。

データ入力されたものでも引っかけからなかったのだから、ここにはもうなにもない、と思った方がいいだろう。

だとすれば、ここ以外に手掛かりがありそうな場所に行くしかない。

――が、そんな場所があるだろうか。

神崎家にないというのに、他に――

「誠司くん、明日なにか用事があったりするかしら？」

不意に梢が誠司に訊いた。

「明日ですか？ 明日も……………」

そう言いつつ、目は膨大な資料に向けられる。

明日も当然ここで資料を調べるつもりだ。今さら訊くまでもないように思うのだが……。

「ここで資料を調べる以外には？」

梢がにこりと訊く。どうやらそれはわかっているようだ。

つまり、他に用事はないか、という事らしい。

「それでしたら、ないです。もともとここで調べものをするしか考えていませんでしたから」

「そう、それならよかった。でも、ここにはもう調べるものもない。違う？」

「……………そうですね」

不本意ではあるが真実だ。この先、資料を調べても徒労に終わるだけだろう。

だが、それを認めたくないのも事実だ。こんなところで行き詰まっていられない。

なんとしても亜依を目覚めさせるんだ！

「だったら、手掛かりがありそうな場所に行ってみましょうか」

梢がいともあっさりと言うので、誠司は咄嗟に理解できなかった。

(今、なんて言ったんだ……………?)

誠司は梢の言葉を反芻する。

「手掛かりがありそうな場所に行ってみよう、

…………ん?

手掛かりがありそうな場所?

「宍神さん、手掛かりがありそうな場所って……そんな所があるんですか?」

誠司は思わず興奮して声が大きくなる。

「ええ——」

梢の目は、わからない? と、言っているようにも見えた。

「——じゃあ、行きましょうか、詩稀村へ」

それは亜依が眠ってしまってから二十日が経った頃だった。

その日も誠司は神崎家で手掛かりを探していた。

毎日毎日、学校なんて全く無視して諦める事なくできるのは愛のなせる業だろうか。

誠司は疲れを感じさせるものの、諦めというものとは無縁の顔をしていた。

彼からは、絶対に見つける、という気迫が感じられるだけである。

そんな中、意外な人物から有力な情報が寄せられた。

「誠司君、娘のためにありがとう」

そう言って部屋に来たのは亜依の両親である 史和と梨架だった。予想だにできなかった来客に面食らう。

「あ、こ、こんにちは」

あまりの事に誠司はうまく言葉が出てこない。

誠司は慌てて立ち上がり頭を下げる。

「いや、畏まらなくてもいいよ。なにせ、お世話になっているのはこちらだ。誠司君が亜依のためにこんな事をしてきているなんて知らずに……申し訳ない」

「本当に。私たち、神崎会長に聞くまで全然知らなかったから……ごめんなさい」

と、二人は深々と頭を下げる。

「いえ、そんな……」

と、なんとも不思議な光景がそこにはある。

「その辺にしておきませんか」

と、声がした方を見るとそこに立っていたのは梢だった。

「富所さん、あなたたちが知っている情報を教えていただけますか」

「そうですね。僕たちも早く亜依に目覚めて欲しいですし」

情報という言葉聞き、誠司は作業の手を休めて三人を見る。

「あの……どういう事ですか？」

状況が飲み込めない誠司が誰とはなしに訊く。

突然、亜依の両親が来たかと思えば情報があると言う。あまりの流れに戸惑うしかない。

「昨日の夜、お二人から連絡をいただいたの。あなたたちが行った中心世界とは違う、もう一つの中心の世界があるらしいの。それで、今日はここにきていただいたというわけ」

梢が掻い摘んで説明する。

誠司は、なるほど……と納得したが、

「違う世界？」

と、その単語に疑問を浮かべる。

誠司が亜依と行った世界……つまり、Rekonto-Mondo——出会いの世界の事だろう。二人を案内したグビディはその名の通り出会いの世界だと言った。様々な世界が出会う場所だと。それを誠司は世界が交差していると解釈していた。

だが……。

それとは別に……？

「とにかく腰を落ち着けませんか？」

そう言った梢に従い、それぞれがソファに座る。誠司は富所夫妻の向かいに座った。

梢はお茶を持ってくると言い残して一度部屋を出た。

梢が戻ってくるまでの間、なんとも重苦しい空気が支配する。

一刻も早く話を聞きたいのだが、梢が不在の時というのは忍びない。

逸る気持ちを抑えて、誠司はその時を待っていた。

資料を読み始めてから二週間が過ぎた。

まだまだ未読の資料が残っている。

一日中部屋に籠もっているが、一人でこなすには無謀な量だ。

稍も休みを利用して検索するのだが、それでも人手が足りない。

かといって、無関係の人間を巻き込むわけにもいかない。

会長の神崎璃織魚が詩稀の人間だとしても彼女に直接させるのは忍びない、というのは梢の意見だ。誠司もそれには賛同した。会長という座にはいるが、彼女はまだ年端もいかない少女だ。今は負担を掛けたくないと思ってなにが悪いだろう。

他の社員にも手伝ってもらえればいいのだが、あいにくと詩稀の人間はいない。

散らばった詩稀の人間もそれほど多くはない。それに、その子孫となれば、自分が詩稀の人間だと知らない者もいるのだとか。

つまり、自分たち以外はアテにならないというわけだ。

無論、この作業がイヤなわけではない。好きではないが。

亜依のために出来る事をしたいと言ったのは自分だ。その気持ちは微塵も揺らいでいない。

しかし……。

このままではいつ終わるかかわかったものではない。

一刻も早く亜依を目覚めさせたい。

気は逸るのだが、なかなか思うようにはかどらないもどかしさ。

どうする事もできないとはわかっているのだが、自分を責め立ててしまう。

「ちくしょう……………」

どうしてもこぼれてしまう言葉とため息。

と、結局その日もなにも見つからないまま終わってしまった。

梢の案内で神崎家の資料室に案内された誠司だったが、そのやる気はあっという間に消えそうになってしまった。

「……………」

思わず絶句してしまった。

目の前には大量の紙の束があった。

本のようにになっているものもあれば、ただ紙をじただけのようなものまで、紙の海のように広がっている。

もちろん、やめるわけにはいかない。

なにしろ、大切な人のためだ。

だが……………」

「ごめんなさいね。雑然としてしまっていて……。なかなか整理するのも大変で……。なにしろ、ここは関係者以外を入れるわけにはいかないから、実質あたし一人で片付けなくちゃいけない状態なの」

「俺は入っても……………」

そんな場所に入ってもいいものかと思ってしまう。しかし、

「あなたは詩稀の関係者でしょ？」

梢は笑顔でそう言った。

確かに誠司は関係者だ。神の能力者を解放した張本人でもある。これで関係ない……なんて事にはならないだろう。

「これだけの量はなかなかデータにできないのよ。少しずつはしているんだけど……………」

確かに、これをデータベースとして保存できていれば多少は楽なのだろう。文明の利器万歳だ。

「ちなみに、そっちで関係ありそうな事は検索してみたんだけど、残念ながらなにも引っかからなかったわ」

「つまり、この中から探し出すしかない、というわけですか？」

「そうなるわね」

「なるほど……………大変ですね」

誠司は思わずため息を吐く。

「やる気がなくなった？」

梢は意地悪げに訊く。

「そんなわけではないですよ。なにせ、亜依のためですから」

「あらあら、妬けちゃうわね……………」

梢は、頑張っ、て、と言うと、誠司を残して仕事に戻っていった。

「さて、頑張りますか」

と、自分を鼓舞する。

だがやはり、目の前の量を考えると、どのくらいの時間が掛かるのか想像もできない。

運良く見つける事ができればいいのだが、最悪の場合、全部を読んでも見つからないなんて事も考えられる。

第一、詩稀に関係があるという確証は未だない。この作業自体が無駄に終わるかもしれない。

しかし、そんな事を考えていてもはかどらない。

今はできる事をするしかない。

遠回りだとしても、少しでも解決に向けて進めるのなら……………」

その気持ちだけで誠司は資料を読み始めた。

「――なるほど、誠司くんはそう考えてるわけね？」

誠司は自分が考えている事、ここに来た理由を梢に言った。

梢は自分のオフィスのソファに座り、前のテーブルに置いていたコーヒーを一口飲んだ。それにつられるように向かいのソファに座っていた誠司も一口飲む。

梢のオフィスはきちんと整理されており、すっきりとしている。それは、窓際に置かれたデスクと部屋の中心にあるこの木製のテーブルとクリーム色の三人掛けのソファが向かい合わせに一組と、コの字になるように同色の一人掛けのソファ、そして壁際にある書類や資料が入れられている白い棚がある以外なにもないからだろう。

デスクの側には観葉植物があるのだが、それ以外は本当に色彩がない。

そのせいだろうか、実際よりも広く感じられる。

カチャリというカップを置く音が妙に響く。

梢は口許に手をやり考える。

「……………なるほど、と言いたいんだけど、そういう能力者の情報はないわね。少なくともあたしたちは察知していない。仮にそういう能力者がいたとしても、その理由がわからないでしょ？」

それは誠司も思っていた。

これが詩稀の能力者であれば……そうすれば解決が早いんじゃないか、という期待で、実際にいるとしたら……というのは理解できなかった。その行動理由がわからないのだ。

誰か標的の人物に攻撃するためにこれだけ関係のない人を対象にしたのであれば別だが、それも今回は考えにくい。本当の標的を見つける方が困難だ。

結局手詰まりになってしまったようだ。

「でも……そうとしか考えられないのも事実かもしれないわね」

と、梢が頷く。

「どういう事ですか？」

「能力者じゃないとしても、なにかしら普通では考えられない力が作用している可能性は高いわ。そして、そういう普通でないものを、あたしは詩稀しか知らない。……君もそう考えたはずだけど？」

確かにそうだ。俺は詩稀の能力者じゃないかと考えた。だけど、梢さんは少し違うようだ。もっと広い範囲で考えている。

よく考えてみればそうかもしれない。

個人でこの能力だとすれば、有効範囲がとてつもなく広い。常識で考えて有り得ない。もっとも、俺たちの事だって世間一般から見ればかなり非常識なわけだけど。

「とにかく、調べてみてもいいかもしれないわね。……………と、そう言ったところで悪いんだけど、あたしも仕事があつて調べる時間をあまりとれないの」

梢がなにか言いたそうに誠司を見る。

「わかってます。というよりも、こっちからお願いしたいくらいです。なにか手伝わせて下さい」

誠司はテーブルに手をついて頭を下げる。

「ちょ、ちょっと……こちらが頼んでいるわけですから……」

「俺が持ち込んだわけですし……」

と、両者共に萎縮している。

「とにかく、俺は一秒でも早く亜依を目覚めさせたいんです。だから、できる限りの事はします」

「わかったわ。とりあえず神崎の家にある資料を探してみるわね」

「俺も手伝います」

「ありがとう」

と言ってから、

「でも、閲覧禁止もあるのでそれは気に留めておいてね」

と、付け加えた。

「やっぱり、ここって入りづらいよな……」

誠司はその大きなビルを見上げた。

どこから見ても立派なビルだ。それほど高いわけではないのだが存在感がある。

一介の高校生には絶対に縁のない場所である。だが、ここが目的地で間違いない。

「神崎グループ総本社ビル、

ありとあらゆる多種多様な事業を展開している神崎グループを統括する場所である。

この建物の最上階に目的の人物はいる。

「さて……………」

誠司は深呼吸をしてから歩を進める。

静かな音を立てて自動ドアが開く。

そこは広いエントランスホールになっていて、両脇には応接セットがあり、それとは別に待合室のようなものもある。まるでホテルにでも来たかのようだ。

入口正面の受付には女性が一人いるだけだ。そこから少し離れた両側に、それぞれ一名ずつ警備員が立っている。

誠司は物怖じする事なくまっすぐ受付に歩いていく。

近付いてくる誠司を見て、受付の女性の方が驚く。なにしろ、ここに来るのはスーツを着た、いかにも、という人ばかりなのだ。私服の高校生が来るなんて事は想像もしていなかった。

そんな受付の女性を気にする事なく誠司は、

「すみません。神崎会長に会いたいですけど」

と、それだけ言った。

一瞬ぼかんとしていた女性だったが、すぐに自分の仕事を思い出した。

「お約束はされていますか？」

マニュアル通りの返答だ。まずはアポイントメントの確認。

「いえ、約束はしていないんですけど……」

「申しわけありません。約束のない方にはご遠慮いただいているのですが……」

当然の返答である。

「えっと……宍神さんにつないでもらえませんか？」

女性は一瞬、誰の事かわからなかったが、すぐにそれが会長の秘書の名前である事を思い出した。なにせ、この職に就いてまだ日が浅い彼女は、要職の名前を完全にはまだ覚えきれていなかった。顔を合わせる事がほとんどないのだ。普段の会話では秘書の方ですんでしまうので、改めて名前で言われると咄嗟に浮かんでこなかった。

彼女はアポイントのない人には帰ってもらうように言いつけられている。それに、彼女にとって会長秘書は会長と全く変わらない存在であり、電話を掛ける事が恐ろしい。くだらない用事で手を煩わせてしまうような事はできない。

第一、目の前にいるのは明らかに高校生だ。

こんな高校生が会長に用事とは……悪戯としか思えない。なにかの罰ゲームだろうか。でも、確かに会長秘書の名前を知っていた。会長の名前を知っている人は大勢いても、その秘書の名前を知っている人は少ない。

本当に大事なお客様だとしたら……いや、考えられない。もしそうなら約束があるはずだ。彼は確かに約束はないと言った。ならば、その可能性は低い。

でも……………。

どうしていいものか考えあぐねる。

彼女は助けを求めるように両脇にいる警備員を見る。

「えっと……………あ、これを出すの忘れていましたね」

と、誠司は財布の中から一枚の緑色のカードを出した。

そこには、確かに神崎グループの社章が刻まれている。

が、それは通行証でも社員証でもない。少なくとも、彼女はそれを今まで見た事がない。

見た事はないが、神崎グループの社章が刻印されているという事は、彼がなにか神崎グループと関わりのある人物という事になる。

もしかしたら、子会社——といってもそれぞれ大会社だが——の社長の息子かなにかだろうか。だとすれば自分は失礼な事をしました……？

彼女は泣きそうになっていた。目には涙が溜まって今にも溢れそうになっている。

どうしていいのかわからず、頭の中が真っ白になり、手足の震えが止まらない。

助けて……と、訴えるような目で警備員を見つめる。

やっとそれに気付いた警備員が近付いてくる。

「どうかされましたか？」

優しい物腰で誠司に訊く。

「あ、その……会長さんにお会いしたいんですけど……」

会長には……と言いかけて、誠司が持っているカードに目をやった。

「そ、それは……」

一瞬言葉を失って驚いたかと思うと、受付の人に、

「……会長秘書の宍神さんに連絡をお願いします。SHIKI-CARDを持っている方が来られていると……」

警備員が受付の女性に指示する。

そう言われた受付の女性は、理解できないまま、言われるがままに実行する。

ガタガタと震える手で受話器を取り、震える手でボタンを押す。

ワンコールで相手が出る。

「あ、あの……」

声が震えているのが自分でもわかる。わかるのだが、どうにも止まらない。

『もしもし？』

「あ、あの……受付ですが……」

『なにかあったの？』

やっぱり怖い。

相手は優しい口調なのだが緊張してしまう。

『もしもし……？』

もちろん宍神は怒ってもいないし、急かしているわけでもない。ただ、どうなっているのか知りたいだけなのだ。

だが、緊張しきってしまった彼女にとって、今の対応は恐怖でしかなかった。

「ちょっと代わってもらえますか」

と、あまりにも話が進まないようなので警備員が代わるように要求する。

一刻も早くこの緊張から逃れたい彼女は、迷う事なく受話器を警備員に渡す。

「もしもし……警備の佐藤と申します」

『……警備の方？ どうかされたのですか？』

突然、電話の相手が変わったので宍神はしがる。

「あのですね。今、受付にSHIKI-CARDを持った方が来られていまして……」

普段、会社の人間との会話がない彼も、やはり緊張して上手く話せない。それでも、なんとか言いたい事を言う。

『SHIKI-CARDを持った……？ 名前は？』

普通の声で訊いているのだが、命令的な口調に感じてしまう。

「えっと……」

警備員は受話器を離し、手で押さえる。

「えっと……お名前は……？」

怖々と名前を訊く。

「椎崎です」

まさかこんな事になるとは……。

と、誠司は少し辟易していた。

なんだか大事になってしまっている気がする。

まあ、約束もなく突然こんな場所に来てしまった自分が悪いといえば悪いのだけれども。

「えっと……椎崎様と仰っていますが……」

警備員は宍神に伺いを立てる。

『椎崎ですか。わかりました、すぐにそちらに向かいます』

そう言うと電話は切れた。

「……」

どうしていいものか警備員はしばらく受話器を眺めていた。

が、ハッと気が付いたように誠司を見る。

「しばらくここでお待ち下さい。すぐにこちらに来られるそうです」

と、言い終わった直後に、チンというエレベーターが到着する音がした。

ゆっくりとドアが開き、そこから宍神梢が姿を現した。

「ごめんなさいね」

そう言いながら慌てて駆けてくる。

その表情は普段の仕事の顔でなく、知り合いのお姉さんといった雰囲気だ。

それは誠司が緊張しないようにそうしてくれているのか、それともそれが本当の彼女なのか、それは誠司にはわからない。

だけど、そう接してくれる事で多少緊張が和らぐ事も事実だ。

「こんにちは、宍神さん」

誠司はベコリとお辞儀する。

「こんにちは、椎崎くん」

梢は礼儀正しく礼をする。それはまさに会社のそれである。

「すみません、突然に……。せめて連絡していればよかったですけど……」

と、梢に手間をとらせてしまった事を詫げる。

「そんな事ないわ。こちらも待たせてしまって……。前にいた人には伝えてあったんだけど、彼女は最近ここに来たものだから……」

と、受付の女性を見る。

梢に見られ、彼女はしゅんと俯いてしまう。

「あ、気にしなくてもいいわよ、あたしのミスだから。あなたに不手際があったわけじゃないから。むしろ、あなたは的確に対応してくれたわ。ありがとう。ごめんなさいね」

と、そんな彼女に優しく声を掛ける。

「は、はい、申しわけありませんでした」

だが、彼女はさらに俯いてしまう。まあ、会長秘書にフォローされれば余計に萎縮してしまっても仕方ないだろう。端から見ても、彼女の身体が震えているのがよくわかる。

「本当に気にしなくていいのよ。こんな事、まずないんだから」

確かに、誠司がここに来たのは数えるほどだ。それも一、二回程度だ。なので、顔を覚えられているわけでもない。その時は梢も一緒だったので、SHIKI-CARDを提示していない。

それに、あのSHIKI-CARDを持っている人間は限られている。そのカードを持っているのは、あの事件に関わった者くらいだ。

つまり、富所史和、梨架、亜依の親子と誠司くらいのものだ。

たったこれだけなので、使用される事がまずない。

史和と梨架が来る事は滅多にないし、亜依と誠司はもつとない。

つまり、このSHIKI-CARDを実際に見た事があるのは、梢と持っている本人くらいのものなのだ。そもそも、本社内でも存在すら知らない人の方が圧倒的に多い。

なので、受付の女性が知らなくてもなんら不思議はない。

前任者と多少の引継はあつたらうが、そこまではされなかったというだけだ。

もちろんこれは問題だが、SHIKI-CARDを持つてくる人間がいるとは思ってもいなかったので本人も失念していたのだろう。

「ところで、なんの用かしら？」

梢が誠司に訊く。

「はい……」

返事をして周囲を見る。

別に聞かれてもいい話ではあるのだが、どうもいい気分ではない。

「ごめんなさい。じゃあ、あたしのオフィスに行きましようか」

と、エレベーターの方に歩いていく。

「はい」

誠司はそれについていく。

その背後では、警備員と受付の女性が頭を下げている。

亜依が眠ってしまったから、誠司は図書館に通い詰め、様々な医学書を読んだ。その様子は、まるで医者になるための勉強でもしているかの勢いだ。小さな医学書から、辞書ほどの分厚さの医学書まで、ありとあらゆるものを貪欲に読んだ。しかし、読んでも読んでも誠司の求めているものはなかった。そもそも、あれが病気だという確証はない……。普通の人なら病気だと考えるのが妥当だろうが、誠司は違う。普通でない力を知っている。普通でない力を持っている。だからこそ、その仮定が浮かぶ。

——これは、なんらかの能力者によるものなのではないか。

これだけ探してもなんの手掛かりもないのだ。心因性のもの……と言われても、こう世界中で同じような症状の患者がいるものだろうか。それも同時期に。それも近接した場所ではなく離れた場所で。有り得ない。異なる時間であればあり得るかもしれないが。それに、伝染病という事も考えにくい。こういった症状が伝染するものなのだろうか？ ウイルスなどが見つからないので可能性は低い。もっとも、未知のものなら話は別だ。しかし、それもまずないだろう。だとすれば、これはなんらかの人為的なものだと考えるのが当然だ。そして、それが出来る可能性のある人々を知っている。ほんの半年前までは知らなかったが、自分もその中の一人なのだ。だからこそ、解決の糸口を掴めるかもしれない。という事は、ここで調べるよりももっと効率のいい場所に行かなくてはいけない。「あそこに行くのか……………」誠司はその場所を思い浮かべる。決してイヤというわけではないが、あまり気がすすまない。そこにいる人がイヤなわけではない。その場の空気がどうも馴染めないのだ。それでも、誠司はそれなりに振る舞っているのだが。「とにかく、行ってみない事にはわからないよな……。もしかしたら、亜依を目覚めさせる手掛かりが見つかるかもしれないし」誠司は重い腰を上げると、図書館を出てその場所に向かった。

誠司は一人病室にいた。

史和と梨架はもう帰った。

誠司君も一緒に帰ろう、と言われたが、誠司はそれを断った。

なにもできないとはわかっていても、ここを離れる事ができなかった。

その気持ちを理解してか二人は、亜依の事をお願いします、とだけ言って帰っていった。

「なあ……どうしてこうなったんだよ……」

亜依の手をギュッと握って話し掛ける。

少しでも反応してくれないかと期待してみるものの反応はない。

原因がわからないいじょう、対策のたてようがない。

せめて手掛かりでもあれば……とも思うが、研究者が調べてもなにもわからないのだから、誠司にわかるはずもないだろう。

最初の事件は約三週間前だった。

シエラレオネ共和国に滞在していた日本人だった。

原因不明の昏睡という事で首都フリータウンにある総領事館を経由してガーナにある日本大使館に連絡がされ、日本へ報告が届いた。その日本人はすぐさま日本に搬送され、現在は日本の病院に入院している。

日本の医師など各研究機関が現地へ赴き調査したが、なにも発見できなかった。

それを皮切りに、コスタリカ共和国、トルクメニスタン、ブルキナファソ、アンドラ公国、ツバル、スリナム共和国……などの国で同様の事件が立て続けに確認された。

そこから広がるように世界中の国々でも起こっている。もちろん、日本も例外ではない。亜依以前にも同じ様な症状で眠っている人がいる。

まだ報告されていないだけで他の国でも同様の事件が起こっている可能性もある。

そして、これからも増えていくであろうと推測されている。

「亜依……どうしたら目覚めるんだよ……」

誠司はぼろぼろと涙をこぼす。

「頼む……目を覚ましてくれ……」

眠っている亜依の顔を覗き込み、ゆっくりと顔を近づけていく。

こうして寝顔を見ているとなんでもないように思える。

確かに異常はない。

だが、いつ目覚めるかわからない。

「亜依……」

優しく眩き目を閉じると、柔らかそうな亜依の唇に自分のそれを重ねる。

……動きのない時間が流れる。

聞こえるのは相変わらず機械の音だけ。

あと、わずかにする寝息。

ただそれだけしかない。

誠司はゆっくりと顔を離す。

そうする事が名残惜しい。

「……」

あとからあとから涙が溢れる。

止める事はできず、ぼたぼたと布団に落ちていく。

「亜依……」

誠司は祈った。

ただ一つの願い。

亜依が目を覚めますように――

「亜依！」

椎崎誠司はノックもなしにそのドアを開けた。

部屋の中からは微かに薬品の匂いがする。

規則正しい電子音も聞こえる。

誠司の声に一組の夫婦が椅子に座ったまま振り返る。

「誠司君……」

男性——富所史和がゆっくりと立ち上がりながら言った。

「亜依は、亜依はどうなったんですか！」

誠司は今にも飛びかかりそうな勢いで詰め寄る。

「ちょ、ちょっと落ち着きなさい」

史和はその勢いに驚き椅子の向こうのベッドに倒れそうになる。

「誠司君、ちょっと落ち着いて」

女性——富所梨架が優しく言う。

が、誠司にはその声は聞こえていなかった。その声どころか、なにも聞こえていない。

なにも聞こえない。

なにも考えられない。

そんな中、目だけが機能していた。

その目は、じっとベッドの富所亜依を見ている。

左腕には点滴のチューブが繋がられていて、首元からもなにやらコードがのびている。そのコードは枕元の機械に繋がっている。規則正しい電子音はその機械から聞こえる。

「どう……………どういふ事なんですか？」

誠司はゆっくりと史和に視線を移す。その目は絶望以外のなにものでもないように史和には思えた。世界が崩壊してしまったかのような、完全な絶望をその瞳に感じた。

その事は少し嬉しくもあった。それは父親として自分の娘をそこまで大切に思ってくれていると思えたからだ。

が、そう喜んでいられる状況でない事も事実。

史和は今にも倒れてしまいそうな誠司を支えるように肩に手を置き、

「大丈夫だ……と思う。少なくとも眠っているだけだ。命に別状はない」

と、優しく諭すように言った。

「原因は……？」

その言葉に史和と梨架は首を振った。

「わからないの。突然倒れて……」

「医者が言うには、原因不明という事だ」

「原因不明……………」

誠司の膝から力が抜けた。いや、膝だけでなく全身から。

まるで魂が抜けてしまったかのように床に座り込んだ。

「おそらくは、最近ニュースになっている原因不明の昏睡だろうと……………」

誠司は虚ろな瞳で史和を見た。

「実際のところはわからないが、おそらくは……」

最近ニュースになっている昏睡事件の事は誠司も知っている。

日本だけでなく世界中で、ある日突然昏睡状態に陥ってしまうという事件だ。

男女、人種、宗教、国家……あらゆる事に共通点がない事からテロではないとされている。その昏睡している人の誰もが国家的な仕事に従事している人ではないからだ。

一部では、軍事的演習ではないかとの噂もあるが信憑性は薄い。その意図が全くわからないのだ。もっとも、意図がないと思わせるために作為的に行っていると述べる人もいるが。

ともかく、毒ガスなどの可能性は薄いとされている。

病気ではないかとも考えられた。時期は異なるものの、ある時から各地でおこっているのだ。新種の伝染病やウイルスの可能性が示唆されたが、そういったものは全く検出されていない。

それどころか、全くの健康体なのだ。眠っている事を除けば。

その為、完全に行き詰まっており、解決の目途はたっていない。

家族たちは、目が覚めるのをただ待つしかないのである。

誠司もそのニュースを完全に他人事として見ていた一人だった。

しかし、目の前で大切な人がその中の一人に加わってしまった今、自分の無力さを痛感せざるを得ない。もっとも誠司にはなにもできないかもしれないが。それでも、そう感じてしまう。

誠司がその電話を受けたのは休み時間だった。

いつも通りに汐嶺学園に行って、いつも通りに友人に会って、いつも通りに授業を受けて……そんな時だった。

「もしもし」

公衆電話からのようで誰からなのかわからない。

変な勧誘とかじゃないだろうな……と、ちょっと声が小さくなる。

『もしもし。誠司君？』

ファーストネームで呼ばれた。という事は、少なくとも知り合いだと……思われる。

でも……。誰からかはよくわからない。

「はい……そうですけど……」

どこかで聞いた事のある声ではあるものの、どうにも思い出せない。

『突然の電話で申し訳ない。富所史和です』

「あ、……………」

背筋が伸びる感じがした。

「あ、ご、ご無沙汰しています」

予想もしなかった相手からの電話に緊張してしまう。

まさか、としか思えない人物からの電話だ。

『突然で驚かないで欲しい。君には言っておいた方がいいと思ってね——』

電話の向こうからは聞こえてくるのは暗い声。

『——亜依が倒れた』

「……………」

その瞬間、時間が止まった気がした。

頭の中が真っ白になって、その言葉が理解できなかった。

驚かないでくれと言われても、無理な相談だ。もちろん、向こうもわかっているだろう。心構えをしろという事だ。

だけど、それが実際出来るかは別問題だ。

『もしもし……？ 誠司君？』

「……………はい」

『僕たちも突然の事でよくわからないんだ……』

「何処ですか？」

『……え？』

「今から行きます」

史和は、誠司がそう言うと思っていたので言わずにおこうとも思ったのだが、考えた末に言う事に決めた。だが、やはりやめておけばよかったと後悔していた。

『だが、こんな電話をしておいてなんだが、授業が……』

「それよりも亜依が大事です。何処ですか？」

なにを行っても彼を止める事はできない。

『亜依は今、翔聖会総合病院にいます』

翔聖会総合病院……そこは、紫藤グループ、アビリティィー・ムーン、そして神崎グループが出資して運営している病院だ。

「わかりました。今から行きます」

そう言うと、誠司は電話を切った。

「ここからだと……時間が掛かるな……………」

かといって行かないなんて事はできない。

授業なんてこの際どうでもいい事だ。

「実央」

近くにいた三朝実央に声を掛ける。

あの後には少しだけぎこちなくなったが、今ではこれまでと変わらない仲になっている。

「なに？」

実央は怪訝そうに振り向く。

「悪いけど帰るわ。というわけで、後はよろしく」

そう言うと、誠司はカバンを持って教室を飛び出していった。

「ちょ……………つたく……」

実央には止める暇すらなかった。

「なにがあったんだか知らないけど、どうしろってのよ！」

実央の叫び声だけが虚しく響いた。

「暇ですね……………」

カウンター席に肘をつきながら座っていた綾乃ちゃんが呟く。

「綾乃……暇だったら掃除でもしろよ」

と、モップ掛けをしていた舜平が言う。

「そうだよ、綾乃ちゃん」

「亜依はえらいね……」

そう言いつつも手伝おうとはしない。

俺はそんな三人を見て和んでいた。

「ほら、マスターもなにか言ってやって下さいよ」

と、舜平が注意の催促をしてくる。

「まあ、みんなもゆっくりしてくれていいから。こういう日もあるよ」

と、オリジナルコーヒーを三人に淹れる。

「まあ、これでも飲んでお客さんが来るのを待とう」

「ほ～ら」

綾乃ちゃんが勝ち誇った風に言う。

「まあ、マスターがそう言うなら」

「じゃあ、あたしも御馳走になります」

と、舜平と亜依ちゃんもカウンター席に座る。

「それにしても、今日はどうしたんだろうね……特別暇だ」

平日・休日関係なく、それなりのお客さんは来てくれていた。

もちろん、常連の白河さんなんかは日課とでもいうくらいに来てくれている。まあ、いつものサイクルなら今日は来ない日だけでも。

まあ、こんな日もあって当然かもしれないな。

もちろん千客万来の方が有り難いけど。

たまにはこうしてのんびり……というのも悪くない。たまに、だけど。

「ずっと訊きたかったんですけど、どうしてマスターは喫茶店をはじめようと思ったんですか？」

唐突に舜平が口を開いた。

「どうして……か……………」

「はい。マスターって正直言って料理の腕とかもすごいじゃないですか。本当に料理人って感じがします」

「うん、それはアタシも同感」

綾乃ちゃんが相槌を打つ。

「だろ？ 綾乃もそう思うだろ？」

「うん……………そういえばそうだね。あんまり気にした事なかったけど」

「少しは気にしろよな……」

「そんな事言われてもさ……」

と、二人で盛り上がり始める。

「舜平さん、話の続きはどうなったんですか？」

と、亜依ちゃんが割って入る。

「あ、そうだった。綾乃のせいで脱線しちゃった」

「アタシのせい？ アタシが悪いの？」

「ああ、もう……。また脱線しそうだから、その辺にしといてくれ」

「納得いかないな……」

と、むくれている綾乃ちゃんをそのままに、舜平が話の続きを始める。

「えっと……………どこまで話しましたっけ？」

「料理人って感じがするってとこかな」

「そうでした。マスターって料理人って感じがするんですよ」

「お褒めいただきありがとうございます」

「あ、いえ。で、そんなマスターなら大きな料亭で働くとか、独立するなら小料理屋とか……普通そんな店じゃないかな、と思う

んです」

なるほどね……。

「確かに舜平が言うようなのが普通なんだろうね。実際、俺はちょっとは名の知れた小料理屋で働いていたんだ。で、そこで料理の基本を徹底的に教わった。それ以外に独学で他の国の料理も勉強したんだ」

「すごいですね……」

と、亜依ちゃんが感心する。

「でも、それなら料理研究家とか……」

「それもいいだろうね。でも、これは俺の夢だったんだ」

「夢……ですか」

「そう。喫茶店を開く事が夢だったんだ。料理屋の暖簾を掲げてしまうと、ちょっと入りにくいって感じがしないかい？」

「そう言われれば……」

「だろ？ 社会人ならともかく、君たちのような学生には縁遠い場所だ。でも、喫茶店ならどうだろう？」

「アタシたちでも気軽に入れるわよね。学校帰りとか友達と……」

「うん。あたしはあんまり行かないけど、休日とか……」

綾乃ちゃんと亜依ちゃんが嬉々とした表情で話す。

「でしょ？ だからなんだよ。誰でも気軽に入れないと意味がない。もちろん、料理でも満足させられないといけないわけだけど」

「なるほど……」

舜平がコーヒーを啜りながら頷く。

「そんな夢があったんですか……」

「そういう事。のんびりと色んな人と話をしたり……楽しいと思わないかい？」

「うん、楽しいかも」

綾乃ちゃんが頷く。

「なるほど……。じゃあ、マスターは夢を叶えたんですね」

舜平が羨ましそうに見てくる。

「まあ、現段階では、ね。これをこの先も続けられるかは別問題だからね」

そうだ。確かに今は叶っている。けど、明日も明後日もこうしていられるか、それは俺にもわからない。

「それにしても、誰も来ませんね……」

亜依ちゃんが立ち上がってドアの方に歩いていく。

「もしかして、札が準備中になってたりして……」

と、軽く冗談を言いながらドアを開ける。

——カランカラン♪

カウベルの音が響く。

「……………」

ドアに手を掛けたまま、亜依ちゃんが立ちすくんでいる。

「亜依……？ どうしたの？」

心配そうに綾乃ちゃんが駆け寄る。

「どうしたんだよ」

舜平も駆け寄る。

「なにかあったのかい？」

俺も気になってドアに駆け寄る。

「……………」

絶句する。

なんだ、これは……………。

目の前に広がっていたのは、ガラスが割れているビル、ひび割れた道路、折れてしまっている街路樹……………。

そう、まるで世界が崩壊してしまったかのような光景だった。

どうなってるんだ、これは……。

真っ先にした事は、自分の目を疑う事だった。

そして、次にしたのは、自分の頬を抓る事だった。

痛い……。

夢じゃない。

どういう事だ……？

頭がおかしくなってしまったのだろうか。

いや、そんなはずはない。

さっきまで世界は普通だった。そう、今日開店するまではなにもなかった。

だからこそ、亜依ちゃんたちが来れたのだ。

そうだ。三人は普通に来たじゃないか。その三人がこの世界の変わり様に気付かないはずがない。もしその時に既にこうなっていたら、だが。

でも、そうでもないようだ。

もしそうなら今三人が驚いている事が説明できない。

「ねえ、ここに来る時は……」

思い切って訊く。

「普通……でした」

そう答えたのは綾乃ちゃんだった。

「別に変わったところなんてなくて、いつもの……いつも通りの街でした。ね、舜平」

舜平に同意を求める。

「……………あ、うん……」

まだ放心しているような生返事だ。

でも、それが逆に本当なのだと感じさせる。

「亜依ちゃんは……………？」

「もちろん普通でした」

まだ把握できていないだろうけど、少し落ち着いてきているようだ。

「……だよね」

どうなってるんだ？

とにかく落ち着かないと。

この場に大人は俺一人なんだから。

その俺が落ち着かないでどうするんだ。

そうだ、深呼吸だ。

「すう～～～はあ～～～……………」

それでも落ち着かない。

どうしたらいいんだ？

もう一度呼吸を整える。

「すう～～～はあ～～～……………」

それでもまだ落ち着かない。

「マスター……オレ、目がどうかしちゃったんですかね……」

不安そうな目を向けられる。

「いや……俺にも同じ光景が見えている。この荒廃した街が……」

「じゃあ、夢じゃないんですね」

綾乃ちゃんが呟く。

「集団幻覚……だったりしませんよね？」

亜依ちゃんが訊いてくる。

なるほど……夢でもなければそれくらいしか……。

「それはわからない。でも、仮にそうだとすると理由がわからない」

「それは、これが現実でも同じじゃないんですか？」

「そうけど……………」

亜依ちゃんの切り返しに対応できない。

確かにそうなのだ。

これが幻覚だという方が有り難い。現実だとは到底信じられないし、信じたくもない。

俺たち四人は、ドアの外に広がる光景を茫然と見ているしかなかった。

それ以外になにができる？

「あ、あれ……………」

その時、綾乃ちゃんがビルの一角を指さした。

「どうしたんだ？」

俺たちはその指の先をじっと見る。

「今あそこでなにかが動いたんです」

なにかいる……………」

それは安心なのか恐怖なのか、今はまだ判断できない。できれば前者であって欲しい。

俺たちは目を皿のようにしてその周囲を見る。

しかし、特になにもない。荒廃した街が見えるだけだ。

「あっ！」

亜依ちゃんが声を上げた。

「どうしたの、亜依」

「今、そこに……………」誰かいる」

そう言うと、亜依ちゃんは店を出て、その場所に駆けていった。

「ちょっと待ってよ……………」

それを追うように綾乃ちゃんも駆け出す。

えっと……………」

「俺たちも行こう」

遅れて俺たちも駆け出した。

亜依ちゃんを先頭に、俺たちは荒廃した街をゆっくりと歩く。

「さっきはこの辺に……………」

と、壊れたビルの蔭を指すが、そこには誰もいない。それどころかなにもない。

周囲を見渡しても人の気配はない。

壁が崩れてしまっているビル。足元には割れたガラスの破片が散らばっている。

ジャリジャリとそれらを踏み、ゆっくりと歩を進める。

人がいた時は気が付かなかったが、人がいないと街はこうも恐ろしいものなのだろうか。見えない場所が多すぎる。

それだけではない。

折れた街路樹が足元をさらに悪くしている。

アスファルトもひび割れ、箇所によっては隆起している。その隆起した場所からは無造作に雑草が生えている。ちょっと生命の強さに感心する。

が、それどころではない。

「ねえ、本当にどこなんだろうね……………」

と、綾乃ちゃんが呟く。

「どこだろうな……………」

舜平が答える。

「それにしてもさ、この世界って世紀末ってヤツなのかな？ ほら、核戦争で…………とか」

「おいおい、それってシャレにならねえぞ」

「そうかもね…………例えとしてまずかったかな…………」

「違うって！ 大気汚染の方だよ！ だいたい、もしそうならオレたち…………」

「それは大丈夫じゃないかな」

と、二人の会話に亜依ちゃんが参加する。

「どうして？」

綾乃ちゃんは亜依ちゃんを見る。

「だって…………もしそうならあたしたち…………」

「遅効性だったら？」

速攻でツッコまれる。

「…………それはそうだけど……………」

と、亜依ちゃんは言葉を失う。

「でも、俺も大丈夫だと思うよ」

「どうしてですか、マスター」

「もし大気汚染…………えっと、綾乃ちゃんの例えなら放射線だね。もしそうだとすれば雑草も枯れてしまってるんじゃないかな」

と、地面を指す。

「……………そうかもしれませんが……………」

「もっとも、完全に安全だなんて言えないけどね。でも、もうどうしようもないけど」

そうなのだ。もし本当に危険だとすれば既に手遅れだろう。

安易に外に出てしまったのは俺の責任だろう。

俺は倒れた街路樹に腰掛ける。

「ちょっと休もうか」

「でも…………」

亜依ちゃんが抗議の目を向ける。

「亜依ちゃんの気持ちもわからなくはないけどね、これ以上店から離れるのは危険だと思うんだ。どうなっているかわからない場所で、あまり動き回らない方がいいと思う」

「…………わかりました」

そう言って亜依ちゃんも座る。

「そうですね。あの人もきっと同じ事を言うと思いますし」

あの人…………？ 誰だろう…………？

「なるほどね。確かにあいつならそう言うかもね」

と、そう言って綾乃ちゃんも亜依ちゃんの隣に座る。なんだかニヤニヤと笑っているところを見ると、綾乃ちゃんは亜依ちゃんの言う「あの人、が誰かわかっているのだろう。

「ちょっと……綾乃……………」

亜依ちゃんは照れた笑みを浮かべる。

そんな二人の楽しそうな顔になんとか和んでしまう。

「マスター……これ以上どうします？」

俺の隣に座りながら舜平が訊いてくる。

「これ以上……？」

「ええ。この先に進みますか？」

なるほど。これ以上先に進むのは確かに賢明じゃないかも。

「そうだね。この辺までにしておくのが無難だろうね」

「オレもそう思います」

と、どこか必死に感じる。まるで誰かに対抗しているような気がする。

もしかして、亜依ちゃんが言っている「あの人、だろうか。

嫉妬なのかな……。

だとすれば、その人はよっぽどなんだろうな……。

と、なんだか気が弛む。

しばらくそこで休んだ俺たちは、喫茶店に戻る事にした。

亜依ちゃんが少し反対したものの、結局は納得してくれたようだ。それには綾乃ちゃんの言葉が少なからず影響したのだろう。なんだか俺まで亜依ちゃんが言う「あの人、に嫉妬してしまいそうだ。

そんな事を思いつつ喫茶店に向かう。

一度通ったからなのだろうか足取りが軽い。

もちろんそれだけじゃないだろう。知っている……というか、慣れた場所に向かっているという安心感からだろう。

「よくわからないけど、コーヒーでも飲みながら考えようか」

「そうですね」

と、俺の提案に綾乃ちゃんが笑顔で頷く。

「亜依も、ほら……」

「あ、うん……」

亜依ちゃんは相変わらず人影を気にしているようだ。

「絶対に誰かいたと思ったんだけどな…………きゃっ！」

と、亜依ちゃんの悲鳴を聞き、俺たちは一斉に亜依ちゃんを見る。

なっ……。

俺たちは言葉を失った。

亜依ちゃんは誰かの腕の中にいた。黒い大きなマントに覆われていて姿はよくわからない。

さらに、首にはナイフのようなものが突きつけられている。

「動かないで！」

その黒マント……声からすると女の子のようだ。

「その場でじっとして……」

ゴクンと唾を飲み込む。

俺たちは全く動けなかった。

「動かないで！」

黒マントの少女が繰り返す。

「ちょ、ちょっと待ってくれ……」

「動くな！ 殺すよ！」

俺は亜依ちゃんをなんとか解放してもらおうとするが、相手の恫喝で遮られてしまう。

人質状態となってしまった亜依ちゃんが小刻みに震えているのがわかる。

「マスター……」

小さな囁きが聞こえる。その声も震えている。

「亜依」

綾乃ちゃんはなんとか勇気を振り絞って亜依ちゃんの名前を呼ぶ。

情けない事に、俺は一步も動けないでいる。

なにもできないでいる。

本当に情けない。

「なあ、落ち着こうじゃないか。君は誰なんだい？」

俺は両手を挙げて優しい口調で言う。

「あんたたちこそ何者だ！ ベステートの仲間なのか！」

少女は強い口調で言う。

ベステート？ なんだそれは。

「なにを言っているのかよくわからないんだが……。なんだい、そのベステートというのは」

少女は俺をキッと睨む。

「ベステートを知らない？ ふざけないで！ そんな事言っていると、この子がどうなっても知らないわよ」

ナイフを亜依ちゃんに突き付ける。それに恐怖し、亜依ちゃんはビクンと動く。

「ま、待ってくれ。本当に俺たちはそんなものは知らないんだ。気が付いたらこんな風になっていて……。もし知っているなら……」

「あなたたちは……………」

そう言った少女の声は弱々しかった。今までの気丈さはどこにも感じられなかった。
そして、最後まで言い終わらないうちに、ゆらりと揺れたかと思うとその場に倒れた。
なにが起こったのかサッパリわからなかった。
とにかく、亜依ちゃんは解放されたわけだ。

俺は茫然としている亜依ちゃんに駆け寄り、手を引き店の中に入れる。

「さあ、二人もとりあえず店の中に」

と、押し込むように綾乃ちゃんと舜平も店の中に入れる。

「で、でも……………」

綾乃ちゃんはずっとあの少女を見ている。

「マスター……。あの子、あのままにしておくんですか？」

亜依ちゃんも訴えかけるような目で俺を見る。
確かにこのままにしておくわけにはいかないだろう……。
でも……。

でも、とも思う。

彼女は亜依ちゃんに危害を加えようとした。

なにをしでかすかわからない。

そもそも誰なのかわからないのだ。

そんな少女を店の中に入れても大丈夫なのだろうか。

このままにしておくべきか、中に入れるべきか……それが問題だ。

と、俺が悩んでいる間に亜依ちゃんが再び外に出る。

「助けなきや」

そう言うと、倒れている黒マントの少女に近付いていく。

「亜依ちゃん」

なにかあつてはいけない。俺も少女に駆け寄る。

「よいしょ」

と、亜依ちゃんは倒れている少女を抱きかかえるようにして起こす。

「亜依ちゃん、ここは俺に任せて」

と、俺は少女を抱きかかえる。

「マスター……………」

「このままにしておくわけにもいかないからな」

そう言ってウインクする。

「はい。ありがとうございます」

まあ、結局こうなってしまったわけだけど。

俺は少女を抱きかかえて店に入る。念のために施錠もしておく。

「えっと……」

連れてきたはいいものの、どうしたらいいものか……。

テーブルの上に寝させるわけにはいかないし……。やっぱり奥に連れて行くしかないようだ。

「舜平、奥に布団を敷いてくれないか」

「わかりました。……………で、その布団はどこにあるんですか？」

そうだよな……わかるわけない。

「休憩室の隣から俺の家が上がったところが客間だ。その押入に布団があるはずだから、それを適当に敷いてくれ」

と、その少女を抱えたまま指示する。

「わかりました」

「アタシも手伝うわ」

と、舜平と綾乃ちゃんが奥に向かう。

俺もそれに続いて奥に向かう。

亜依ちゃんは扉越しに外をじっと見ていた。

黒マントの少女を綾乃ちゃんと舜平に任せ、俺は店にいる亜依ちゃんの所にやって来た。相変わらず外を見ている。

「亜依ちゃん、どうしたんだい？」

カウンターに座って声を掛ける。

「……………」

亜依ちゃんは気付かないのか、無言のまま外を眺めている。

「亜依ちゃん」

もう一度呼びかける。と、ようやく気付いてくれたようだ。

「あ、マスター……。ビックリしましたよ……」

よほど驚いたのか、胸を押さえながら振り返る。

「ごめんごめん」

と、笑顔で謝る。

「それにしてもどうしたんだい？ さっきからずっと外を見ているけど」

「はい……………」

と、淋しそうな視線を外に向ける。

「みんなどうしちゃったのかな……って」

みんな……。家族や友達だろう。

確かに外には誰もいない。

人がいなくなって久しい感じだ。

と、それもあるのだが……それ以前にこういう街並みを見た事がない。

店があった周辺にこんな場所はない。

この場所が何処かすらわからない。

「この世界はあたしたちがいた世界じゃないかもしれないですよね」

と、亜依ちゃんが呟く。

「俺たちがいた世界じゃない？」

「あ、すみません。独り言です。気にしないで下さい。……あ、さっきの子どうなったかな」

そう言うと、亜依ちゃんは奥に走って行った。

「この世界は俺たちがいた世界じゃない……か」

亜依ちゃんの言葉を反芻する。

俺たちがいた世界じゃないというのはどういう事だろう？

全く違う次元の世界に来たなんてSFな事じゃないだろう。

未来の世界……なんてのもSFの話だ。

じゃあ、どういう意味なんだろうか……。

これは考えるだけ無駄かな。

俺は考える事をやめ奥に向かう。やはり、あの少女の事が気になる。

舜平がいるので大丈夫だとは思う。だが、あの少女がまだ武器を持っていたら……。そう思うと自然と歩が早くなる。

しかし、それは杞憂に終わった。

結論から言えばなにもなかった。少女はまだ眠っていた。

黒マントを被っていたのでその時はわからなかったが、マントを脱がした今、少女の姿がそこにある。

思ったより若い。十歳と少しといったくらいだろうか。もっとも、見た目で判断できるとは限らないが。

逆に考えれば、そんな歳の子があんな風に……それはそれで未恐ろしい。

そんな子でも、眠っている今は普通の女の子だ。

俺は店に戻りコーヒーの準備をする。少しでも三人の緊張をほぐしてあげたい。

コポコポとコーヒーのいい匂いがする。この瞬間が好きだ。

じっくりと少し濃いめに淹れる。それをカップに注ぎミルクを入れる。

自分の分を含めた四つを部屋に持って行く。

「さあ、これでも飲もうよ」

と、みんなの前にカップを置く。

「……ありがとうございます。ノドが潤いてたんですよ」

と、舜平がまずカップを取る。

「そうね。緊張したからかな。ノド渴いて……。マスター、ありがとうございます」

と、綾乃ちゃんもカップを手取る。

「ほら、亜依ちゃんも……」

「はい、ありがとうございます」

そう言って一口含む。が、すぐに少女に視線を向ける。よほど気になるのだろう。

「彼女、特に怪我とかはなかったんだよね」

と、綾乃ちゃんに確認する。

「はい。出血はなかったです」

「なるほど……」

怪我ではないようだ。もっとも見えない箇所のものわからないが。

だとすれば、あの時どうして気を失ってしまったのだろう？ こちらとしては、そのお蔭で助かったわけだけど……。

「とにかく、目を覚ますまで待とうか。彼女ならこの世界の事を知ってるだろうし」

とにかく、この世界の手掛かりは、この眠っている少女しかないのだ。

今出来る事は待つ事しかない。

あたしはこの少女がどうにも気になってしょうがない。

「ベストート、

この言葉も気になる。

あたしはいつも首にしているロケットを握りしめる。

虫を意味するその言葉。

きっと、あたししかその意味を知っている人はいないだろう。

綾乃も舜平さんも、もちろんマスターも。

これをわかるのはあたしか誠司さんくらいだと思う。あとは、神崎さんや宍神さん。そう、詩稀の人にしかわからない。

その言葉を使っているという事は、ここはあたしたちがいた世界じゃない可能性が高い。

気が付かないうちに『時の口』に入ってしまったのだろうか？

でも……。

あたしや綾乃や舜平さんだけならともかく——能力者じゃないマスターまで……考えにくい。もっとも、今は能力者じゃない綾乃や舜平さんまでというもおかしいのだけど。

でも、そう考えるのが自然に思える。

時空の能力者のあたしの影響かな……。

だとすれば全責任はあたしにある。

こんな時、誠司さんならどうするかな……。

そうだ！これが本当に別の世界だとすれば、あたしの能力が使えるとすれば……。

本当は神崎璃織魚さんの許可なく能力を使っちゃいけないんだけど……。緊急事態だし、神崎さんも赦してくれるよね。

「誠司さん……誠司さん……あたしの声が聞こえたら返事をして、

あたしは自分の能力である「時空を響かせる能力」を使う。これでどの世界にいても会話ができる。使い方次第ではあたしを中継として他の人が話す事もできる。でも今はとりあえずあたしだけ。

お願い誠司さん。答えて。

「誠司さん……お願い。答えて……、

もう一度呼びかける。

「誠司さん……誠司さん……、

でも、返事はない。

誠司さんが無視をする事はない。

だとすれば届いていないという事なのかな？

今までこんな事はなかった。

もっとも、あれ以来は能力の無許可での使用が禁止されたから使ってないんだけど。

あ、でも……こっそり使った事があったっけ。璃織魚さん、ごめんなさい。

璃織魚さん……？

そうだ、神崎璃織魚さんなら……神の能力者の彼女なら……。

「璃織魚さん……お願い……璃織魚さん……、

今度は璃織魚さんに呼びかける。

忙しい事はわかっているけど、あとは彼女しか頼める人はいない。もし彼女に連絡できれば、彼女から誠司さんに連絡してもらってこの世界に来てもらう事ができる。もし来れなくてもなにかアドバイスしてもらえる。

「璃織魚さん……返事を下さい……お願いします……」

……………ダメだ。

あたしの能力が使えないみたいだ。

近くに『時の口』がないから確認のしようがないけど、あたしの能力は消えていないはずだ。

だとすると、能力を妨害するようなものがあるとしたか考えられない。でも、詩稀の能力を妨害するものって……。そういう能力の持ち主がこの世界にいるって事？

そもそもベステートってなんだろう？ m o r t oみたいなのなのかな？

この世界の街がこうなってしまったのもベステートのせいなのかな？

そして、あたしの能力が使えないのも……。

全然わからないよ……。誠司さん……助けて……お願い。

何度も誠司さんの顔がよぎる。

でも……助けに来てくれない。ううん、そもそも知らないんだから仕方ないよね。

ここはあたしが自分の力でなんとかするしかない。

もしこれが『時の口』の影響だとすれば対処できるのはあたしだけなんだから。

あたしがしっかりしないと。

でも……誠司さんがもしここにいたら『気楽にいこうぜ。そんなに肩に力入れちゃダメだって』なんて言われそう。

誠司さんの言葉があたりの中にある。それだけでも充分心強い。

誠司さん、あたしは絶対この状況をなんとかしてみせる。

胸を張って誠司さんに会うんだ。強くなったあたしを見せるんだ。

頑張るからその時は笑顔で迎えてね。

その女の子が目を覚ましたのはそれから一時間後の事だった。
彼女は目を覚ますなりナイフを探す仕種をした。
しかし、それがないとわかると、飛び起きて壁に背を付け、拳を構えた。どうやら警戒しているようだ。
まあ、当然かもしれない。
どうやらこんな女の子がナイフを持って一人でいる世界だ。相当危険なのだろう。
ここはとりあえず彼女を落ち着かせるのが先決か……。

「落ち着いてくれ。俺たちは君の敵じゃない」
できるだけ優しい声で言う。が、
「そんな言葉に騙されるか」
と、警戒心剥き出しだ。
やれやれ……。
どうしたら信用してもらえるだろうか。
俺がそう考えていると亜依ちゃんが口を開いた。
「ねえ、この世界はなに？ ベステートってなに？」
と、真剣な顔で訊く。
この世界、なんて質問……まるで別世界に来たみたいじゃないか。いや、そうなのかも。
それと、ベス……なんとか……。いやあ……よく一度で覚えているものだ。流石。
「あなたたち、本当にベステートを知らないの？」
「ええ。なんなのベステートって」
「言葉通りよ」
言葉通り？ そう言われても、その単語自体を聞いた事がないのでよくわからない。
「言葉通り……？ それって、この世界のエラーみたいなものなの？」
……はい？ もしかして、亜依ちゃんはそのベス……なんとかという言葉を知っているのだろうか？
「そうね。エラーと言えばそうかもしれない」
「エラーじゃないとすれば……ベステートって……本当に言葉そのもの？ つまり、虫って事？」
「どうやら本当になにも知らないみたいね」
と、女の子は初めて警戒を解く。
「ええ。あたしたち、気が付いたらここにいたの」
「……なるほど、うちらと同じなんだ……。ごめんね、急に襲ったりして。でもわかって。ここじゃそうでもしないと生き残れないの。誰が敵なのかわからない。極端に言えば、自分以外はみんな敵なの」
みんな敵……。
「もう一つ訊いてもいい？」
「うちにわかる事なら」
「『時の口』って知ってる？」
「なに、それ。初めて聞くけど」
俺も初めて聞く。なんだろう、それは……。
「そう……」
亜依ちゃんはあからさまに落胆する。
「それはなんなの？」
「世界を繋ぐ門のようなもの」
「……世界を繋ぐ門、ね……。その『時の口』は知らないけど、ベステートはなにかの入口を護っているというのは聞いた事があるわ。あくまでも噂だけ」
「ホント？」
亜依ちゃんの表情が途端に明るくなる。
本当になんなんだ？ この二人の会話、サッパリついていけない。
「亜依、もしかしてアタシたち、また……？」
綾乃ちゃんが訊く。
「まだわからない。でも、可能性は高いと思う」

「そう……」

綾乃ちゃんの表情が暗くなる。と、その隣にいた舜平もだ。どうも俺だけ蚊帳の外のようなのだ。

「ねえ、ベステートについてもっと教えて。それと、この世界についても」

「いいわ……。あなたたちは敵じゃないみたいだし。うちも一人よりは誰かといたいし」

そう前置きして話し始めた。

「うちがこの世界に来たのは一年前。気が付いたらここにいたの。本当に突然。なにが起こったのかわからなかった。周囲にあるのは見慣れない景色と、うちが住んでいた村の一角だけだった」

彼女は遠い目をする。その当時の事を思い出しているのだろう。

「うちたち以外に誰もいない。しばらくはその場所にいたんだけど、埒があかないって移動する事になった。なにもない場所もあった。ここみたいに大きな石の建物がいっぱいある場所もあった。とにかく、色んな場所があった。それも途切れ途切れに。パッチワークみたいだった」

パッチワークね……。

「この世界はつぎはぎだらけなの。そして、その多くがここのように廃墟になってる」

確かにこの店の周囲は廃墟だ。

でも、彼女の言っている事が正しいのだとすれば、この廃墟を抜けると別の場所——というか、別の光景が広がっているという事になる。

そんな事があるのだろうか？

「どうしてそうなってしまったのか、しばらくしてその理由がわかったの。ある日、うちの目の前で一つの街が消えた。ううん、消えたというのは正確じゃないわね。ここのように全てが死んでしまった」

「死んでしまった？」

「そう……喰われたの」

「喰われた……？」

亜依ちゃんは冷静に呟いた。

「そう……大きな影が覆った次の瞬間、街は廃墟になっていた。うちはなんとか逃げられたけど、何人かはその時にいなくなった。きっと、ベステートに喰われてしまったのよ」

彼女の目から涙がこぼれる。

「それで、あなたはどうするの？」

綾乃ちゃんが口を開いた。

「ベステートに復讐する！ 絶対に倒す！」

力強い目で綾乃ちゃんを見る。その目が本気なのだと語っている。

「でも、どうやって倒すんだ？ 世界を喰ってしまうようなヤツだろ？」

舜平が呟く。

もっともだ。世界を喰ってしまうようなものを相手にどうしようと……。

「どうすればいいのかわからない。でも……絶対できるはず」

「根拠のない自信か……。それじゃ無理ね」

綾乃ちゃんは冷たく言い放つ。それは俺も同感だけど、そこまで言う必要はないんじゃないかな……。

「でも、綾乃……。ここがもし……」

「わかってるわよ、亜依。アタシだってそうするしかないとは思ってるけどね。その門が本当に『時の口』ならいいけど……」

「賭けるしかないんじゃないかな」

「……もう。亜依って意外と頑固だよな……」

「アリガト」

亜依ちゃんと綾乃ちゃんの会話は俺にはよくわからない。

でも、この二人は……もしかすると舜平もなにか知っているのか？

「というわけだから、あたしたちもできる事があるなら手伝うわ」

「本当に？」

「もちろん。あたしたちだって元の世界に戻りたいもの。そうだ、あなたの名前は？ あたしは亜依」

そう言って手を差し出す。

「うちはパメラ」

「そう。よろしく、パメラ」

二人は手を重ねる。

「アタシは綾乃、よろしく、パメラ」

それにさらに手を重ねる。

「オレは舜平。よろしくな。で、こちらが……」

「直哉です。よろしく」

五人で手を重ねる。

「ところで、パメラの他に誰かいらないの？」

綾乃ちゃんが訊く。

「うちの他にもいると思うけど……でも、どこにいるかはわからない。第一、友好的かどうかはわからない」
なるほどね……。まあ、最初に襲われたし、パメラも最初に言っていたし。

というわけで、一緒に行動する事になったわけだ。そして、どうやらベ……なんとかを倒すらしい。

急に知らない場所に来たと思ったら、いきなりファンタジーな展開だな……。

もしかして、俺は夢でも見ているのだろうか。本体は店のカウンターで寝息を立てている……んだったらいいんだけどな……。でも、どうやら現実っぽい。

夢でこうもリアルならそれはそれですごいよ。だいたい、夢って支離滅裂だし。まあ、これも大概か。

「ところで、そのベステートってのはどこにいるの？」

綾乃ちゃんがパメラに訊く。

「それがですね——」

パメラは持っていたマグカップをテーブルにコトリと置く。

「——東の方にいると……」

「それって、誰に訊いたわけ？」

「……噂、です」

パメラは消え入りそうな声で言う。

「ちょっと待って。噂って事は、他にも誰かに会ったって事だよな」

亜依ちゃんが言う。

「……はい。東から逃げてきた人に会いました」

「……逃げてきた？」

「そうです。なんでも、喰われる……って。必死に西の方に逃げていました。色んな話はその人たちから聞いたんです」

「どうして一緒に逃げなかったの？」

「それは……」

亜依ちゃんの質問にパメラは俯く。

「はぐれちゃったんです」

と、小さな声で呟く。

「はぐれたって……。普通はさ、西に行かない？ どうして東に行くわけ？」

綾乃ちゃんの言う事はもっともだ。普通はそうするだろう。

「それは、西に行ってもなにもない事を知っているから」

そういえば、パメラは西からって……なるほど。

「わかった。とにかく東なのね」

「はい。東に大きな建物があって、そこにベステートがいるって……」

「マスター……」

亜依ちゃんが俺を見る。

「わかってるよ。行こう」

「仕方ないわね」

「しょうがない」

綾乃ちゃんと舜平も笑みを浮かべる。

こうして、俺たちは東にあるというベ……なんとかのいる場所を目指す事になった。

俺たちは出来る限りの準備をして店を出た。まあ、武器なんかは当然ないわけで、準備するものといえばそんなにない。強いて言えば食料くらいなものだ。

亜依ちゃん、綾乃ちゃん、舜平は出勤してきたわけだから着替えなんかがあるはずもなく……かといって俺が用意する事も難しいものがある。

なので、衣に関しては我慢してもらうしかない。

とりあえず軽食を用意し、すぐに着くとも思えないので日持ちしそうな料理も作っておく。

その準備に結構な時間を要してしまった。

その間にパメラは自分の装備の手入れをしている。綾乃はそれを興味津々といった目で見ています。

「ねえ、そんなものどうやって手に入れたの？」

手持ち無沙汰な綾乃が訊く。

「これは、組織にもらったの」

ナイフや銃を元の場所に返ししながら答える。

「組織……？ なに、それ」

「オーガニーツ。正式にはスプテラ・オーガニーツ。通称、組織。まあ、普通は組織かオーガニーツって言ってるわ」

「それって……」

「当然、対ベステートのものよ」

「へえ……そんなものもあるんだ」

「でも、きちんとしたものじゃないの。うちらみみたいな人たちが集まって構成されたものだから……ただのごろつきと大差ないわ。もちろん、ある程度は統制されてるけど」

「ちゃんとそういうのがあるんだ……」

「うちらだって、ただ逃げているだけじゃない」

「でも、どうしてパメラはその組織と一緒にいないの？」

「……………」

パメラはそれには答えず下を向く。

「……まあ、言いたくないなら別にいいけどね」

「……………ごめんなさい」

「いいって」

綾乃は笑顔を向けた。

「なあ、亜依ちゃんはどう思う？」

舜平と亜依は奥のテーブル席に座っていた。

料理はマスターがしているため、二人も特にする事がない。なので、ただ時間を潰すしかない。

「どうって？」

紅茶のカップをコトリと置く。

「いや……この世界だよ」

小さな窓から外を見る。そこには、さきほどと変わらない廃墟が広がっている。

「そうだよね……」

「やっぱり、あの時みたいなものなのかな？」

「わかりません」

亜依はそう言って首を振る。

「そうだよな……。だいたい、オレは既に能力を失ったわけだし」

そう、舜平は既に与えられた能力を失ってしまっている。それは綾乃も同様だった。もっとも、そのせいで舜平は命を失いかけた。しかし、それも今ではいい思い出になっている。

「そうなんです。あたしもさっき考えたんですけど……。でも、よくわからないんです」

「だよな……」

「でも、これが本当に『時の口』に迷い込んでしまったとすれば、あたしのせいって事に……」

「亜依ちゃんのせいなんかじゃない」

舜平はテーブルに乗り出して言う。

「……あ、うん」

亜依は驚いてカップを倒してしまう。

「あ、ごめん……」

舜平は慌ててテーブルの上を拭く。幸いそれほど残っていなかったので被害はテーブルの上だけだった。

「でもさ、そんな事はないと思うけど」

舜平はテーブルを拭きながら続ける。

「だってさ、あの能力ってそんな事ができるようなものじゃないんだろ？」

「そうだけど……」

「だったら亜依ちゃんのせいじゃないよ」

「でも……」

「でもじゃないの」

まだなにか言おうとする亜依をなだめるように言う。

「……ありがとうございます」

「とにかくさ、この世界がどうなってるのか、それも調べないといけないわけか……」

「そうですね」

「それもあるけど、とりあえずはベーステートだな」

「はい。頑張りましょう」

「……って、オレ武道とかできないしな……大丈夫かな……」

「大丈夫だと思いますよ、多分」

亜依は根拠のない笑みを浮かべる。

「まったく……やっぱりオレって頼りないよな」

「そんな事ないですよ」

「そうだって。あいつみたいにはできそうにない」

「あいつって……誠司さんですか？」

「ああ。あいつならなんとかしそうな気もするんだけどな……」

亜依は思わず、そうですね、と言いきなってしまったが、それをなんとか押さえる。自分も誠司を頼りにしている。でも、彼はここにはいない。なら自分がしっかりしないといけない。自分に言い聞かせたばかりだから。

「まあ、頼りないなりに頑張るしかないよな」

「はい、頼りにしています」

改めて廃墟の街を見渡す。

見知った雰囲気があるが、もちろん本来の風景じゃない。

パメラはあちこちに様々な場所がつぎはぎのようになっていると言っていた。きっと、この店はたまたまこういう街のすぐ側に飛ばされたというわけか。

それは幸運だったのかどうか……。

いや、そんな事を考えるのはよそう。今はパメラが言っていた、ベ……なんとかがいるという場所に行く事だけを考えよう。

だが、行ったところでなにができるのだろうか。俺たちは無防備で、武器なんてなくて、かといって格闘技ができるわけでもない。

ダメだダメだ。そんなにネガティブになっちゃ……。こういう時にこそしっかりしないと。俺がしっかりしないでどうする。みんな不安にさせちゃうじゃないか。

よし、と気合いを入れる。

俺たちは言葉を交わす事なく歩き続ける。

そこに漂っているのは緊張感だろうか。空気が重い。

それに、両側に建つ廃ビルがなんともいえない威圧感を与えてくる。

人が隠れるには充分すぎる空間。

誰かに見られているかのような視線。

そして、誰かが襲ってくるかも知れない恐怖。

知らない間に迷い込んでしまった世界。比喩でもなんでもなく、右も左もわからない。この先になにがあるのかわからないという不安がどうしても拭えない。

それに加え、この世界を喰っているという存在を倒しに行く……なんて、まるでゲームのようだ。

でも、これはゲームじゃない。俺たちにとっての現実。それは変わらない。

震える足を一歩ずつ前に進める。

怖くないなんていうのは嘘になる。怖いに決まっている。

でも、それは俺一人の感情じゃない。亜依ちゃんも、綾乃ちゃんも、舜平も……きっとパメラもそうに違いない。

だから、ここでしっかりしないと。

と、そうこうしているうちに目の前の景色が変わった。

最初は、荒廃したビル街だけを調べていたので、こういう場所になっているとは知らなかった。

パメラに継ぎ接ぎのようになっているとは聞いていたが、いまひとつ実感はなかった。しかし、それが今、目の前に広がっている。

ビル街とは全く繋がらない景色だ。

そこには広々とした黄色い大地が広がっている。

まばらに細い木が生えている。

そう……なんというか、サバンナ？

「すごいですね……」

亜依ちゃんが感嘆の声をあげる。

「確かにすごい……なんだか、世界旅行に来たみたい」

と、綾乃ちゃんはなんだかこの状況を楽しんでいる様子。でも、そのくらいがいいのかもしれない。変に肩肘張るよりも、今みたいに気持ちに余裕がある方が。

「それにしても不思議だよな。いきなり変わるってのは……」

と、舜平はちょうど大地が変わった場所に立って足元を見る。

そこは綺麗にアスファルトと地面という風に綺麗にわかれている。まるで途中まで舗装工事をしていて中断しているかのようだ。

本当に街がスッパリと切り離されて、違う場所とくっつけられている。

「ところでさ、何処まで行くんだ？」

舜平がパメラに訊く。

「さあ、うちもよくわからないんですよ。あなたたちがいた場所は、その目的の場所にかなり近いんです。まあ、これはそちらから逃げてきた人たちから聞いただけですけど。ですから、そんなに遠くないと思いますよ。世界の位置が変わっていなければ……ですけど」

なるほど。確かにそうもしれない。俺の店が出現したように、この世界は徐々に姿を変えている。取り込むものを増やしているんだ。だから、その話がどのくらい前のものなのかは知らないが、少なくとも様子は変わってしまっただろう。

「……でもさ、そこがどういう所かわかっているの？ どんな場所なのか知らないと、通り過ぎちゃったって可能性も……」

綾乃ちゃんが不安そうに言う。

「それはわかっています。なんでも、大きな建物が中心にあるそうですから」

大きな建物ね……。

「もしかして、アレとか？」

舜平が地平線を指す。

そこにはうっすらとだがなにかが見える。

「でも、よく見えないし……」

「確かに」

綾乃ちゃんに冷静に言われて少し舜平はしょげる。

「とにかく行ってみましょう」

亜依ちゃんの言うとおりで。

今は先に進むしかない。元々近いというんだから大丈夫だろう。とにかく、それを信じて進むだけだ。

サバンナのような場所を黙々と歩いている。疲れからか、緊張からか、おそらく両方だろう、みんな無口になっている。

誰もなにも喋らず、ただ前を向いて歩いていた。

そもそも、パメラもその場所に行った事はないという。だとすれば方角は正しいのだろうか？ 間違っているとは言わないが、正しいという保証もない。そこは、パメラを信じるしかないのだろう。

そのままどのくらい歩いたのだろうか、もちろん休憩をとったりもしたが二時間近く歩いているだろう。

——きーん！

と、俺の耳に響く音。耳鳴りとは少し違う。

身体の中から響く警告音。

なにかが俺に警告を発している？

なんだ？

わからないまま、またしても光景が変わった。そこはなにかの遺跡のようなものがあった。ピラミッドとは違うけど……。石で出来た壁のようなものがある。

まるで、死人の丘の遺跡のようだ。

写真でしか見た事のないあの場所に似ているような気がする。

「あの影はこれだったのか……」

と、それを見て舜平がため息を吐く。

「まあ、そんなもんでしょ」

と、そう言うが綾乃ちゃんも落胆している。

「ねえ、本当にこっちなのか？」

「多分……」

パメラは自信なさげに俯く。

「多分って……何度も聞いたか……」

綾乃ちゃんは訊くだけ無駄だと思ったのか、それ以上なにも言わなかった。そのお蔭で、パメラは表情をさらに暗くする事になってしまうのだが。

「ほら、元気出していこうよ。きつともうすぐだよ」

亜依ちゃんがそう言った時だった。

——アイ、イソイデクレ。ハヤクシュウフクプログラムヲキドウサセルンダ。

そんな声が聞こえた。

付近には誰もいない。それに声は空から聞こえてきた。

亜依ちゃんは口許を押さえて涙を流している。

「亜依、どうしたの……？」

「……………今の声……………」

そう言うのが精一杯のようだ。

亜依ちゃんは口を押さえて固まる。

「おい、もしかして……………」

「そうかもしれない。アタシはあんまり声は覚えてないけど……………」

亜依ちゃんを見て、綾乃ちゃんと舜平はなにか思うところがあるようだ。互いに頷いている。

「……………行こう」

涙を流しながら亜依ちゃんは歩き出した。いや、それは駆け出すと言った方がいいかもしれない。

「ちょっと亜依……」

「しょうがないよ」

そう言いながら、二人は亜依ちゃんを追いかけていく。

「うちたちも行きましょうか」

「でないと置いていかれる」

疲れを忘れたかのように走る。

それにしても、あの声は……なんだったんだろう？

——きーん！

まただ……。また。頭の中に響く音。気のせいかな、さっきよりも大きくなっている。

痛いわけじゃない。ただ音がする。

邪魔だ！ 消えろ！

が、音は消える事はない。断続的に聞こえる。

どうなってしまったんだ、俺は！

そうして走り続けた結果、目的の場所であろう場所に到着した。

そこは高層ビルが乱立していた。それらを繋ぐかのように空中に通路がある。建物のせいで、少し先も見えない。どれもよく似た建物ばかりだ。

人がいれば繁華街なのだろうが、無人のそこは迷路でしかなかった。

陽の光も建物の蔭になってしまって全体的に薄暗い。

「ねえ、ここがそうなの？」

「多分……………」

パメラもキョロキョロと見回している。

その時だった。

——ドオンッ！

と、遠くで大きな音がした。

「なに、今の音」

綾乃ちゃんが叫ぶが、その場にいる誰も状況がわからない。なにしろ、建物が壁のようになっているのだ。

「行ってみるか？」

舜平が誰ともなしに訊く。

もちろん、俺としても行ってみたいが、どう考えても危険だろう。さっきのはおそらく爆発音だ。安全のはずがない。

「行きましょう」

俺が悩んでいる間に亜依ちゃんが走り出す。あの声を聞いてからどうも様子がおかしい。

「しょうがない、アタシも行きましょうか！」

「そうだな。行ってみなきゃどうにもならないだろうしな」

「そういう事。亜依が信じているアイツが関係してるならなおさら」

「頼りになる分、なんだか憎らしいね」

「妬かないの」

と、二人だけで完結させてしまったようだ。

俺とパメラを置いて二人も行ってしまった。

——きーん！

「うっ！」

今までで一番大きな音に思わず膝をついてしまう。

「大丈夫……………ですか…………？」

パメラが心配そうに声を掛けてくれるが、その声に苦しさが伺える。

「君こそ大丈夫かい？」

自分の中の音に痛みを感じる。もちろん物理的な痛みはない。だけど、なにかが痛い。

「うちは大丈夫です」

笑顔で言ってくれるが、無理をしているようにしか見えない。

「もしかして君もかい？」

「……………そうみたいです」

まったく、なんなんだ、この音は。

あの三人は大丈夫のようだけど。とにかく、あの三人だけでもなにもなくて一安心だ。

でも、これ以上は一緒に行けそうにない。

明らかに危険な場所に行ってしまった事は心配だが、どうにも動けない。

——きーん！

世界の大気を震わせそうな音を聞いたのを最後に俺の意識は消えた。

亜依はさっきの音がしたであろう場所に到着した。

もうもうとした煙があがっている。

ビルは完全にえぐれ、瓦礫がビルの入口を塞ぐように積もっている。

だが、そこには誰の姿もない。

そこに誰かがいたのは確かだろう。なにもない場所で、誰もいないのにこれは有り得ない。

「亜依、どうしたの……？」

ようやく追いついた綾乃が肩で息をしながら訊く。

「わからない……………」

ただ、その光景を見ているだけ。

——どおん！

と、また音がした。さっきよりは少し小さい。

「近いな」

舜平は平然と綾乃の隣に立っている。

亜依は無言で走りだした。

「また走るの……………」

「頑張れ、綾乃」

「わかってるわよ」

二人もそれに続く。

この先に行けばなにかわかるかもしれない。
亜依を動かしているのは、あの時の声だった。
ずっと心に響く声。
亜依の名前を言っていた。
いて欲しいその人はここにはいない。
でも、一人じゃない。
それに、なんとかしてみせるって決めた。頼ってばかりじゃなくて、自分だけでもやり遂げるって決めた。
それでも、彼女の心を支えている事に変わりはない。
一人だけど一人じゃない。
そのために、今はただひた走る。
ぼんっ、ぼんっ、という小さな音がいくつかする。
その音を頼りに走り続ける。
だんだんと音は近付いてくる。
音がするという事は誰かがいるという事？
そんな事を疑問に思う余裕もない。
亜依はビルの角を曲がる。
と、

——ぶおっ！

土煙が亜依を襲う。
反射的に腕で目を庇う。
その隙間から小さな礫が飛んでくるのが見えた。
当たるっ！
と、恐怖で目を閉じる。
痛いっ……………と思う直前、誰かに身体をぐいと引っ張られた。
ばしばしっ、と礫は壁に当たる。
「大丈夫か」
男の声だった。一瞬、心に思い浮かべた人物がいたが、その人の声ではなかった。
「あ、ありがとうございます……」
と、自分を抱きかかえるようにしている男の手を払い、振り向いてお礼を言う。
「亜依……………」
ちょうどそこに到着した二人は、とりあえず男に飛びかかっていった。
「彼女を放せ！」
舜平は叫びながら男に飛びかかる。それは、亜依がその男に襲われていると思ったからで、その状況は誰が見てもそう見えた。
「きゃっ」
男は亜依を突き放し舜平の攻撃をかわす。
突然突き放された亜依はよろけるが、壁に支えられてなんとか転ばなかった。
標的を外した舜平は前によろける。
そこに男が膝を出す。
「がっ」
舜平は男の膝を腹に食い込ませ一瞬息が出来なかった。
勢いを殺された舜平は、その場に膝をついた。
男はなにも言わず、その場にうずくまる舜平を見下ろしていた。
「舜平！」
綾乃が舜平に駆け寄る。すぐ側にいる亜依は、茫然と魂が抜けてしまったかのようにその場に立ち尽くしている。
「舜平……舜平……………」

綾乃は舜平を抱きかかえる。

男はなにも言わず、なにもせず、ただそこに立っている。

綾乃は男の顔を見上げ睨め付ける。

「……………そっちが攻撃してきた。ただ、それを阻止しただけだ」

男は綾乃を見下ろしながら、感情のない口調で淡々と言った。

その言葉は確かに正論だ。綾乃はなにも言い返せず、くつと唇を噛んだ。

その間にも、小さな爆音が続いている。

「そろそろ戻らないとやばいな」

それだけ言うと、男は爆音の方に向かって走っていった。

綾乃は悔しそうに男の後ろ姿を見ていた。が、腕の中の舜平が気掛かりだ。

「舜平……目を覚ましなさいよ」

綾乃は何度も呼びかける。

「まったく……。またなの？ ……………どうしてあんたはいつもそうなのよ」

気丈に振る舞おうとはするものの、涙が自然と溢れてくる。

「バカだよ……………。あんたは毎度毎度……………」

綾乃は舜平の胸に顔を埋める。

舜平の服が水分を吸って、部分的に色が濃くなる。

「バカ……………バカ……………」

綾乃はその言葉を何度も繰り返す。何度も何度も。

「……………」

亜依は足の力が抜けて、ゆっくりとその場にしゃがみ込む。

あの一瞬の間に味わった恐怖でなにも考えられない。

爆発音が続く中、三人はその場で止まってしまった。

その爆発音の場所では、数十人の男女が武器を手になにかと闘っていた。

それは全体的に茶色く、揚羽蝶の蛹に六本の手足が生えたような姿をしている。ソイツは建物の壁に取り付くようにしてそこにいる。

それこそが、パメラがバステートと言っていた世界を喰らう者だった。

それに対して、銃弾や砲弾を浴びせかけているのが、対バステート組織、スプテラ・オーガニーゾ。

だがしかし、その甲殻はかなり頑強なようで、傷一つついていない。

「ちくしょう、これでもダメなのか……」

その中の一人がぼやく。

「足止めすらも困難ってのはな……」

「こいつをここから出すわけにはいかないからな」

「世界をこれ以上喰われるわけにはいかんしな」

「そのために私たちがいるんでしょ」

あちこちで、それぞれが口々に言葉を交わす。

「だが、我々のような末端じゃこれが限度だろうな」

「マスターはどうなってしまったんだ」

中には不安そうな声もあがる。

「さあな。マスターもセイバーも行方知れずらしいからな」

諦めきっているのか、達観してしまったのか、投げ遣りな言葉も飛び交う。

「さっさと誰か連れて戻ってこいってんだ！」

そう言いながら、銃弾を撃つ事は止めない。

「無茶を言うな。マスターやセイバーがどんな姿なのか、誰も知らないんだぞ」

「そうだ。おれたち末端はこうしてこいつの足を止めていればいいんだよ」

「わーってるよ！ それでもなんとかしたいって思うだろうが」

そのもどかしさを払拭するかのようには撃ち続ける。

「人のような考え方だな」

「しゃーねーだろ、そうプログラミングされてるんだからよ」

「言われなくてもわかってるさ。我々は同じなのだからな」

そんな会話をしながらも、そこにいる数十人の男女は攻撃の手を休めない。ただひたすら、バステートへの攻撃を続ける。

「でもよ、このままマスターもセイバーもいなくなったままだったら……」

「言わなくてもわかっているだろう」

「そうそう。全ての世界が消える」

「……だよな」

バステートが壁を蹴り、大きく跳躍する。

「くそっ、逃がすな！」

その言葉と同時に、全員がバステートを追う。

「ちっ、逃げられたのか……」

舜平を気絶させた男はその時そこに到着し、すぐに状況を把握した。そしてそのまま流れに従うように走っていった。

放心状態だった亜依は、やっとの事で我を取り戻した。

そのすぐ後に舜平も目を覚ました。

「どうなってるの？」

亜依は状況がわからず混乱していた。が、綾乃たちも今の状況がよくわからない。

「亜依……大丈夫なの？」

そう訊くしかできなかった。

「……うん、あたしは大丈夫。あの人が助けてくれた……から」

「助けてくれた？ あの人の？ ……………って、あの男？」

亜依は無言で頷いた。

「……あれって、助けられてたわけ？」

コクリ。

「……オレ、襲いかかちまったんだけど……」

「返り討ちにあっただけね」

痛いところを突っ込まれる。

「……ありがとう」

そう言われて舜平は照れる。

「助けるつもりが、こんな事になって……」

「確かに格好悪いわよね。亜依を助けた人に襲いかかったわけだし」

「それは……………」

「まあ、アタシも同じだからなにも言えないけどね」

「その割には言ってるよな」

「そう？」

そんな二人のやり取りに亜依は口を押さえて笑う。

「おっ、笑えるなら大丈夫だろう」

「そうそう」

確かに落ち着いている。今までの緊張が嘘のようだ。

「そうだ、急がないと」

亜依は立ち上がる。

「やっぱりあの声って……」

綾乃が確認するように訊く。

「きっとそうだよ。だから、急がないと」

亜依は頷いて答える。

「ちょっと待てよ。急ぐたって、どこに行けばいいんだよ」

すぐにでも走りだそうとしている亜依を舜平が止める。

「わからない。でも、とにかく行かなきゃ」

「ようやく来れましたわ」

突然、目の前に見覚えのある小人が現れた。

それは白雪姫のお話に出てくるような、まさに小人といった風貌をしていた。

「……………あ」

亜依は突然の事に言葉が出ない。加え、心臓が止まるかと思った。

「な、なんだよお前は！」

「お？ あんさんは……会った事あらへんかったかいな。どうでもええけど」

舜平を無視して亜依の前に移動する。

「やあ、お嬢ちゃん。久しぶりやな」

と、嬉しそうに笑いながら小さな右手を挙げる。

「……グ、グビディ……さん？」

「そうや。他になにがあるねん」

「で、でも……どうして……………？」

亜依はなにがなんだかわからない。

ここは……どこなんだろう？

「いやぁ……エラーのせいで、今まで来られへんかったんやけど、なんとか来れるようになりましたんや」

「来れるようになった……？」

完全に放置されている綾乃と舜平は淋しげにそれを見ている。どうにも入っていきそうにない。

「という事はここは……」

「それはちょっと違うで。ここはRenkonto-Mondoやない。Mondo Lignigno Centraloや」

「モンド・リグシグノ・セントラーロ？」

綾乃はそれを聞いて首を傾げる。

「世界中央施設？ どういう事なんですか？」

亜依はグビディに訊く。

「そうや。ここはMondo-Centralo。全ての世界の情報を統括する世界や。……って、説明してる余裕もなかったりするさかい、急ぎながら話すわ」

そう言うと、どこかに向かって進み始める。

「ちょっと待って下さい」

亜依は慌ててグビディを追いかける。

「どうなってんだ？」

「さあ？」

舜平と綾乃は状況が飲み込めず首を傾げる。が、ふと気付いたように慌てて亜依を追いかける。

「ちくしょう、何処行った！」

「わかるかよ。当たり散らすな！」

「ちょっと、仲間割れをしている場合じゃないでしょ！」

様々な声が飛び交う。

「もう期待なんてするな。マスターもセイバーもないんだよ」

「そうだよな。あんな役立たずのプログラムなんて必要ねえよな」

「そんな事より、今はベステートを追わないといけねえだろ」

「そうね」

「見つけたぞ」

と、遠くから声が届く。

「よし、行くぞ」

と、一人の声をきっかけに組織の全員がそこに向かう。

——バババッ！　ババババッ！

銃声が轟く中心にそいつはいる。

四方八方から浴びせられる銃弾を受けながらも、そいつは傷一つ負っていない。

「待たせたな」

「本当だ。……だが、こっちも相変わらずだ」

「ウエポンはどうしたの？」

「ダメだ。起動しない」

「どういう事だ？」

「わからんが、やはりマスターが不在の状態では難しいようだ」

「ったく……」

その間も銃弾の雨は止まない。

「とにかく、今はこうしてここに留めておくだけで精一杯だな」

「ちくしょう……。無力なのかね、おれたちは」

「無力でもするしかないだろ！」

遠くから男が叫ぶ。

「とにかく撃ちまくれ！」

——バババッ！　ババババババババッ！

放たれた弾丸がビル壁を砕いていく。

だが、目的であるベステートには被害はない。

「撃ちまくれ！」

——バババッ！　ババババッ！　バババババッ！

「ったくよ。マスターとセイバーさえいりゃあな」

彼らは好転しない状況にあってもお諦める事だけはしない。

例えそれがプログラムのせいだとしても……。

「何処に行くんですか？」

亜依は先を飛んでいるグビディに向かって言う。

「この先のコントロールタワーや。そこに行けば全部わかるさかい」

そう言うだけで止まろうともしない。

「ちょっと待てよ！」

追いかけている舜平が抗議する。

「時間ないねん！」

が、その抗議はその一言で一蹴された。

「わかりやすい理由ね」

「ホントだな」

綾乃と舜平は愚痴りながらもついていく。

「ねえ、そこには誠司さんもいるの？」

「残念やけど、ここにはおらんねん。でもや、ちゃんとお嬢ちゃんのために頑張ってるさかい、お嬢ちゃんも頑張りや」

それを聞いて少しだけ安心した。

会えないのは残念だけど、自分のために行動してくれている。

それだけで充分嬉しかった。

——バババッ！ バババババババッ！

グビディが向かっている方からは銃声らしきものが聞こえる。それが大きくなっているという事は近付いているという事に他ならない。

「なあ、危なくないのか？」

「アタシに訊かないでよ」

「そうだけどさ……」

綾乃と舜平は不安そうに走っているのだが、亜依はそんな事を気にする事なく一心不乱に走り続けている。

「そういえばさ、さっきからずっと走ってないか？」

「そういえばそうね」

二人の言うとおりに、この街へ来てからというもの——いや、あの声を聞いてからずっと走っている。

近代的な街並みにもかかわらず、交通機関が全く機能していないここは、見かけ倒しにしか思えない。

明らかに動く歩道である道も動いていなければ存在価値などない。

これだけでも機能していればどれだけ楽か……と思いつつも、最も確実な方法である自分の足で走り続けている。

「もうちょっとやで」

と、急に視界が開けた。

そこには大きな建物が建っている。

周囲には広い空間がとられており、ひしめきあった街中に比べると開放感がある。

周囲には木々が植えられ、噴水もある。

休日には憩いの場となっているのだろう。

それだけに、ここが特別なのだと思わせる。

だが、今はそれも全て瓦礫のせいで壊れてしまっている。

木々はなぎ倒され、噴水は涸れ、建物の壁も崩れている。

そして、その壁には揚羽蝶の蛹に六本の脚が生えた生物が張り付いている。

その周りには数十人の男女が一様に銃を構えて、それ目掛けて引き金を引いている。

「コントロール・センターはすぐそこやっていうのに……」

グビディは茫然とそれを見ている。

「どういう事なんですか？」

「あの建物がコントロール・センターなんや。あそこに行かなあかんねん」

「あそこに……」

亜依はビルを見上げる。

「……………！」

ベステートを見て身をすくめる。

背筋を恐怖が走る。

「あれがベステート……なんですか？」

「そうや。あれこそが世界崩壊の根元のベステートや。せやけど……あれの原因になったんは神様なんや」

「えっ？」

亜依はグビディの口から出たその言葉に耳を疑った。

「神様が原因って……璃織魚さんが……？」

「そうや」

聞きたくない返事だった。

否定して欲しかった。

だが、グビディはそれを肯定した。

「せやけど、だからこそなんとかしよう頑張ってはる。せやから、わいらも頑張らなあかんのや」

「ちょっと待ってよ！ あそこに行かなきゃいけないって、どうやって行くのよ！」

追いついた綾乃が言う。

「お前たち、そこでなにをしているんだ！」

銃を構えた男が近付いてくる。

「アタシたちは……………」

「お前たち、プログラムじゃないのか！」

綾乃が言い終わる前に男は目を丸くした。

「プログラム……？」

綾乃はキョトンとする。

「わいはR-Mの案内人や。あんさんは……？」

「俺はMLCの末端プログラムだ。マスター不在のせいでウエポンが起動できない。なんとかならないのか？」

「なんとかしようとは思ってるんやけどな……。あそこに行かれへん事にはどうする事もでけへんねん」

「なるほど。つまりはお前たちを管理塔に連れていけばいいわけか」

「頼めるんか？」

「俺たちもマスターをなんとか探してもらわないといけないんでな」

「助かるわ」

グビディと男の間の会話は、三人にはなんの事やらサッパリ理解できない。

が、どうやらこの男がコントロール・センターに連れていってくれるらしい……という事は理解できた。

「おい、聞こえていたな。なんとか突破口を開け！ ベステートの気を我々に向けておくんだ」

男は何処ともなしに言った。

「了解！」

「受諾した」

「わかったよ」

様々な場所から声が返ってくる。

「我々の力を見せつけてやるんだ」

その声を合図とするかのように銃撃が一点に集中する。

「頼んだぞ。案内人」

「任せておきなはれ」

と、グビディは振り返り、

「とりあえず、プログラムのみなはんがなんとかしてくれるさかい、わいらはコントロール・センターに行くで」

「我々が援護する。頼むぞ」

男は銃を構えなおす。

「どうなってるんだ？」

舜平が小声で綾乃に訊く。

「アタシにもわかんないわよ」

「だよな……………」

「おい、R-Mの案内人が来たらしいじゃねえか」

「ああ、なんとかなるかもしれないぜ」

「そうとも限らないわよ。マスターが戻ったわけじゃない」

「そうけどさ……」

「そうだ。マスターが戻らない限り、ぼくらは負けてしまう」

「それだけじゃ済まないんだよな」

「そうでした」

「俺たちは世界崩壊の最後の要だからな」

「負けられない」

離れた場所にいる彼らだが、思考は伝播できるので会話は成立する。

「さて、囿といきましょうか」

そう言うと、一人がベステートに向かって走り出す。

「おい、待て！」

しかし、その制止を聞く事なくそいつは走っていく。

その様子を見ていた男は、タイミングを計っていた。

「俺の合図で一斉に走るんだ。あんたたちはなにも気にせず走れ。ベステートは俺たちに任せて、あんたたちは管理塔に行く事だけを考えるんだ」

真っ直ぐな目で亜依たちを見る。

「わかりました」

亜依は頷く。

ベステートに向かって走っていった男は銃を乱射し続ける。

ベステートはその男に向かって移動し始める。

「うおおおおおっ！」

叫びながら銃を撃ちまくる。

撃って撃って撃って撃って撃って撃って撃って撃ちまくる！

———！

ベステートの脚が目前に迫る。

「サヨナラだ」

男はニヤリと笑う。

恐怖という感情はない。

冷静な思考の元、男は自己崩壊プログラムを起動させた。

「絶対なんとかしろよ」

プログラムの起動と、ベステートが男を踏みつぶすのは同時だった。

——ボワァンッ！

大きな爆音と共にベステートは煙に包まれた。

「今だ！」

男は亜依たちを促す。

しかし、亜依たちはその光景を見ていたために足がんで動けない。

「行け！ お前たちに全てを賭けたんだ！ しっかりしろ！」

「早う行くで。わいらが行かへんと、世界は終わってしまうんや」

男とグビディの声に背中を押されるように三人はゆっくりとながらも歩き始める。

「モタモタするな！ 走れ！」

男の恫喝で三人は考える暇もなく、走らなければならないという衝動で走り始める。

「もっと速く走るんだ！」

男は煙の方を注意しながら亜依たちを急かす。

亜依たちもそれに応えるように走り続ける。

(怖いなんて思っちゃいけないんだ。でないと、あの人は……)

彼らがデータのみプログラムだという事を知らないので、死というものに直結してしまう。もっとも、それはプログラムだから死なないというわけでもない。彼らにもそういう概念は存在する。消滅という名の死が。

(それに、誠司さんの努力も……)

そう。今こうしている間にも誠司はどうにかしようと頑張っている。そうグビディは言っていた。だから、自分がここで止まってしまっはそれを無駄にしてしまう事になる。

一人で出来る事は少ないかもしれない。でも、今走る事は一人でも出来る。それに、今は一人じゃない。綾乃も舜平もいる。そして、自分たちを護ってくれているプログラムもいる。

こんなに恵まれた状況にいるのに負けるわけにはいかない。

そんな思いを胸に亜依は走り続ける。

「よっしゃ、もうすぐやで」

グビディが言うように、コントロール・センターの入口は目の前。

そこに行けば誠司に会えるかもしれない。

そんな期待が亜依を支配する。

「危ない！」

男のその声に振り向く。

「「「……………」」」

三人は息を呑んだ。

そこにはバステートの姿があった。

あの爆発にも耐えたのだ。

そして今、バステートは確実に三人を狙っていた。

ベステートの脚が三人に振り下ろされる。

しかし、三人は恐怖の余り動けないでいた。

それはまるでスローモーションのように感じる。

ほんの数秒のはずなのに、何時間も経ったかのように感じる。

そんな時間を破ったのは亜依たちの側にいた男だった。

「任せたぞ」

亜依たちに言ったのだろうか、それとも他の仲間にしたのだろうか、その言葉を遺し、彼は自己破壊プログラムを起動させた

。

——ボワァンッ！

と、ベステートを巻き込んで爆発する。それと同時に、近くにいた組織の者たちが亜依たちを抱えて建物の中に入る。

入口での爆発のせいで、建物の中に入っても煙が向かってくる。

しかし、それに咳き込む暇もなく、組織の者たちは亜依たちを抱えて中を進んでいく。

後ろの方でなにかが崩れる音がする。おそらくは爆発の影響で入口が崩れたのだろう。だが、これでベステートが背後から襲ってくる事はなくなった。もっとも、壁を壊すなりする事は出来るのだが。

抱えられた亜依たちは、まさに荷物と化している。

組織の者たちも軽々と亜依たちを抱えて走っている。

重くないのかな……と、亜依はふと思った。

でも、自分だけでなく舜平も軽々と抱えている。

この人たち力持ちだな……。と、舜平はどこか呑気にそんな事を考えていた。

そうして抱えられたまま、三人は上の階へと上っていく。三人は抱えられているだけなので楽なものだ。抱えている組織の者たちも、全く疲れを感じている様子はない。余裕綽々といったところか。

話し掛けようと思い亜依は自分を抱えている男の顔を見たが、その無表情さに声を掛ける事ができなかった。そこに見たのは、まるで機械のような表情だった。

無言の時間が続く。

建物の外からは時折爆音がするが、それ以外に音はない。

どのくらい上っただろうか。抱えられているだけなのでよくわからない。

もしここが最上階だとするならば、外から見る限り二十階くらいあったように思うので、おそらくそのくらいなのだろう。

それだけの階数を亜依たちを軽々と抱えて駆け上ってきたこの三人は人間離れしている。

もっとも、人ではないのだけれど。

「到着や」

先頭にいたグビディはそう言うと、扉の前で止まった。

一行はそこでいったん立ち止まり、一呼吸してから扉をぶち破った。

中はたくさんの機械がひしめき合うようにしてあった。

たくさんのモニターがあるかと思えばそうでもない。もっとも、メインの巨大モニターが複数の画面を表示しているのでたくさんあるようなものだが。

その部屋の真ん中に円柱形の機械があった。

その円柱の上には透明の球体が浮かんでいる。

「これがコントローラーか……」

グビディはそう言うと、それに近付いていく。

「さて、そういうわけやから……」

と、その球体に自分の右腕を差し込んだ。

すると、球体の色が赤や青や緑に変わったかと思うと、またすぐに透明に戻る。

『……………』

わずかなノイズ音がした。

まるでラジオの周波数が微妙にずれている時のようなノイズだった。

『……………に……か』

三人は背筋に電気が走るような感覚に襲われた。

人の声だ。

ほんの一瞬だったが人の声でした。

「今……」

舜平が綾乃を見る。

綾乃はコクンと頷く。

「もうちょっとやな……。うんしよ」

と、グビディは腕を突っ込んだままにかをしている。

「……………えっと……………こんなもんかな」

と、右腕を再度微調整する。

『……………そこにいるのか？』

今度はハッキリと聞こえた。

『……おい！ グビディ！ 亜依はそこにいるのか？』

「……え？ 誠司……さん……………」

その声に亜依は涙が出そうになった。

声の主は間違いなく椎崎誠司のものだ。

「誠司さん……なの？」

『ん？ その声は……亜依か？ やっと繋がった……………』

ホッとした安堵の声が聞こえる。

「おい、どうなってるんだよ！」

『その声は……確か……………』

「椎崎誠司……どうして……？」

『その声は綾乃だな。って事は、二人も一緒なんだな。なら好都合だ。グビディ、とっとと始めようぜ』

「了解や」

と、なんの説明もなく話は進んでいく。

「ちょっと待てよ。ちゃんと説明しろよ」

『悪いな。グビディから説明されてないのか？』

と、どこかぶっきらぼうな口調で言う。愛情の差というヤツだ。

「知らんっ！」

『舜平……だったよな。年上にはきちんとした言葉遣いで……って、そんなのはどうでもいい』

「いいなら言うな！」

舜平はどうにも誠司に突っかかってしまう。特に恨みもなにもないはずなのに……とは本人も思っているのだが、どうしようもない。

『グビディ。どこまで説明したんだ？』

「特にしてませんな。ここがMLCやっつう事くらいですわ」

『……マジか』

「マジです」

『仕方ないわね……』

と、誠司とは違う、女性の声が聞こえた。

『初めまして、木元綾乃さん、竹内舜平くん。そして、お久しぶり、富所亜依さん。宍神梢です』

と、声の主は名乗った。

が、もちろん誰なのか綾乃と舜平にはわからない。彼女と会う前に事件から退場していたのだから無理もない。

「宍神……さん？ え？ 宍神さんがどうして……」

亜依が問う。

『久しぶりね。グビディは言ってないのかしら？ 今回の事は璃織魚様のせいだっけ』

梢は淡々と述べる。

「そういえばそんな事を……」

『だから、あたしが今回の事件を解決しようとしても不思議はないでしょ？』

「……そう、ですね」

『で、あなたたちがいる場所はMLCだっけというのは聞いたわね』

「はい」

『MLC……M-Cっていう人もいるけど、まあMLCにしておくわね。MLCはその名の通り世界の中心施設なの。Renkonto-Mondo通称R-Mを表とするならMLCは裏になるのかな。まあ、正確にはちょっと違うんだけど。R-Mは実体が行き来する世界で、MLCは情報が行き来する世界、という事になるの。つまり、MLCは全ての世界を情報……データとして整理統括している世界なの。今そこにいるのかはわからないけど、その世界にいる人型のものはほとんど全部プログラムなの。普段はMLCの運営を行っているんだけど、バグが発生した時にはその排除を行うの。ちょっと違うんだけど、人体でいえば白血球みたいなものかな。まあ、白血球は排除専門だけだ——』

梢は説明を続けるが、三人はほとんど理解できていない。というよりも、理解しろという方が無理だ。

『——普段は当然、正常に作動しているわけなんだけど、今回は璃織魚様の影響でバグが発生してしまったみたいなの』

「バグ？」

亜依が呟く。

『そう。その世界を崩壊させている存在があるはずよ。それがバグ——』

そう言われて思い出すのはバステートだ。なるほど……と、亜依は頷いた。虫。まさにバグだったのか。

『——とにかく、これから修復プログラムを起動させるわね。これさえ起動させれば、MLCの管理プログラムも正常に戻るはずだから。各所にもアンカープログラムを打ち込んだんだけど、どうやらここじゃないと本来の力が発揮されないみたいだから。じゃあグビディ、よろしくね』

「了解や」

そう言うと、グビディはみ始めた。

「う～ん……う……～ん」

「なあ、なにしてるんだ？」

「黙っとれ」

舜平の疑問は一蹴された。

「今、修復プログラムをメインコントロールに入れとんねん」

が、一応は答えてくれた。

その間も外からは銃声が聞こえ続けている。

「ねえ、さっき女の人がプログラムだって言ってたけど……じゃあ、この人たちも……？」

綾乃はここまで自分たちを抱えてきてくれた三人を見る。

「……………そうだ。我々はプログラムにすぎない。外で闘っている者たちも同様だ」

と、その中の一人が答える。

「プログラム……？ ホント、人にしか見えない」

「そのように設計されているからな」

プログラムは淡々と答える。

「そうですか」

と、綾乃が話している間にグビディの作業は終わった。

「終わったで。ほな、あとはパスワードを入力してや」

と、円柱形の機械からキーボードが出ている。

「パスワードって……？ そんなの知らないんですけど……」

亜依は救いの目をグビディに向ける。

その時、誠司が……、

『そうそう、忘れてた。パスワードは村の……』

——ドガッ！

と、壁が破壊された。

そこには当然のようにベステートがいる。

その影響で通信が途絶えた。

「ここは我々が」

と、三人を庇うようにプログラムたちが前に出る。

——ババババッ！ ババババッ！ ババババババッ！

「早くパスワードを……」

そう言いながらも、銃を撃ち始める。

「おい、どうするんだよ」

「そうよ。パスワード……」

と、舜平と綾乃はグビディを睨め付ける。

「わいは知らんって」

グビディは蒼白に……なっていると思われる。

「おい、パスワードはなんだよ！」

舜平が透明な球体に向かって叫ぶが、返答はない。

「あかんねん。さっきの衝撃でチャンネルが閉じてしもうて……」

「じゃあ、どうするんだよ！ パスワードなしで起動させろよ！」

「無理言わんといてや」

「ったく……どうしてパスワードなんて必要なもんにするんだよ。なしで起動できるようにしとくのが親切ってもんだろ」

「早く起動させてくれ」

プログラムたち三人では到底ベステートを押さえきる事はできない。徐々に亜依たちに近付いてきている。

「えっと……」

亜依はキーボードとにらめっこをする。

「パスワード……」

亜依は口許に手を当てたまま目を閉じる。

(誠司さんは村の……って言ってた。村なんてあそこ以外は……。——という事は……)

亜依は大きく深呼吸をするとキーボードを睨んだ。

そして、ゆっくりと指を移動させていく。

「亜依、パスワードわかったの？」

綾乃が訊く。

「多分……」

確信はないが自信はある。

亜依は自分が思ったキーを押していく。

ゞS、

ゞH、

≈ I、

≈ K、

≈ I、

の、五つのキーを押した。

「パスワード入力確認。接続確認」

誠司がモニターの前で、隣に座っている梢に報告する。

「了解。じゃあ、起動させるわね」

そう言うと、梢はEnterキーを押した。

「亜依……目を覚ましてくれよ」

誠司はモニターの前で手を組み祈った。

約三ヶ月の間、この時のために奮闘したのだ。

ただ、大切な人が目覚めてくれる事だけを祈って。

そして、ようやく最終段階である修復プログラムの起動まできた。

あとは正常に作動してくれる事を願うばかりだ。

これでダメなら……いや、そんな事はない。

そんな考え方はしない。

絶対に成功する。

絶対に目覚める。

「マスタープログラム……ちゃんと起動してよね……」

梢も自分が作成した修復プログラムがきちんと作動する事を祈るしかなかった。

「ねえ……本当に間違っていないよね……」

なにも起こらないので心配になって綾乃が訊く。

通信が途中で切れてしまったという事もあるが、それよりなによりベステートが目の前に迫ってきている。

他のプログラムたちも応戦するために向かってきているようだが、まだ到着していない。なので、最初の三人だけでベステートをどうにかしようとしている。

「わからない。でも、間違っていないと思う。だって、これしか思いつかないから……」

そうは言ってみるものの、なにも変化がないと不安になってくる。

「安心しいや。お嬢ちゃんのパスワードはあつとと思うさかい」

と、グビディが言った瞬間――透明の球体が光り始めた。

「ほれ、あつとったやろ？」

と、グビディは自慢そうに言う。

しかし、三人にはそんな言葉は届いていなかった。

ただ、目の前の光景に心を奪われていた。

どうなるのかわからない不安と、目の前の幻想的ともいえる光景から目を逸らす事ができない。

そんな三人の前に、二つの光が降り立った。

その光は次第に人の形を形成していく。

「「……………」」

その姿には見覚えがあった。三人は言葉を失う。

この街で別れたマスターの直哉とパメラだった。

「マスター！ パメラ！」

亜依は二人に駆け寄る。綾乃と舜平もそれに続く。

「マスター、大丈夫ですか？」

「パメラ、大丈夫？」

舜平と綾乃が直哉とパメラを抱き起こす。

そこにグビディがふよふよと近付いていく。

「なるほど……あんさんらが……………」

グビディは二人を覗き込む。

それに気付いたのか、二人はゆっくりと目を開ける。

「……………ここは？」

直哉が口を開く。

「……………」

パメラはなにも言わないが、辺りをキョロキョロ見ている。

グビディが二人の前に行き、じっと見る。

「早速で悪いんやけどな、時間がないさかいに」

と、グビディは自分の手を二人に突き刺す。

その手は二人の身体にズブズブと入っていく。

とても非常識なその光景に亜依たちは言葉が出なかった。それどころか、綾乃は嘔吐感を堪えるのに必死だった。

「……………プログラム接触完了。……………ワクチン注入開始」

二人の身体がガクガクと揺れる。

――バババババッ！ ババババババババババババババッ！

その時、他のプログラムたちが応戦に駆けつけた。

その攻撃のお蔭でベステートの侵攻がわずかに止まる。

「……………もうちょっとや……………」

その間もグビディはそれを続ける。それからすぐ、

「……………ワクチン注入完了」

と、グビディは手を引き抜いた。

しかし、当然ながら二人の身体に穴は空いていない。

と、その二人の身体が輝き始めた。

「……………ワクチン起動確認」

一度、大きくビクンと痙攣したかと思うと、二人はグツタリとその場に倒れた。

「マスター！ パメラ！」

亜依が駆け寄ろうとするが、

「あかん！ 大丈夫やさかい、その場におり！」

と、グビディの恫喝に足が止まる。

「でも……………」

亜依は訴えかけるようにグビディを見るが、グビディはそれに動じる事なくそのまま動こうとはしない。

その時、倒れていた二人が急に起き上がった。

「状況確認……………。現状照会……………」

起き上がったパメラが無感情に呟く。

「現状認識完了。再起動……………」

と、目を閉じるがすぐに開ける。

「セイバー再起動要請」

パメラが直哉を見て言う。

「要請認識。再起動開始」

無感情に直哉が呟く。

「……………再起動完了」

二人はスッと立ち上がる。

「今まですみませんでした」

パメラが頭を下げる。

「あんたがマスタープログラムか？」

プログラムの一人が訊く。

「はい」

パメラは即答する。

「じゃあ…………」

「わかっています。ウエボン起動承認」

「……………承認確認完了」

途端にプログラムたちの表情が明るくなった。

「よっしゃ！ これで思う存分できるな」

「ああ。思い切り今までの鬱憤を晴らすぞ！」

「まあ、世界を壊さない程度に、ね」

「タワーウエボンに向かう」

「わたしもっ！」

と、それに続くように六人のプログラムがその場を離れ、どこかに走っていった。

突然の展開に、亜依たちは茫然とその場に立ち尽くしていた。

「みんなは危険だから隅の方にいてくれ」

と、直哉が三人を誘導する。

三人は思考が停止してしまったかのようで、ただそれに従う。

「よし、やってやる」

ベステートと対峙していたプログラムの一人が二〇センチほどの金属棒を手にした。

「ウエボン起動認証コード要請」

そのプログラムの声に応えるようにパメラが言う。

「要請承認。認証コード発行」

「認証コード受信完了。ウエボン起動！」

プログラムがそう言うやいなや、その金属棒から光が伸びた。それはまさにビームサーベルのようだった。

「これでお前に負けはしない」

ベステートはそんなプログラムに襲いかかろうと脚を振り下ろす。

が、プログラムは鼻で嗤うほどの余裕をみせる。

と、そのビームサーベルで軽々と受け止める。

「待たせたな」

「遅れた」

と、そこに同じように金属棒を手にしたプログラムが二人現れた。

「「ウエボン起動認証コード要請」」

二人の声が重なる。

「要請承認。認証コード発行」

パメラが二人に応える。

「「認証コード受信完了。ウエボン起動！」」

同時に二人の金属棒から光が発せられる。

そして、そのままベステートに向かって駆けていく。

「うおおおおっ！」

「とりやあああっ！」

——ドガッ！

——ガシャンッ！

——ドザッ！

大きな衝撃を受け、さすがのベステートも吹き飛ばされ、建物の外に落ちていく。

「追うぞ」

「おうよ」

「当然」

互いに合図を送り、三人はそのまま下に飛び降りる。

人であれば、この高さからの落下は即、死だ。しかし、プログラムたちはなんの衝撃もなく地面に降り立つ。マスタープログラム不在時は不可能だった事も、マスタープログラムが起動した事によって再び可能となったのだ。

降り立った彼らは、その手にしたウエボンでベステートを足止めする。

そう、確実に仕留めるウエボン起動までの時間稼ぎだ。

その頃、六人のプログラムたちは、三方向に分かれて目的の場所を目指していた。

この街の境界線上に三本の大きな四角錐の建物がある。それこそが最大のウエポンなのだ。

「我々も数が減ってしまったものだな」

「そうだな。だが、マスタープログラムが起動した今、どうとでもなるさ」

「そっちはどうだ、」

別の箇所に向かったプログラムが話し掛ける。

「もうすぐ着く」

『こっちもだ』

「あいつらが足止めしてくれているようだけだよ、」

『こっちも見せ場が欲しいとこね』

「当然だ」

『急ごう』

「言われるまでもない」

そんな会話をしているうちに、目的の場所に到着した。

「到着した」

「こっちもだ、」

『こちらも到着した』

それを確認すると、三組はそれぞれ中に入っていく。

その中は最上階への昇降機しかない。大きいだけでてっぺんにあるコントロールルーム以外はなににもないに等しい。

もともと、なにかある必要はないのだ。

きちんと機能さえすればそれでいい。

「どうだ？」

最上階に着いたプログラムたちは、二人でそれぞれの操作をしながら、他の場所にいるプログラムに話し掛ける。

『こちらは順調だ』

「こっちもだ」

と、返事がくる。

『いいわよ』

「OKだ、」

「こっちもだ」

「『ウエポン起動認証コード要請、』」

それぞれの場所からマスタープログラムに発信される。

「来た」

パメラ——マスタープログラムが呟く。

「要請承認。認証コード発行」

パメラはそれぞれの場所に伝える。

「『認証コード受信完了。ウエポン起動！、』」

三つのウエポンが起動する。

その四角錐の頂点からアンテナが伸ばされる。そのアンテナの先には大きなパラボラアンテナがある。

「『照準。ベストート、』」

三つのパラボラアンテナがベストートに向けられる。

「『照準固定。照射準備完了、』」

「どうやら、ウエボンが起動したようだな」

「ああ。我々はどうするかな……」

「こいつと心中は勘弁だな」

ベステートを足止めしていた三人の意見は一致した。

「ちょっと、ここで止まっておけや！」

と、その声を合図に出来る限り高く跳躍する。そして、それぞれが持っていたウエボンを出力を最大にし、下にいるベステートに向かって投げつける。

まるで如意棒のように伸びたそれがベステートに突き刺さる。

ベステートは悶えるが、突き刺さったウエボンは抜けない。

ドサッと地面に降り立った三人は、急いでその場を離れた。

「ウエポンを起動させます。衝撃にそなえて下さい」

パメラが亜依たちに言う。

「セイバー、頼みます」

「了解」

と、直哉が答える。

パメラはそれを確認すると、

「ウエポン発射！」

そう言った瞬間、辺りが光に包まれた。

それぞれのウエポンから同時に照射されたのだ。

ウエポンの引き金は、マスタープログラムしか起動させる事ができない。つまり、マスタープログラム自身が引き金なのだ。

それは、それだけの威力があるという証拠でもある。

そして、この世界において、マスタープログラムは絶対的な存在でもあるという事だ。

光に包まれたバステートはその光に同化するように姿が薄らいでいく。

しばらくその状態が続いた。

それはある種幻想的な光景でもあった。

淡い光に包まれて消えていくバステート。

それはまるで天に迎えられているかのようなようだった。

だが、その時間も永遠に続くわけではない。やがて光が薄らいでいく。

そして……………。

光が消えた。

バステートは消滅した。

光が消えた場所にはなにも残っていなかった。

ただ、周辺に瓦礫が散乱しているだけだ。

その側には三人のプログラムが立っている。

その視覚を通じてパメラはその様子を見ていた。いや、パメラだけでなく全てのプログラムがその様子を見ていた。

「終わったみたいね」

「そのようですね」

パメラと直哉が頷く。

それは全てのプログラムに共通した思いだった。

亜依たち三人は完全に取り残された状態になってしまった。

こうして、事件は一つの幕を下ろした。

「えっと……つまりどういう事？」

綾乃が誠司に訊く。

通信が復活し、大まかな説明を受けたが理解できない。

『つまりは、璃織魚さんの能力の覚醒でMLCのバランスが崩れて、マスタープログラムとセイバープログラムがダウンして、それと同時にベストートが誕生した。で、データ世界が狂った事で、世界中で謎の昏睡事件が起こった。それに巻き込まれた亜依と綾乃と舜平の三人がMLCに紛れ込んでしまったというわけだ』

当然、これによって昏睡していた他の人たちも目覚め始めている。

「で？ オレたちは実際はどうなってるんだ？」

眠ってしまった状態のため、もちろんその瞬間の記憶はない。綾乃と舜平の最後の記憶は昼食を食べていたものだ。

その時に眠ってしまったのだとすれば、二人はずっとダイニングで眠っているという事になる。

ただ、眠っているとはいえ、かなりの時間が経っている。ただでさえ幽霊屋敷のような館だ、身体が無事なのか気になっても仕方のない事だろう。

『病院で眠ってるよ。まあ、綾乃と舜平に関しては家で倒れていたからな……。俺と宍神さんが発見した時は驚いたよ。それでまあ、亜依と一緒に病院に搬送したわけだけだ』

「つまり、アタシと舜平は病院のベッドってわけ？」

それを確認してホッとす。目覚めようにも身体がなくなっていました……なんて、冗談じゃない。笑えない。

『そういう事。あ、そうそう、亜依の両親には連絡しておいたから、今頃、病院の亜依のベッドにいると思うよ。俺もすぐそっちに行く。というわけで急ぐな。現実世界で会おう』

そう言うと、誠司は通信を切った。

「さてと、そろそろ戻りましょか」

グビディが三人に言う。

「マスターたちはどうなるんですか？」

亜依がセイバープログラムに訊く。

「俺はもうマスターじゃないよ。セイバープログラムだ」

セイバープログラムは優しい笑みを向ける。

「でも、アタシたちにすればマスターはマスターよね」

綾乃もしっくりとこないようだ。

「でもよ、どうしてマスターがオレたちを……」

「椎崎誠司が説明した通りだろうな。俺とマスタープログラムはダウンしてデータを失った。が、俺は本来の機能がわずかに働いていたんだだろうな。データの整理通行管理として、あの喫茶店を運営していたんだと思う。推測にすぎないけどね。その一環として、君たちを保護するという機能でバイトとして雇って、側にいさせたんだろね」

「そうだとすると、あたしはそう思いたくないです。そんなのって淋しいじゃないですか」

亜依が叫ぶように言う。

「でも、それが真実だ。どんなに夢だと思いたくても、真実は変わらない」

セイバープログラムがゆっくりと首を振りながら言った。

「現実世界の人がうちらを巡り合わせてくれたんでしょうね。一刻も早く解決するために。……その為に打ち込まれたアンカープログラムが、あなたたちの店——情報世界をあつ場所に移動させた。そして、うちをそこに招いた」

マスタープログラムが呟く。

「だけども、やっぱりそれって淋しいじゃん。現実なのはわかるんだけどさ、やっぱり運命だって思いたいよ」

「あら、舜平にしてはロマンティックなのね」

と、久しぶりにキメた舜平を綾乃が茶化する。

それが笑みを生み、わずかに空気が明るくなる。

「ほな、そろそろ帰ろっか」

グビディが三人に告げる。それは気楽で、今までの重い空気などなかったように思える。

「お別れだな」

「サヨウナラね」

セイバープログラムとマスタープログラムもどこか淋しそうな顔になる。

「さようなら……」

亜依はぼろぼろと涙をこぼす。

「亜依……しんみりしちゃうじゃない。ほら、笑おうよ」

綾乃が亜依の肩を抱いて言う。そう言う綾乃の目にも涙が溢れている。感情を抑えようと思っても抑えきれない。

亜依は、うんうん、と頷くが涙は止まらない。それでも、できるだけ笑顔に向ける。

涙でぐしゃぐしゃになっているものの、亜依の精一杯の笑顔だった。

亜依と綾乃と舜平はマスタープログラムとセイバープログラムに手を振る。マスタープログラムとセイバープログラムも振り返す。

「じゃあ、あとの事は頼むで」

グビディはそう言うと周囲に球体を展開させ、三人を取り込んだ。

三人を取り込んだ球体は宙に浮き、そのまま昇り続ける。

「さようなら……」

小さくなっていく世界を見下ろしながら、亜依は涙を流し続けていた。

無事に退院した亜依は、誠司と一緒に神崎グループ総本社ビルを訪れた。
相変わらずここは緊張する。
自分が場違いだと思わざるを得ない。
誠司も緊張している。おおよそ三ヶ月前に来た時と同じだ。だいたい、緊張するなというのが無理だ。
二人は緊張の面持ちで中に入る。
正面の受付には、あの時と変わらない女性が座っていた。
両脇にいる警備員も同じ顔だ。
その事に少しでも安心して、向こうが覚えているとは限らない。
毎日、多くの人と接しているのだ。三ヶ月ほどまえに一度だけ来た顔を覚えているとは思えない。
――が、
受付の女性は、誠司の顔を見るなりどこかに電話を掛け、すぐに受話器を置いた。
「すぐに来られるそうですので、しばらくお待ちいただけますか」
と、どうなっているのかわからずにその場に突っ立っていると、エレベーターのドアが開いて梢が出てきた。
どうやら、さきほどの電話は梢にだったようだ。
という事は、彼女は誠司の顔を覚えていたという事になる。
時間が経ったとはいえ、あの出来事は印象に残るものだったようだ。顔を覚えられて顔パスで大丈夫らしい。
それとも、今回は事前に連絡を入れていたからだろうか……。顔パスだといいな、と誠司は思っている。
「お待たせ。じゃあ、行きましょうか」
二人はエレベーターに乗り込む。
「宍神さん、今日、俺たちが来る事をあの受付の人に伝えてあったんですか？」
誠司は疑問をそのまま口にする。
その質問に梢は首を傾げる。
「連絡はしてないわよ。……そうね、しておけばよかったわね。ごめんなさい」
どうやら失念していたようだ。
「あ、いえ。そんな事じゃないんです」
話がよくわからず、梢は再び首を傾げる。
「そのですね……………」
誠司は疑問を梢に伝える。梢が頷きながら聞いていると、エレベーターは目的の階に到着した。
「それは、顔を覚えられたんでしょうね」
梢はエレベーターから降り、そのまま廊下を歩いていく。
「すごいじゃない。顔パスできるなんて、社員以外ではないんじゃないかしら」
梢は子どもっぽく言う。
「……まあ、そうですかね……………」
少し嬉しいような、くすぐったいような……不思議だ。
こんな場所で覚えられるという事は確かにすごい事なのだろうが、できればあまり来たくないのも事実としてある。
なんとなく緊張するから――という理由だが。
普通に生活していれば、入社しない限りはまず来ない場所……なのだが、改めて自分たちの環境に唾然とする。
「さあ、ここで待っていて」
と、応接室に通される。そして、梢はそのまま部屋を出ていった。
梢の部屋とは違い、三人掛けのアイボリーのソファがガラステーブルを挟んで向かい合わせに置かれている。
周りには観葉植物の鉢が置かれているが、全体的にはスッキリとしていて、広々とした印象を与える。
しばらく茫然と立ち尽くしていたが、そのままにいるわけにもいかず、とりあえず座る事にした。
二人は並んでソファに座る。
「うわっ……………」
座った瞬間、誠司は思わず声を上げてしまった。予想以上に沈んだ。おそらくふかふかだろうとは思っていたが、それを上回っていた。
「すごいですね……………」
亜依もどうやっていいのかわからない。

あまり沈みすぎるのは座りにくいですが、これはそういう事ではなく、適度に包み込むような、なんとも不思議な座り心地だった。
(ホント、ここに来るたびに自分が場違いに思えてくるよ……)

と、誠司は心の中で独りごちる。

そうこうしていると、梢がトレイを持って戻ってきた。その上にはカップが三つ置かれている。中身は——コーヒーのようだ。
「淹れてしまっただけで、コーヒーでよかったかしら」

そう言いながら、梢は二人の前にカップを置く。

二人は恐縮して無言で頷く。

「まあ、気楽にして」

無理です。

「さてと——」

梢は自分の前にもカップを置き、二人の向かいに座る。

「——富所さん、あれから体の調子はどう？」

梢は早速コーヒーを含みながら訊く。

「……はい、なんともないです」

亜依は少し緊張しながら答える。まるで、警察で尋問されているような気分だ。

「そう。それはよかった」

梢は本当に嬉しそうに笑う。普段は仕事の関係上厳しい表情をしているが、こうしている時だけは自然体で接している。

「ところで、今日はどういった用かしら？」

なんの用件もなく誠司がここに来るはずがない。梢は世間話はさておき、本題に入る。

「……その……」

誠司は言いにくそうにどもる。

「——MLCがあれからどうなったのか知りたくて……」

梢は黙ったまま、誠司をじっと見、コーヒーを一口飲んで、

「本音は、MLCに行きたい……でしょ？」

屈託のない笑顔で言う。

「……」

誠司は言葉を失う。凶星だった。

神崎璃織魚の許可なく能力を使う事は禁じられているため、勝手に行く事もできない。特に罰則があるわけではないが、あまり破りたくもない。

「正直言ってそうです」

誠司は観念して素直になる事にした。

「どうなったか知りたいというのも本当です。でも、亜依をもう一度、MLCに……」

そう言って亜依を見る。

「……」

亜依は黙って俯いている。

亜依を引き合いに出しているが、誠司としても一度行ってみたい場所である。これは純然たる好奇心だ。

世界の情報を統括する場所——どういった所なのか見てみたい。実際に見れた亜依が羨ましい。

それにももちろん、亜依をもう一度マスタープログラムとセイバープログラムに会わせてやりたいという気持ちもある。

「ダメ……ですか？」

亜依が訊く。

「そうね。ダメってわけじゃないわ。でも……あまり行かない方がいいとは思うわね」

その答えは予想していた。

確かに誠司もそれは思った。

あまり能力を使うべきではないという事もある。それに、MLCは崩壊から再生という状態にあり、危険とまではいかないまでも、情報が混乱している可能性がある。

また、今回のような事にならないとも限らない。

普通の世界ならまだしも、そういう中枢にはあまり行かない方がいいのも事実だ。

それらの事はわかっている。

が——それでも行ってみたいという気持ちがあった。

「わかりました。すみませんでした」

断られるとは思っていたが、その時は素直に諦めようと二人で決めていた。許可が下りる可能性は限りなくゼロだとした上での行動だった。

「やけに素直ね」

その返答に梢の方が驚いた。

「予想してましたから。ダメ元で来たんです、俺たち」

「断られるだろうって……。もしかしたら、そう言われてやっと諦める事ができると思っていたんだと思います」

そう——未練を断ち切るために、二人はここに来たのかもしれない。そして、これで決心できた。

「そう。なにせよ、無茶だけはしないでね」

それから、二人はコーヒーを御馳走になりながら雑談をして帰っていった。

「まったく……誰もオレたちを心配してくれないのかよ」

亜依の病室に遊びに来た舜平が愚痴る。

実際、二人が目覚めた時、側には誰もいなかった。

誠司に同行していた梢は、医師に問題の解決を報告に行っていた。

「そんな事はないぞ。綾乃の事は心配だったからな」

誠司はニタニタと笑う。

「誠司さん」

そんな誠司を亜依が諫める。

「大丈夫だって。俺は亜依一筋だから」

誠司は、それをヤキモチと受け取る。

「……そ、そんな恥ずかしい事……」

亜依は顔を真っ赤にする。

「まったく……結局、オレは無視か」

舜平はいじけるしかない。

「綾乃もなにか言ってやれよ」

と、綾乃に話を振るが、綾乃は病室に来るなりお見舞いのプリンを黙々と食べていた。

「ん？」

プラスチックの使い捨てスプーンをくわえたまま舜平を見る。

「いや、なんでもない」

舜平は色々なものを諦めた。

どうせ自分はこういう役なんだ、と。

「それにしても、美味しいね、このプリン」

綾乃は嬉しそうにプリンを食べている。

誰もお見舞いに来ないので、綾乃たちの病室には当然ながらこういうものはない。様子見のために入院しているだけなので、いたって健康だ。

長時間眠った状態だったので、最初の頃は動くたびに身体が痛かったが、今ではそんな事もない。

健康なのにこうしているのは退屈でしょうがない。

検査検査の毎日というのも煩わしい。

三食昼寝付の生活ではあるが、あくまでも病院だ。

病院食が美味しくないとはいわない。むしろ美味しいと思う。こんな病院食なら毎日食べたい。

だが、それを退屈と引き替えにしていいものだろうか。

どう足掻いても入院患者である事に変わりはない。

病院の中に娯楽施設があるわけなし……。

暇が欲しい欲しいと思う日常だが、いざこうして時間を与えられるとどうしていいかわからない。

入院ではなく、普通に外ならなにかする事もあるだろう。長期休暇なら旅行に行くのもいいかもしれない、お金があればだが。

楽しみといえば、こうして亜依の病室に来てみんなで喋る事くらいだ。あと、お見舞いの品の物色。

「だろ？ ……………って、なに一人で食ってんだよ。亜依のために買ってきたのに……」

見ると、冷蔵庫に入れて冷やしておいたプリンはまだ一個しか残っていなかった。確か、六個あったはずだ。

そのまま視線をゴミ箱に移動させる……………と、そこには四つの空の入れ物が。そして、綾乃の手にも一個。

「……………お前、食べ過ぎだ！」

誠司は綾乃が持っている食べかけのプリンを奪おうとする。

「ちょっと、なにをするのよ」

綾乃は必死にそれを守る。

「なにもくそもねえだよ。一人で全部食うな！ せめて一個だろ、普通。遠慮ってものを知らねえのかよ」

病室だという事を忘れ、二人は室内を駆け回る。

看護師に注意されるまで、あと二〇秒。

亜依はゆっくりと目を開けた。

見えるのは白い天井。

聞こえるのは機械音。

匂うのは薬品の匂い。

感じるのはぬくもり。

おおよそ三ヶ月間眠っていた彼女は、ゆっくりと覚醒していく。

まだ頭がぼんやりとするが、それも徐々にすっきりしていく。まるで朝靄が晴れていくように……。

止まっていた時間がゆっくりと流れ始める。それはまるで、雪解けを迎えた小川のように――

「亜依……」

その優しい声の方に目を向ける。

そこには、今にも泣きそうな自分の母親――梨架がいた。その脇には父親の史和もいた。彼もまた、泣きそうな顔をしている。

大切な娘が三ヶ月近く眠ったままだったのだから無理もないだろう。

たまたま病院に向かう途中に誠司から電話があり、亜依がもうすぐ目覚める旨を伝えられた。それから急いで病院に向かい、ずっとこうしていた。

どれだけこの瞬間を待ただろう。

なにもかも誠司に任せてしまい、自分たちはなにもしていない――そんな親でもいいのだろうか……と悩んだ事もあった。祈るしか出来なかった事が無念だった。

どんなにお礼を言っても言い足りない。それは、仕事があるにもかかわらず、亜依を目覚めさせるために奮闘してくれた梢にも、だ。存在する感謝の言葉を全部言っても足りない。どれだけ感謝を伝えても伝えきれない。

「お母さん……お父さん……」

亜依の声に力はなかった。

ゆっくりと起き上がろうとしているのだろうが、なかなか思うようにいかないらしい。

ずっと体を動かしていなかったのだ。気持ちでは起き上がろうとしても、肉体がついていかない。低反発のマットレスに寝かせられていて床擦れはないが、起き上がる力もそれに吸収されてしまっている。

「ゆっくり寝てなさい」

梨架は起き上がろうとする亜依の肩を優しく押さえる。

亜依はそれに従い身体を倒す。

本音を言うと、なんだか眠い。ずっと眠っていたから余計に眠いのかはわからないが、とにかく眠い。

精神的に疲れているからかな……と思っておく。

本当に眠い。

でも、ここで眠ってしまったら、また眠り続けてしまうんじゃないか……なんて事あるはずないよね。

うとうとと舟を漕ぎだした時、

「亜依！」

あまりにもこの場所にそぐわない声で誠司が飛び込んできた。

全力で走ってきたのだろう、肩で息をしている。

病院で走るのはダメなのに……。大声も。

それでも、嬉しいのに変わりはない。

会いたかった……。

「亜依……」

目覚めている亜依を見て、誠司は一気に脱力した。床にへたりこむ。リノリウムの床が冷たくて心地いい。

「誠司さん……」

亜依は最高の笑顔を誠司に向けた。

どれだけ待ただろうか。やっとその笑顔を見る事ができた。感無量とはこういう事をいうだろう。

嬉しくて嬉しくてどうしていいのかわからない。だけど、言わないといけない言葉がある。ずっと言いたかった言葉。誠司はなんとかその言葉を紡ぐ。

「…………おはよう」

Fino.